明治三十二年四月十日發兌

女鑑

第百七拾八號

東京國光社

女鑑第百七拾八號　目録

佐藤こく女



習慣

性相近し、習相遠しとて、善人、惡人、賢人、愚人、君子、小人、其の性もと異なれども、大方は相似たるものにて、たゞ習によりて、とほくたがふにいたるものなり。かの孟子を見よ、幼くて市に住みしとき、孟子賣買の事をなして遊びたり。寺のほとりに家を移したりしに、孟子祭葬の事をなして遊びたり。之を學校の傍に移せしに、孟子書をよみ、物を書く事をなしてあそびたりと云ふ。その後遊學して、一秋家に歸りけるに、母その故を問ふ、學のおもしろからぬ事をつげたり。母おりかけし所の機を斷ちて以て之を誡めたり。孟子おどろき悔いて、夫より一筋に學の道に入り、遂に大賢人となるを得たり。孟子は大賢人なり。されども、其の性は人と異ならず。その母常人なりせば、孟子、商人となりしや、寺僧となりけるや、はた

學を遂げずしてなまいき學者となりしや分かざりしを、母あり、よく敎へ、よく習はしたればこそ、孟子大賢人となるを得しなれ。堯の子不肖、不肖と雖、國を舜にゆづりて又爭はず、舜の子不肖と雖、また禹が國を奪はむとせず、孔子が子伯魚かしこからずと雖、又おろかならず、伯魚の子子產又道を尊びて賢と稱せらる。道を尊ぶ家の子は大方又道を尊ぶ、忠臣の子は大方又忠を尊び、孝子の子又不孝ならず。楠正成忠臣たり、其の子を敎ふるに忠を以てし、其の妻また之を習ひて又正行をさとしたり。故に正行無二の忠をつくして遂へぬ。新田氏また忠臣たり。子孫皆忠を以て終る。足利不忠なり。其の子又天皇にそむきぬ。北條時政狡猾なり。義時遂に國を奪ふ。源氏は人情少く、權略家多し。平氏略少けれど、情篤く、生死を共にしたり。忠、不忠、善、不善、大方に其の習によりて來るものにて、其の家の尊ぶ所のもの習となる多し。寶玉を愛するものゝ子又寶玉を愛す。藝術を尊ぶものゝ子は又大方藝を尊び習ひ。歌學を尊ぶ家の子は歌學を尊びまなぶ。藤原俊成歌人なり、定家また歌人なり。其の子、和歌に達せぬを歎き、晝夜勤勉怠らず、遂に歌人

となりたり。貫之の娘また歌をよくす、元輔の女また歌學をよくす、紫式部の父兄又學者なりき。加賀の千代、親は俗人なれど、其の家は表具の事を以て營とし、よき書、よき畫、また尊びうらやみし所なり。玉蘭の母は百合なり、百合の養母は梶子なり。光秀不忠なれど、其の妻義を尊ぶ。故に其の子細川忠興の夫人又不義を耻づ、學者、町人、百姓、職人、習によりてなるまた多し。士は死を惜しまず、其の子又劍をみがく、學者三代つゞかずと雖、馬琴の娘又著作をしたり。米屋の子はよく肥後米を分ち、農家の子は幼より植付の期を知り、大工の子又よく鉋削りし、杵屋の娘また三味を以て世を渡り、團十郎の子は又役者なり。これみな習によりて來るものにて、愛する所、敬する所、又習となるなり。姑をいたはる嫁の子は、嫁ぎて老母を輕んぜず、祖母を輕んずる孫の母は、姑を大切にせざる多し。之皆習にして、習又性となり、其の子良くなり、あしくなるなり。性は何處の國も、何時の世も同じなれど、たゞその世々、其の國々の習はしによりて違ふなり。とつ國は、偏に利を尊び、權を奪ひあひ、或は自由を尊ぶ、みな其の性となれり。ひとり我が日

の本の國はあからず、いにしへより皇統連綿として、みな御國を尊び、君を敬すれは、おのづから、忠君愛國の習、性となれる尤もめでたき習はしならずや。家庭を治むるの女子、いよ〳〵此の習はしを以て性とし、ます〳〵君に忠、國を敬愛せむ事、我等の偏に望む所になむ。



論説

兒童訓練は胎敎に始まる

風湍子來稿

其友を見て其人の性行の善惡を知るを得ると共に、兒童を見て其家庭、其父母の性行を知るは、尚、一層容易なることは前述の如し。抑、兒童訓練の初に遡れば、婦女の胎敎を以て根本とす。何となれば、兒童は胎内にありても、生活を維持する限は、無意識に幾多の事物を經驗するものなればなり。而して、其經驗は、六官に依り、外界に接して爲すにあらず。母の身心二者の影響によりて、間接に外物を經驗するものなり。彼の磐昌

高家の女が、夥多の龜を見て、五たび龜胸傴僂の兒を生みたるが如きは、胎兒の間接に龜形を經驗したるに由る。恰も兒童が、訥者を學びて口遂に訥となり、跛者に倣うて足遂に跛となることなし。只、前者は母の媒介により、後者は自己の、直接に、得たる經驗に他ならず。世の母は、其子の惡習に感染するを見て之を憎み、力めて去らしめんとす。然れども、胎兒の惡習に感染するを見て怪まず。換言すれば、母自身、日常の行爲を顧慮することなし。兒に對する愛なるもの、呱々の聲を擧げし時に始めて起ると云ふが如きは、禽獸も尙等しく爲す所にて、人間母子の愛は、胞衣を蒙る時に既に存す可きものなり。然るに、現今多くの婦女は、胎兒の愛を解せず、偶ゝ之を解するあるも、肉體の願望欲心は、道德の知識判斷と衝突し、兩者鬪爭の結果、道德の觀念は、遂に殘忍なる獸王、肉欲の足下に踏み付けらるゝに至る。殊に、若年の婦女に於て著しとなす。豈、三省せざる可けんや。

世には、難産を恐れ、自己の危險を免れん爲に、懐姙の際、身心二者を攝養する者あり。之前の肉欲の奴僕となりて放縱し、遂に身を傷け、兒を害ふ者に比すれば、仝じ私欲の中なれども、稍稱讃す可き者なりとす。何となれば、胎兒は間接に、其安全幸福を得可きを以てなり。然れども、私欲は飽まで私欲なり。夫、胎兒は、一私人の所有にあらず。

我が祖先の遺物にして、其一家の愛兒なり。更に、廣く之を云へば、國家の愛兒なり。私欲を以て處置する者の如きは、道德上、根本思想の大誤謬者と云はざるを得ず。例へば、水に溺るゝ兒童あり、悲鳴を揚げて救を行人に求むるに當り、甲者は憐愍の情禁ず可からずして、直に之を救ひたりとせん。又地を換へて、乙者は、報酬を求めん爲に救ひたりとせん。甲乙兩者は、等しく兒童を水中より救濟したりといへども、兩者の心情を觀察する時は、大に徑庭あることを見る。之と仝じく、自己を愛する爲に身心を養ふも、胎兒を愛する爲に身心を攝するも、其結果、或は一ならんとも、德義は、決して私欲に左袒することを許さず。

然らば、眞に胎兒を敎ふる方法如何といふに、泰西に依りては此方法を見出すこと難し。強いて、彼の胎敎と名づくるものを擧げなば、前述の如く、自己の私欲を完うせよといふに過ぎず、毫も、胎兒訓練の義なし。之大に東洋の敎育法と異る所なり。東洋にありては、遠く數千年の昔より、胎敎の行はれしを見る。其法、別ちて、體德知の三育とす。試みに、大戴禮列女傳の示す所によりて之を說かん。婦女の子を姙む時は、寢て側せず、座して邊せず、立ちて跛せず、邪味を食はず、左道を履まずと。之、即、胎兒をして、軀幹の端正を、暗々裡に經驗せしむる所なり。又、割、正からざれば食はず、席、正しか

らざれば座せず、目に惡色を視ず、耳に淫聲を聽かず、口に傲言を出さず、手に邪器を執らずと。之、即、胎兒をして覺官の整美を經驗し、後に邪惡を無意識に遠ざけしむる素地にあらずして何ぞ。又、夜は則ち經書を論じ、朝は則ち禮樂を講すといふ如きは、胎兒の心意に、道德上の知識を、無言の間に傳ふる所にあらずや。嗚呼、我に斯の如き良教ありしも、當今全く世人の忘るゝ所となれり。教育といへば、兒童が言語を解する時より起算し、甚しきは、幼稚園の時期に始まることゝなし、尙、兒童を前にして、非行至らざる所なし。眞に、胎兒を顧慮して、自己の肉欲を制止する者の如きは、曉天の星と共に稀小ならんとす。豈、猛省せざる可けんや。記臆せよ、胎兒は純白なる糸の如く、母の性行によりて、時々刻々、善惡是非の色に染まんとすることを。

女德のをしへ（三十四）

三輪田眞佐子

第五　風采を修むべし

物の美と人の美と同じきものなるか。そもそも物の美は形狀、及び色采など、多くは外表に止まるものなれども、人の美はこれと趣を異にして、精神の影響を受くることも少からざれば、たとひ面貌の美ならざる人にても、おのづから風采の美なるものもあるべし。蓋し身と心とは相關係するを以て、風采を高尙にせんときは、勢

ひ心も高尚に感化すべし。且つ人類と他の動物と相異なるところは、人格あるを以てなり。然るに、人の風采は亦人格の高下をトするに足るものなれば、愼まざるべからざるなり。

孔夫子は、位を過ぐれば、色勃如たり、足躩如たり。擯を攝げて堂に昇れば、鞠躬如たり。亦共に立つところのものと揖すれば、手を左右にして衣の前後襜如たり。趨り進めば翼如たり。と論語にあり。そは夫子の容儀にしあれば、以て聖人の風采を見るに足るべし。おのれ、今日、女子の風采を見るに、輕擧に失するものあり。あるは卑屈に流るるものあり。いまだ威儀棣々選ぶべからずといふに足るものを知らざるなり。されば、亦女子の風采を養ふも肝要ならんか。

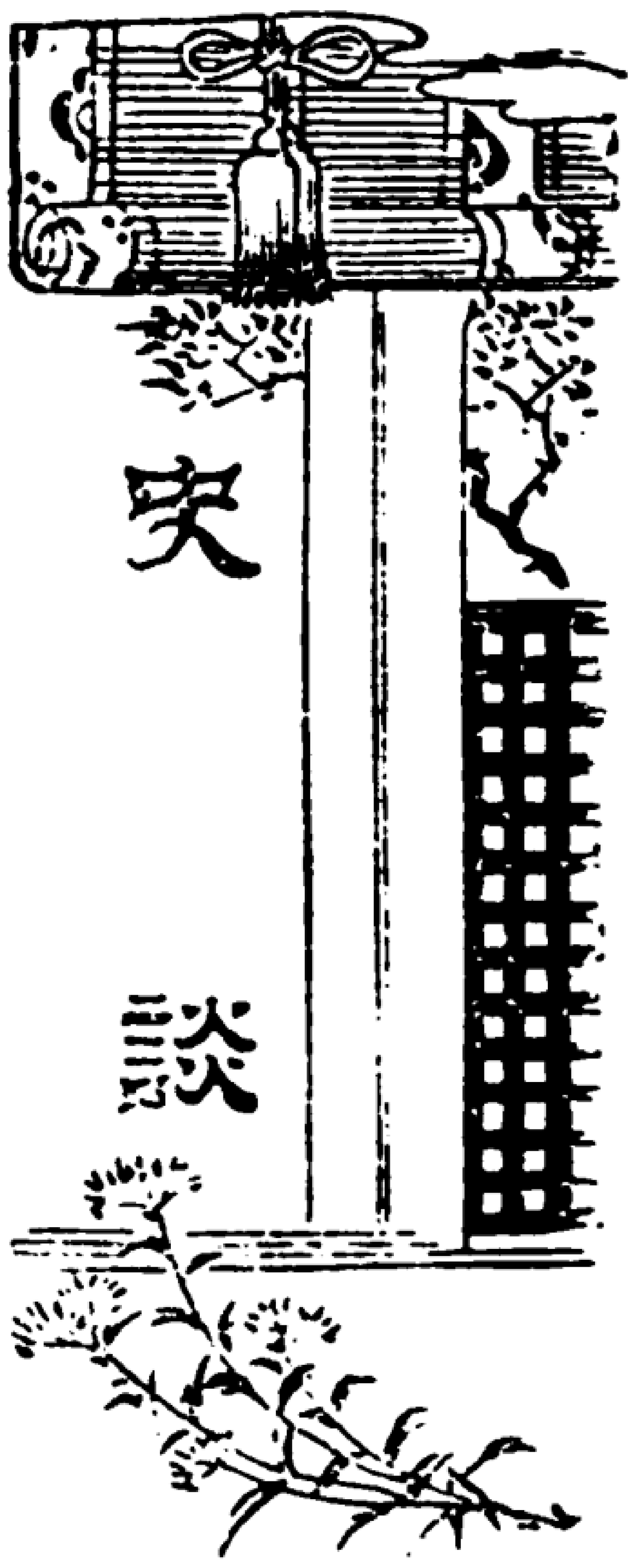
凡そ威と和との兩德を具ふるこそ、女子の風采を修むる標準の一と數ふべけれ。元來女子が醜辱を蒙り易きは、威の備はらざるに始まるべし。亦老者を安んずること能はず、婢僕を服すること能はざるは、和の備はらざるに由るべし。故に、女子たるものは、常に威と和との一を欠ぐべからず。但し威とて、豪慢を指すにはあらず。和とて、柔弱を言ふにはあらずと知るべし。

風采を以て、單に外容を修むるものとなす誤りぞ。世には往々、錦衣を着け、粉黛を施し、

以て風采を修むるなりと思ふめるものあり。されど、風采の高尚にしてゆかしきは、反りて質素清雅にあり。決して奢侈華美にあらざるべし。おのれが師紅蘭女史の詩句に、(滿城桃李競芽辰。有似粉々輕薄人。)とあり。實に己れは、輕薄の風采を惡みて止ざるなり。されど、蓬髮を厭はず、亂裝を顧みざるを以て、天眞爛熳と誤解する勿れ。女子は女子に至當なる風采を養はざるべからず。禮記に、婦はかざらされば舅姑にまみえずとあり。なは、女子は、一般の人に對しても、至當なる風采を守るこそ良けれ。おのれの友松尾たせ子、嘗て國事のため縲絏の禍にかゝりたりけるとき、從容として髮を結び、衣を正して補吏に從ひ行きけり。しかのみならず、その日常の風采も非凡なりけり。

古語に、君子は容貌愚なるが如しとあり。そは、君子はわざとならざる相狀あるを言ふなり。若し故意に外形を作りて高尚らしき風采をするものあらんか、識者の笑を免れず。亦世の流行を追ひて、異樣の風采をするものあらんか。小人の憐を得るに過ぎざるべし。

更に風采を修むる他の標準は、敬と律との兩位を具ふるにあり。敬は守一無適の義なれば、身に敬を懷くものは、侮の乘ずべきところなし。律は擧止動作に規矩を與ふるを以て、見る人をして犯すべからざる念を起さしむべし。從ひてこの二者は、相待ちて風采の美をなすに至らん。



佐藤とく女

鹽井ふく子

云ふなかれ、明治の世に孝子なしと。貞女あらじと。げに古の貞女節婦にもまさりたる女をこそ得たれ。新潟縣南魚沼郡三用村大字雷土の民、佐藤庄吉の妻にて、同郡伊米ヶ崎村大字干溝なる駒形長次郎の三女なり。人となり孝貞温順にて幼きより父母の庭の教にそむかず、萬延元年、年二十にて、庄吉に嫁ぎたり。はじめとく女が佐藤家へ嫁がむとするや。佐藤家、家いたく衰へ、資産も大方失せて、朝夕のいとなみも豊ならざるに、姑は痛風症を病みて起居も心にまかさざるに、庄吉が兄は安治郎とて、人となり愚鈍にて自活の道を知らず、別居して、給を兄に仰ぎぬるに、庄吉と父とは短氣の性質にて、やゝ平を得ざるときは忽ち怒風を起し、疾風を生じ、萬雷はえ亘りて、波風の絶ゆることあらざるに、とく女が、此處に許嫁の約成りけるや、親族、知人、おどろきて、交々來りて、佐藤家の内情を説きて、破約せしめむとせしかど、とく女は堅く義をまもり、父母が教るまに〳〵佐藤家に嫁ぎぬ。庄吉、家世々農を業とし、又鍛冶職を營みけるが、人の言偽りならず、家計ふるはず、貧窶云はんかたなきに、不如意短氣の姓をいよ〳〵高めて、舅怒り、夫爭ひ、姑泣き、修羅のちまたもかくやと思ふばかりなり。とく女偏に徳を守り晨にとく鶏鳴に先き立ちて起き、夜は漏つくるまで寢ねず庖廚の事は云ふまでもなく、紡績、機織、裁縫凡そ女子のとるべきことは更にも云はず、夫を助けて鐵をきたへ、夏のあつき日、汗をもぬぐは

ず田に耕し、冬の寒き夕べ、山に樵り、重きを負ひ、危きを踏む男子も及ばぬばかりなり。殊に蠶を養ひ、力をつくして繭をとり、良好の蠶種を製する事に心を碎き、夏の長き日、汗拭ふ間を惜みて働けば、冬の寒き夜火にもあたらず業をとり、曉にてつするを知らぬばかり勤勞に暇なき中より、舅姑を奉養する甚だ篤く、身體不隨の姑を介抱すること五ヶ年、舅亦中風症にかゝり、半身不隨となりけるに、とく女はあつく之をいたはり、舅姑が衣食起臥より、兩便の始末たゞ身一つに引きうけ、その食を奉ずるや、己れ箸を取り、一口づゝ之を哺し、若しあまれば己れ之を食し、夏熱に窓を開きて淸風を入れ、床を扇ぎて涼をとらしめ、冬寒には懷爐を作りて抱かしめ、夜半玄む〱起きて溫度を加減し、先きに姑が足をさすれば、後に舅が腰を揉み、夜半實に衣帶を脫かず、枕を高うせず、もし身體垢つけば抱きて浴せしめ、衣濕めれば更へて服さしめ、舅姑、室居に飽くときは、巳が脊に負ひて庭園を逍遙し、或は筵を地に敷きて居らしめ、野に出づる時は、舅姑が調度を其の傍に調へおき、日に幾度か宅に歸り來りて、その安否を問ひ、要を充たして復た出で、鍛冶をなすときもまたかくして、片時も心は舅姑に居つかぬはなく。又姑は蠶兒の成育を見る事を好みぬるに、とく女養ふ所の蠶兒の箔數百を順序に一枚づゝ病室にはこび入れて、其の眠起、給桑等の樣子を一々說明してたのしましむる事、一日に二回又三回、舅姑をたのしましむるを以て己れがたのしみとし舅姑が事をとりては、つゆ其の勞、其の時を惜しまず、又、舅姑が欲する所は財を惜しまず之を購ひ充たしめぬ、而してとく女、性淸潔を好み、勤勞かばかり暇なき中にもよく衣類の洗濯し、つゞれを補ひ、病者をはじめ、家族の者へつゆ垢つき破れたるをつけしめず、家屋の內外、庭園の掃除等とゞかぬくまなく見る人感せぬはなかりけり。されど舅姑が事をとりてはつゆ汚穢をいとはず、元來舅は體量重くて、女の力にては動かし

能はぬにより、病室の内に便器を設けて、用便せしめ、其の器は毎朝とく女必ず掃除なせども、汚穢臭氣甚だしくて、おのづから鼻を撲ちぬるに、家族の者、之を厭ひ、戸障子を以て之を避け隔て、病室に入るものなきぞかりなる中に、とく女は絶えず出入して少しも厭はず、あまつさへ、夜は其の内に臥して絶えず舅姑を介抱するに、舅姑、或日、とく女に向ひ、我等かゝる病にて、萬事汝が手を借れど、汝家政を營むの時間少し、かくては終に糊口に窮して、野に伏し、人の門に立ちて憐を乞ふに至るべしと云ふに、とく女ははゝ笑みて答ふるやう、さやうの心遣ひ決してなし給ふな、此の頃家計は日に豐に成りゆきたれど少しく貯へたれかんものとて、昔と同じく儉約を守り侍るのみ、もしたとへ、糊口に窮するに至り候共、妾、ひとり近村をめぐりて、袖乞いたし侍るとも、御兩方には御不自由はかけ侍らじ。返す〲安心し給へと云ふに、舅姑、其の孝養の志にいたく感動して、涙を流してよろこびけり。かくて、姑病ふこと七年にて遂に慶應二年正月、みまかり、舅病床にある十三ヶ年間、明治五年五月、黄泉の客となりける後は、花を供し、香を手向け、彼の世のとぶらひねんごろにせり。とく女、又よく夫をなぐさめ、夫その性一徹短慮にて、些少の事にも激憤すれど、とく女は、之に逆はず、偏に、柔順を守り、一度も抵抗したることなく、かつて庄吉病にかゝり貧に迫りて所有の地を賣りけるが、其の中なる同村地内字京中の内なる久保田と云へるは、祖先より讓りうけたる地なれど人の手に渡さん事祖先へ對し面目なく、ふがいなしとて、庄吉衾中に涕泣して曉に徹せり。とく女、之をいたみ、それよりはひときは業を勵み儉をつみ、遂に餘財を得て、久保田を買ひ收め、其の證劵を夫に示したりしに、庄吉、且つ泣き、且つ謝して曰く、既に久保田を買ひ戻し得たれば死すとも憾みなしとて、いたくよろこび、それよりは絶えて怒りを發せざりしとぞ。とく女、實に、親切に、柔順に、ひた

すら齊和の道をはかりしかど、さしもはげしかりし波風もなぎはてゝ、そよとも云はずなりぬ。後明治十五年夫庄吉、病にかゝりぬるに、とく女之が介抱怠らず、衣帶を脱がざる三年、見る人、其の介抱のやさしきに泣きて感じけるとなり。然るに天命なりけむ、庄吉遂に明治十八年、歸らぬ旅に赴きたる後はとく女、堅く貞操を守りてうきたる行ひ更になく且つ大方寡婦の貞節を全くせざる者あるに、夫死して後、心をゆるむるに由れぞなりとて、日に三省して身を守り、毎夜寢につく時は、必ず亡夫が寢所に向て拜禮して後に臥しけり。

とく女、儲けし所の子六人あり。長男を梅太郎と云ふ。庄吉つねに曰く、梅太郎は不肖にして我が家を嗣ぐに堪へず、兄安治郎に類すと云ひけるに、とく女深く之を憂ひ、毎朝毎夜、神佛に祈念し、且つ、ひそかに梅太郎を敎誨して、やまざりしが、梅太郎後成人して、父が家督を嗣ぎ、遂に三用村村會議員、および雷土銀行取締役を兼任するに至りぬるも、偏にとく女が訓誨の致す所と云ふべし。

又二子を良吉とて、嘗て、兵役に當り、途に就くや、とく女、村はづれまで送り行き、傍の人に語りけるやう、我が家貧苦の中に、六兒をあげたり、亡夫死に臨みて、三兒の事を以てふかく我に遺囑せり、今六人の子ながら幸に健にして、次子は公役につきぬ、夫がわれに遺囑せしものゝ其の任を全くせり。他日地下に良人に見えむ、先づ之を以て告んとて、よろこび色に溢れたりとぞ、後良吉、砲兵曹長に任ぜられ、三男利作又兵役に就きぬ。とく女いよ／＼よろこび、諭すに、忠君愛國を以て男子の本分となさしめ、且つ、其の兵役につくや、内に妻子を顧慮することを慮り、深く彼の妻子をかへり見て、良吉をして、安んじて職に精勵せしめぬ。又日清の戰起るや、とく女、衆に先だちて、金壹圓を献ぜんと願ひ出で、又、毎夜、己の定課を終りて後、藁を打ち繩を綯ひ、之をうりて金を調へ、

承認をうくると共に納めたりと云ふ。其の義心大方かくの如し。

又床吉の兄安治郎には、日夜食を送り、衣を供し、家事を補助すること己が家に於けるが如く、懇到至らぬくまなし。其の家失火して家を燒きたる二度に及びしを、とく女、偏に之をなだめて、家を作り、調度を給しぬ。又安治郎の妻、瘡毒にて、全體腐爛し、膿血流れ、臭穢近づくべからざるに、とく女はいとあはれに思ひ、己が家に迎へとりて、懇に介抱しけり。幾ばくなくして其の人世を去り、安治郎またみまかりけるが、とく女、又之をも篤く看護せりと云ふ。

とく女、つねに道德の談をきくを好み、識者に遇へば必ず其の道話を請ひ、又村內に說敎あれば、必ず之に赴きぬ。かつて三用村尋常小學校敎員の一人夜學塲に於て、經書を講話せしに、とく女は、つとめて行きて之を聽き、且つ人に語るやう、無學の者講筵に赴く、人或は之を笑はんも知らざれど、妾思ふに、無學の者はど、聽講の益あるべし。又妾、年已に五十歲を超えて此の如くするを笑はんが、古人も、朝に道を聞き、夕に死すとも可なりと云はれしにあらずやと云ひ居りしとぞ、此の如きを誠の學を修むる人とや云はまし。とく女、實に內には堅貞剛毅の氣節ありながら、外は偏に婉容愉色つねに溫言を以て人に接し、叱咤の聲犬馬にだも及ばざりしと云ふ。されば、數代つゞきたる不和も治りて、一家和樂に日を送り、子孫一族みなとく女を敬慕し、近隣近鄕はめそやさぬはなかりしとなり。事遂に公に達して、褒章給はりしと聞きけるが、明治の婦女が鑑となさまほしさに此處にかくはものしぬ。

貞婦阿仲と孝女淺野

川島白鷺

美作國苫西郡院庄村は、元弘の亂に、後醍醐天皇の隱岐に遷幸あらせ給ふ御道すがらの行在所、即ち、

かれ兒島高德が滿腔の赤誠を櫻樹に題して奉りし所にして、今また余が傳へんとする二女が孝貞の譽を遺せし處にぞありける。

あはれ、忠臣の門に孝子出づといへるも宜や。爰に島田馬之丞と云へる者の妻仲女は、同國勝山の藩士某が女なるが、生得溫柔、夫に事ふること貞實にして、一女淺野を敎へ育み、夙に賢女の聞え近隣に高く、一家何不足なく、花月の間豐富に消陽せしが、榮華は春の夜の夢の如く、擧村並ぶ者なかりし島田氏も、世は泡沫の浮沈常なく、不虞の災害に家俄に衰へ、かてゝ打續く饑饉に、物價は著しく暴騰せしより、今は一家三人が口を糊するたづきさへ覺束なくなりぬ。

さる程に、母子は、朝は星を戴きて起き、夜は殘月の西山に落ちなんとする頃まで、手內職など稼み、まめまめしく働きて、些少も辛苦の色を面に表はさず、馬之丞を慰め、貧窮の間にもそが好めるものなど調へ侑めて孝貞を盡しけるに、道の馬之丞もいたく己が身の働きなきを愧ぢ慨くと共に、母子が苦勞を視るに忍びず、如何にもして二人が艱苦を少うせんと思へど、身には何とてとる業もなきに、終に善からぬ心を起し、竊かに某家の酒糟若干を盜み取り、是を金に代へ、早く母子を喜ばしめんとて持ち歸りしに、母子はその故なきに金を得たるを怪しみ、氣遣ひて尋ねけるに、こは往昔我家に恩ある某より借り來りしなりとて言ひ紛らしけるが、程なく事露現れ、馬之丞は遂に囹圄の人となりけるより、母子は魂消えんばかりに驚き悲しみ、生來多病の老の身が、いかで牢舍の艱苦に得堪ふべき、必ず生命を全うする事難かるべしとて、母子は共に官に訴へ、身を以て馬之丞に代らんとせしに、その親戚なる治作と云へる者、種々母子を慰めて、懇に其願ひ事の許さるべきにあらぬを諭しけるに、母子は力なく、互に手を取り交し、痛哭して止まざりしが、其夜遂に書置一通を遺し、庖刀を以て自害し終んぬ。時これ實に文久元年四月廿九日なり、其遺書の文に曰く、

一筆申上まいらせ候ちゝ馬之丞此たび御うさんにて御上さまの御くろうに相成おそれおふくぞんじ候此ぎは馬之丞にては無御座わたくしにて御座候間はいだにてかい申はいつはりいよ〳〵わたくしにて御座候間おやこのものぢがいいたし申候間何とぞ御上様の御なさけくだしたまはり馬之丞なわといて御めしかへし被下候よふ一ねに御ねがひたてまつり候まことに馬之丞此きさんねんはちうぶとかんえやうにて上口のばせ申事何やら相わかり不申なを〳〵おそれおうく候まちがいの事申上候ても何とぞ御めん可被下心えたがいのぎわ馬之丞にては無御座おやこのものに御座候間何とぞ馬之丞御うさんはらし御めしかへし可被下候びうえんものゆへえんるい中えせわいたしくれ候よふに御頼申上まいらせ候まことにいろ〳〵と申馬之丞をだましもちあるかせ候だん御ことわり申候御ねがいのとふり御頼申上候

馬之丞

むすめ　あさの

つま　中

つ山御やくにん中さま

あゝ孝貞譬ふるに言なき二女が、一點これ血、一句これ涙を以て書き遺されたる願書には、如何なる無情の郷吏と雖も潜然たらざるものあらむや。即日馬之丞は釋されて家に歸りつ。やがて前非を悔い、妻子が非業の死を悲しみ、自ら髮を剃り、同村清眼寺といへるに入り、懇にその菩提を弔ひけるとなん。記すもめでたき二女が擧動は、むかし唐士の三人の孝子が行ひにも勝して、露おとるまじと、永く後世に傳へて姫鑑と爲さまくとてかくなん。





家政

茶の湯

孤峰菴祿仙齋不羨
關 葦 雄

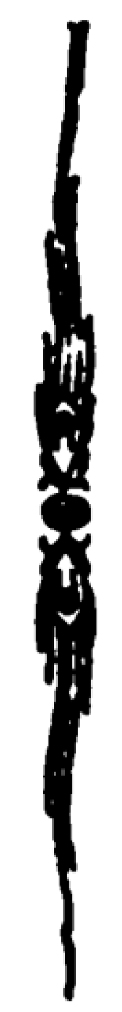
(但し此薄茶點るに先立、客方より箱書付類を拜見致し度旨を亭主方へ申乞べし。主方は一應は辭すと雖、再び望まれたらむ、茶入は挽家の蓋、及、袋、箱の蓋、茶杓、筒箱、茶碗の箱、掛物水指の箱類、都て書付傳來有之、或は極札添、簡等取揃持出、上容へ渡すべし。上容は是を一々拜見して次客へ廻す、次客は又見て三客へ廻す、若又書付中不解廉々あらむ、主方へ質疑すべし。主方は又懇切に答辨すべし。

客方は是を見聞しながら、懷石付へ書留べし。必此手控をなさゞれむ暗記しかたかるべし。是茶道の一古實なり。故に、矢立、又は鉛筆の類を携帶すべし。此書付順序も大に習有之、次號に可示、道具書付廻り終らむ、末座より亭主へ返却すべし。此書付を見るには、時代の新古墨色の眞疑、最鑑識家の器量を要する所なり。暫時閑話ありて茶會は二時に過べからずと云利休居士の遺訓あれむ(則今の四時間なり)程能見計ひ、暇乞をなすべし。雖然法話淸談時移制外と云敎もあれむ、茶を心掛る人々は是をも意底に收め置べし。扨今日は御茶戴き、難有存升、御亭主樣にも嘸御勞れ可被遊、御後禮にも上り升がと云て挨拶して歸るべし。歸路は庭上よりするも、座敷よりするも、其時亭主の都合に任すべし。座敷よりする時は玄關迄、路次よりするならむ外路次迄送り出づべし。次に亭主方は、客歸路半途迄往たるを見斗、跡の片付方をなすべし。釜を上げ、炉火を

取、火氣消し入、鎮火すべし。釜は湯をあけ、能洗ひて蓋を取て炉に掛け、濕氣を乾すべし。水指の殘水を翻すべし。茶器の殘茶を明けて裡を拭ふべし。灰炮烙の灰を灰溜へ戻すべし。茶巾、茶筌を能洗ひ絞るべし。茶巾盥の水を捨べし。其它水屋の品々を片付置べし。懐石の具は臺所にて能洗ひ、清ふき迄して合紙に包み、外箱に仕舞べし。品目は爰に不揭、先是にて茶の湯の一會は盡したり。尚詳細は實地の道場に付て、口傳を受くべし。特に薄茶を廣間に披きて振舞時は、小異同なきしもあらざれど別に云べし。

新撰結物百種

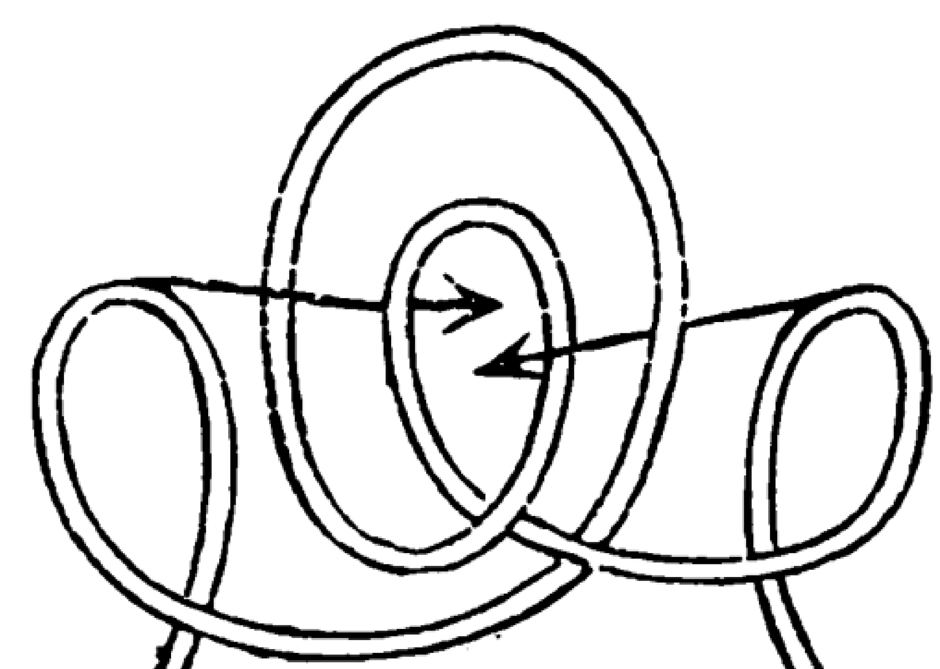
百草庵一無



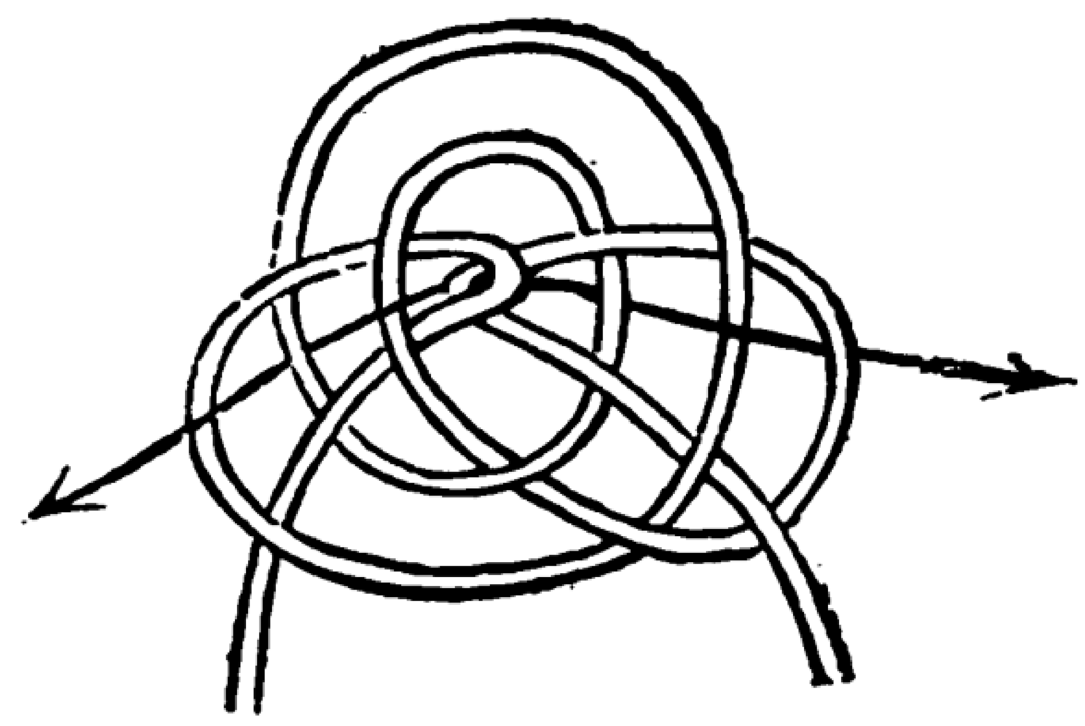
蝶結 30

當世は幕の紐等に用ゐてよしと思ふ。結の記には琴の袋に付る蝶なりとあり。琴の装束飾ともいふ。

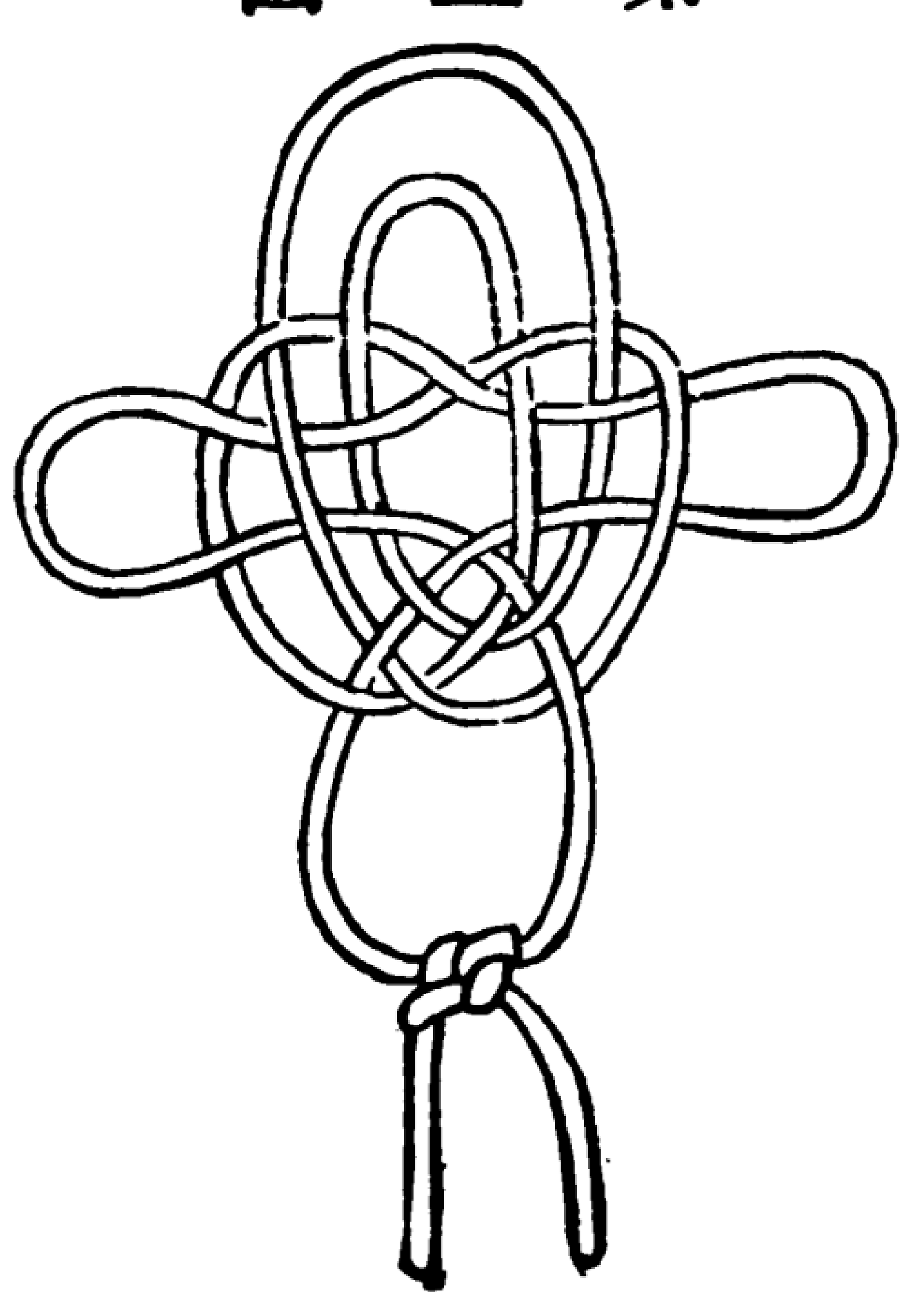
第一圖



第二圖



第三圖

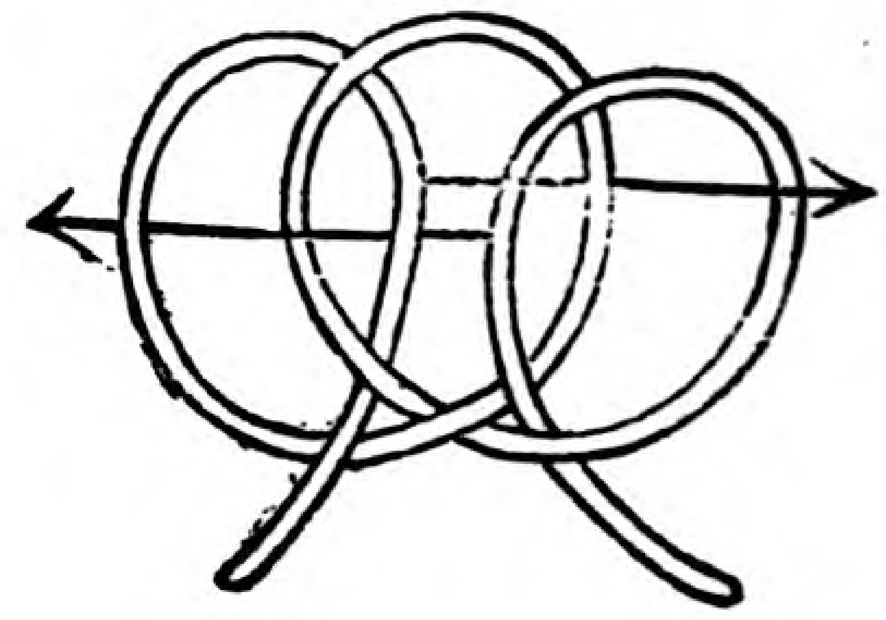


結ひ上り

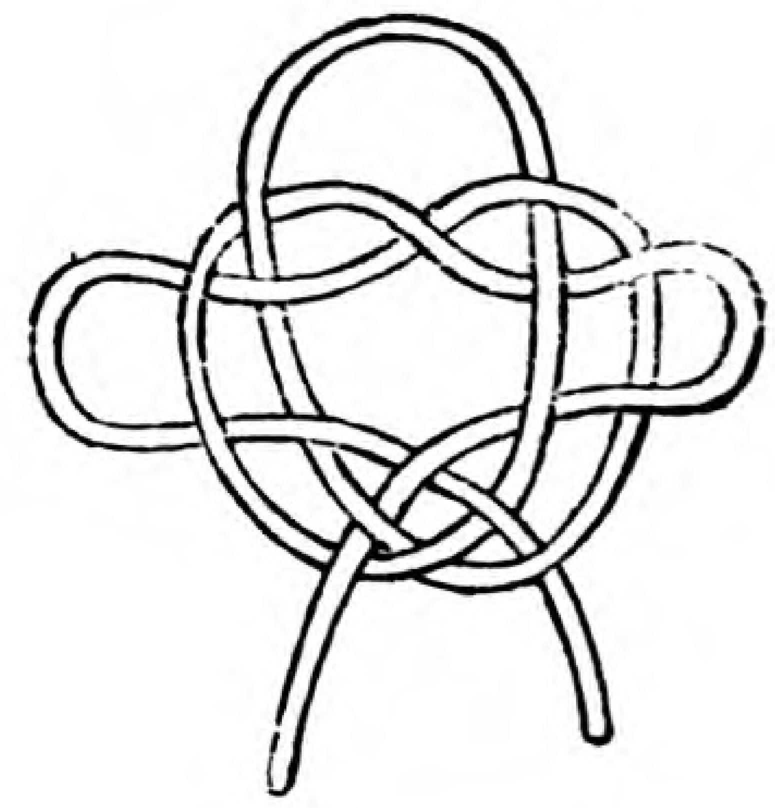
四ツ菱結 31

是は前に出したる「けまん結」の房の所のみ左右を通すなり。

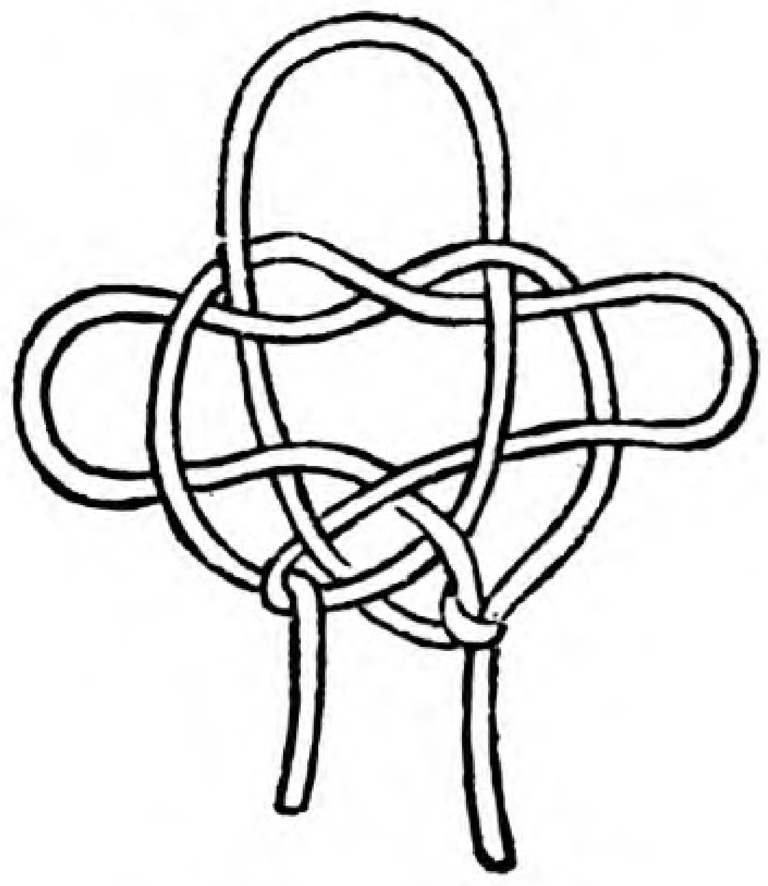
第一圖



第二圖



第三圖

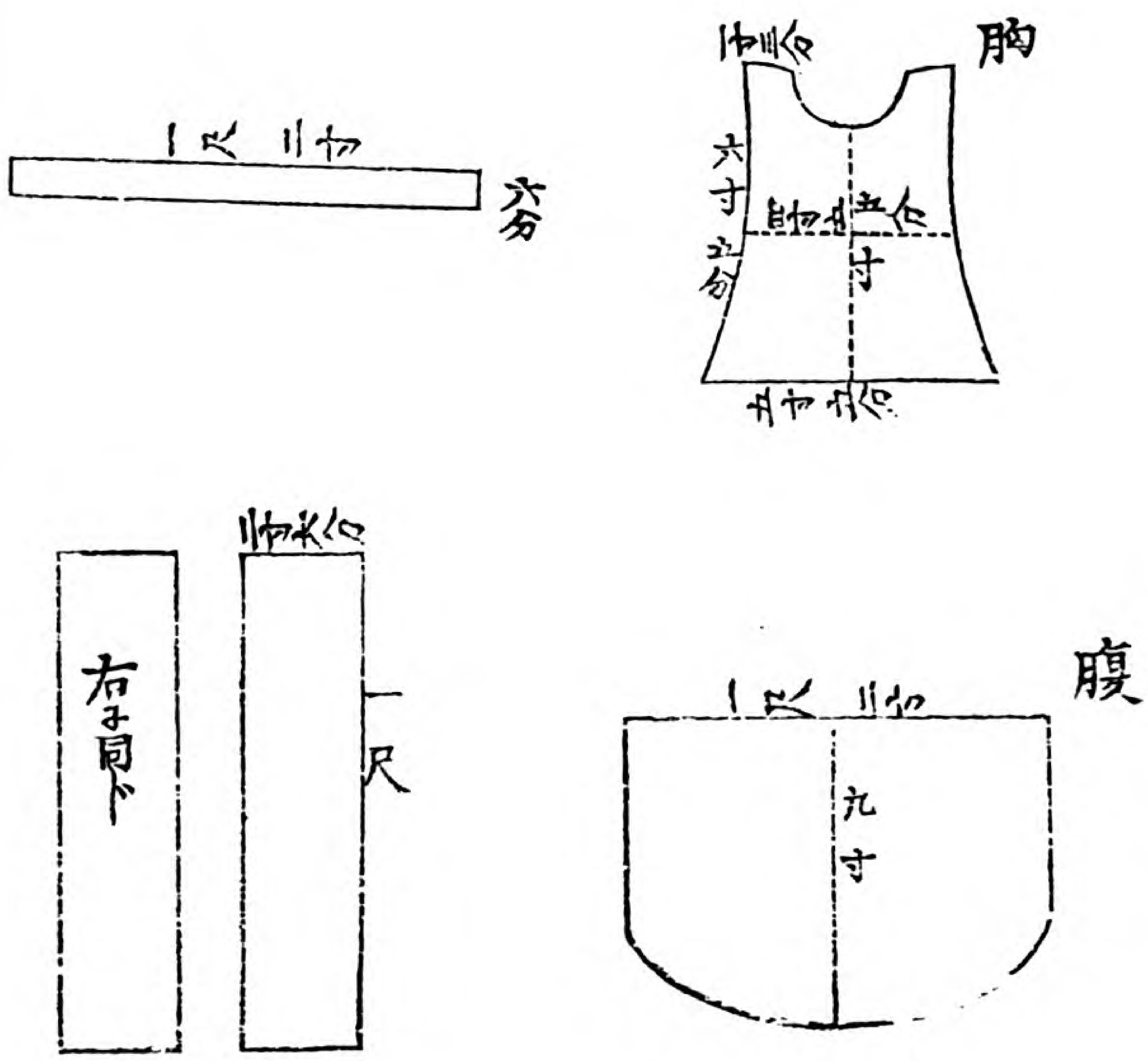


結ひ上り

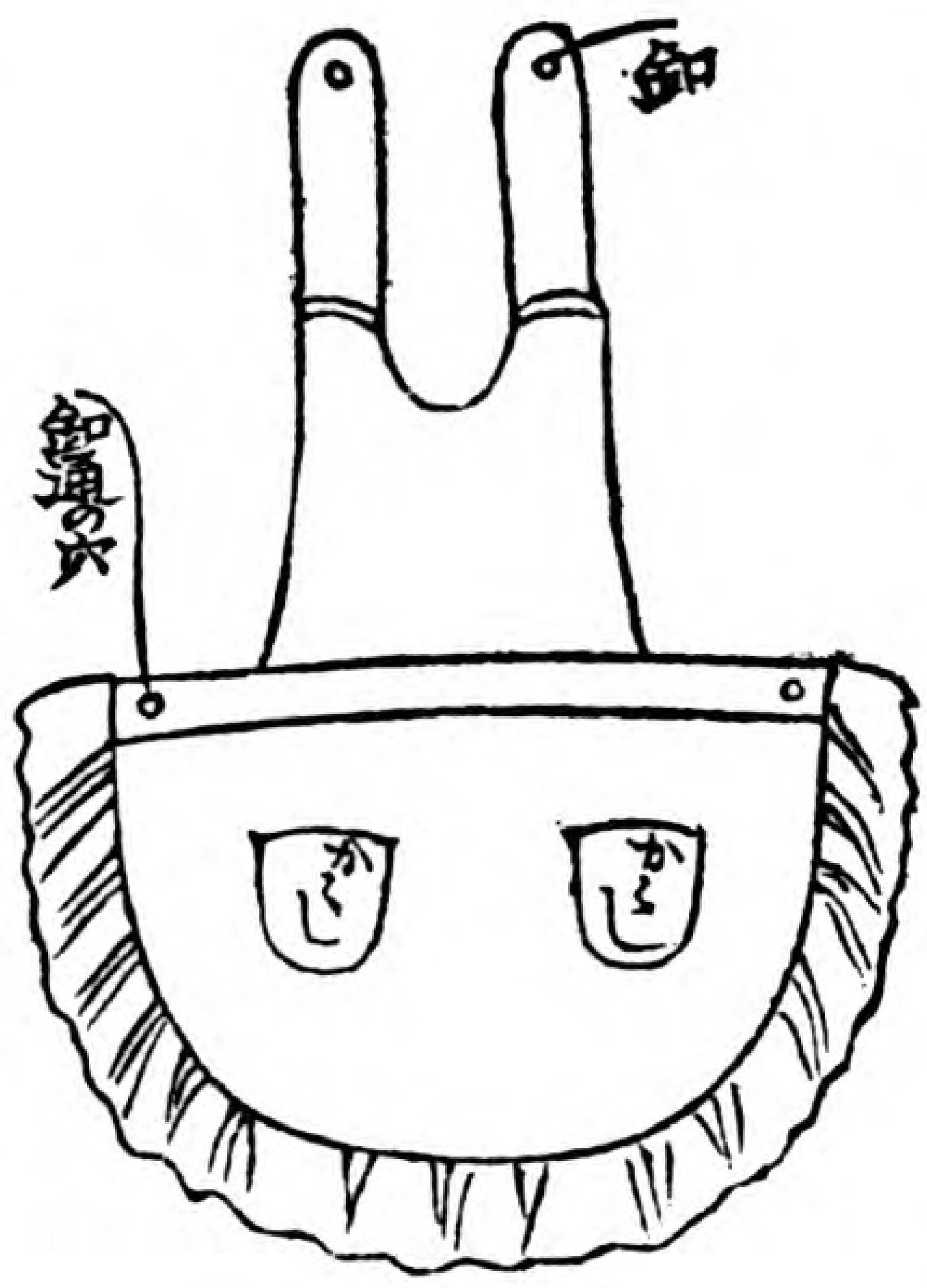
たちぬひ

(百七) 胸かけ

西山たい子



まづ圖の如く白き切をたち、但し胸にあつる方は、裏表二つを裁つべし。又それに巾一寸、長さ四尺五六寸の切と、かくし切二つとを要す。
まづ胸にあつる方を裏表合せてぬひをき、また腹まはり、切のまはりに、長さ四尺五六寸の切をちゞらせ、ひだとりてぐるりとまはりにぬひつけ、胸當の切の裏側にぬひつけ、其ぬひつけたる表側に巾六分の細き切をくけつけ、長さ一尺の切をたて二つに折りて紐となし。胸切の兩方の上にはぎつけ、かくし切をよろしきやうにつくるべし。よく圖を見てさとり給ひてよ。



だいどころ

精進料理のくさ〳〵

蓮根卷

蓮根の四隅を去り、何本も組合せ、干瓢にて卷ながら葛粉をふりかけ、かたくまき、胡麻油にてあげ、味淋と、醬油にて味を付け、能程にきりて用ゆ。

石燒豆腐

先づ、豆腐を一寸四方、厚さ三分程にきり置、燒鍋に油を引き、武火にかけ、あたゝまりたる所へ、前の豆腐をのせ、うちかへし、能程に燒たる時、大根おろし、生醬油にて用ふ。

芝蘭豆腐

白味噌を能く摺り、こまかにきざみたるねぎを、胡麻油少しを加へ、よく摺り交せ、古酒にて能程にゆるめ

煮て豆腐を能程にきり、湯煮えておろし、大根に前の味噌を添て用ふ。



百合根丸蒸

百合を鹽水にてあらひ、蒸籠にて蒸器に盛り、食鹽を散布して用ふ、又百合の蒸たてのあつきうち、砂糖を澤山かけて用ゐるも佳し、又椀盛に用ゐるには、混布の煮汁をとり、味淋醬油にて鹽梅し、葛粉を投れ、薄あんとなし、百合の上にかけ、おろし山葵をのせて、出す。又つゆものには、混布だしに、食鹽醬油にて鹽梅し、器に盛、つゆをかけ、木のめ抔いれて用ゆ。

百合根酢あへ

百合根をむしり、能洗ひ、まはりをむき、さつと湯煮し、水氣を去り、山葵酢味噌にてあへるなり。



秀歌集（四十三）

鹽井正男

○

あかなくに袖につゝめむちる花を　うれしとおもふに成りぬべきかな

○之は千載集春の下部にある歌にて、權大納言實國が詠めるなり、○あかなくに。なくはぬをのべて云ひしにて、飽ぬにとの意なり。

○一首の意はあかぬ故に、散る花を袖につゝめむ、ちる花をうれしと思ふやうに成るわいとの意にて、をしむ心の切なる汲まれけり。

○

雨ふれでを田のますらをいとまあれや
　苗代水を空にまかせて
○新古今集春の上部に、勝命法師が清輔朝臣の許にて、雨中苗代と云ふことをよめるなり。○苗代。稲の種を蒔きて、稲の苗をつくるを云ふ。○勝命法師。俗名を親行といひ、佐渡守親賢の子なり。○を田。田と云ふことなり。をは、語調を助けむために添へたる詞なり。なは、簾をを簾といひ、野をを野といひ、山田をを山田と云ふ如きをの類なり。○ますらを。益荒男にて、男を強くほめていふ詞なり。○いとまあれや。いとまあるかなといふことにて、やは感動をあらはす詞なり。○苗代水。苗代に用ふる水なり。○一首の意は、雨がふる故に、田をいとなむ男子は、いとまがあるワイ。苗代にいる丶水をも、空まかしめて、自ら水をひき、水をせき入る丶に及ぞねぞと云ふことなり。

○

をりにあへぞ之も流石にあはれなり
　小田の蛙の夕ぐれの聲
○之も同集の歌にて、忠良が蛙をよめるなり。○をりにあへぞ、○をりは臨機の事など。時にあへぞと云ふ意なり。○流石に、しかすがの意なり、○あはれなり。あはれむべき事、いたましき事など、悲しきなど身にしみ亙る意をあらはす感動詞にて、なりは、語をつよめたるなり。小田は前の歌にあり○夕ぐれの聲、夕ぐれの聲を云ふなり。
○一首の意は、此のもの丶あはれの夕ぐれの臨機にあへぞ、小田に泣て居る蛙の聲までがしかすがにあはれに身にしみて悲しく思はるよとの意なり。

○

ならふなよとにかくに世の人こ丶ろ
　ふたれもてあるこの手がしはに
○之は草野集雑の部に、荷田春滿が柏をよめるなり。
○習ふなよ、見習ふなかれとの意なり。○とにかく

に、となりかくなり、ともかくもなどの意にて、どうわれとの意なり、○この手柏。○ひのきの屬にて、人の掌の如きものにて、背面あるものにて、面も、背も、同じく緑なり。故に兩面ありと云ひなせり。
○一首の意は、世の人心は、とかくうつり安き者と云ふが、人の心はたとへ移り安きとも、どうなりとも、己れは、あの兩面ある木の手柏を見習ふなよとの意にて、柏を見て、人の心をいましめたるなり。

布美安波勢（四）

白松園主人寄

三月

わらびをる女かたみひきさげてあり

左　持　徳

うら〳〵と霞みわたる春の山に、もえいでたらむわらびをりてんとて、はか〴〵しき道もなきそばづたひを、たどる〳〵ゆきゆくまゝに、いたくこうじてあゆみがたけれど、うちねんじつゝ玄ひて物するに、谷川のかなたに、いとなまめきたるをみなの、ひとりふたり。イトヲカシゲナルかたみにいとをかしげなるわらびどもつみいれて、おなじさまにやすらひたてるをなんみつけたる、うれしともうれしかりけり。されど物いひよらむも谷へだゝれど、いかゞせんとそなたをのみ、打ちまもりてありつるほどに、ゆふぐれの鐘の音はるかにひゞきわたりて、くらうなり行くまぎれに、いづちゆきけんとも玄らずなりぬるは、いたうくちをしかりけり。

右　保世

外のちりなん後といへる山ざくらは、まだ盛ならんと東山にいたりて、おくふかくわけいるに、松ふく風もさびしく、谷の水れともかすかにきこえて、心をすます法師などの、かゝるところにはれはすらんとおもふに、さはあらで、花の木蔭にかたちいときよげなる女

の。かたみひきさげわらびもて立てり。友にやわかれけん、道やまどへると、いひよりければ女、山ふかみ人もすさめず此春もかひなくたてり峯のさわらびと、なまめきたるさましてこたへけるは、ぬしはあらずと、心ときめきながら、もしはへんぐゑなどの、かくわらはれてまどはすならんとおもへど、かしらのかみもふとるこゝちしけり

評判　ひだりみぎりの文、ともにおもしろし。すこしのきずも同じやうなり、持とす。

四月

人の家にたちばなあるところ

左　勝　　重豊

春におくるゝ花もやと、あらぬみ山のおくにさへあくがれいりにたれど、きよくも青葉になりもてゆきて、は山しげ山しげかる中に、花橘のみひとり物よりしるくて咲きたり。そのかをりをしたひつゝ行く谷蔭にかすかに人の住みつけるけはひしたる岩垣あるを、いともあやしうてかいまみたり。さらによにいひしらずふるびたれども、古たいのよしあるさまの家に、みづはくみたるおい人の物わびしげに、窓の内にながめゐたり。さてかの橘は前栽めきたる所の、所もせに大きなる木にて、その木のもとによしありげなるいしぶみあり。苔むし蔦はひて。所々かくろひたるを、おしはかりによめど、いつまでもわすれぬたねとうゑたきて此木のもとに世をばつくさむと、よみたるを、ふときゝしりたるにか。いとあはたゞしきやうに、ひき入りたりと見えしが、山風吹きあれたるに、たゞ物にけとられたるこゝちして、こゝらみし物どもたゞうせにうせはてたるは、いぶかしともいぶかしきかぎりにて、むねさわがるゝをねんじつゝ、よくおもへばきつねこだまのたぐひにはあらざめり。むかしのたぢまもりといひし人の、せちなる心のこりて、此花のときにはなほかゝることのあるにこそ。

右　清風

日ごろ降りつるなごりの雨すこしそゝぎて、をかしきほどに月さし出でたり。嵯峨のわたりをせうえうしけるに、道のほどいとえんなるほどのゆふ月夜なれど、いとゞ木高きかげども、こぐらう見えわたりて、いと小家がちにむつかしげなるわたりの、むね〳〵しからぬ軒にたてる 橘の、風につきてさとにほふがなつかしく、そこはかとなきかをりなりけり。かゝるあれたる家に、いかなる人の住ならんとむかしを忍ぶるにか、ほとゝぎすをまちつるにかいかさまにもゆゑあらむ、たづねきかまほしけれど、いひよるよしのなければ、いと口をしうも過ぎけるになん。

評判　左の文はいとたくみにめでたし、いさゝかのきずはあれども。右の文ははじめのほどは、詞いと〳〵めでたきに、いかなる人のといへるわたりより、いたくおとりてつたなし、まけなるべし。

左　保世

ものへ行くに、つくりざまをかしき家有りけれど、立じよりてすいがいのひまよりさしのぞくに、庭の木どもわかやかに青みわたりてをかしき中にも、橘はほとゝぎすのよすがに植ゑられけんと、あるじの心ざれしはからるゝ。花のかつ〳〵咲きそめたるにも香さへくはゝりていとめでたく、朝露にぬれたる櫻にもれとらじと、清少納言のことの葉思ひいでられて。

右勝　徳

郭公きゝがてら、山ぶみしてつれ〴〵をなぐさめむやと思ひたちてゆき行くまゝに、道のほとりちかく流れたる谷川のかたそばに、柴垣ゆひわたしてよのつねならずめづらかにしつらひたる所ありけり。庭の梢どもいづれとなく、おしなべて見どころ有りける中にも、橘の木のいとをかしきほどにしげりあひて、物にもにず、いみじうかをりきつるからうばしさに、いたう心ゆきて、こゝろざしの所をば、ほと〳〵わすれにけり。

評判　左右の文とも、おなじはどのことなるに、詞つかひのすこしいたらぬくまある左のかたぞまけぬべき。

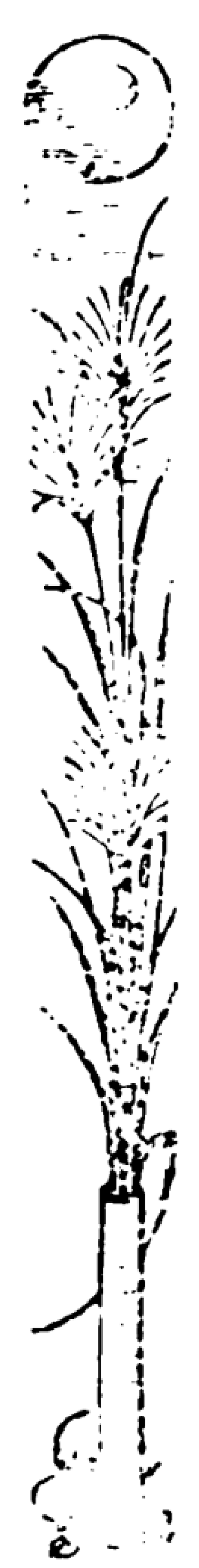
左　祝之

さとかをれる籬の、あやしう過ぎがてにみやれど、なつの木立ども庭もせにひまなくさしさかえたるかたへに、花橘のものより蔭ふかう、軒のつまゝでおほひひろごりて、さかりに咲きみちたり。風のしるべもうれしうたれどかりの人か、からあはれに住みなしたらん。心みにあないするに、このあるじおどろきたるさまにて、けふしもめづらしう、いかなる風の便にかと打ちつけにうらみ出たる、ふとおもへどはのゞあひしりたりける顔つきなり。けうさめうむねつぶれたれど、さまよくいらへて、いでその便はとちかういざりよりて、もろともにむかしわすれぬ心とてはな橘のをりにてこそとへと、いひなすもしたにをかしう。

右勝　尙文

ものよりかへるさ、にはかに空のかきくもりて、ゆふ立のさとふりきたれど、あたりのよしありげなる、かやふける家の軒に立ちよりて、とどかりたゝずみゐたるに、まだなつもふかゝらねど、かみもいさゝかなりて、はれ行くなごりの風の、えならず打ちにほひたるに心づきてみれど、いと大きやかなるたち花の、さきゐたるなりけり。花は紫麝をくんず飄風のほどと、おもはえずずんじたるに、さうじ明けゐたるわらはべの枝には金鈴をかけたり、春雨後と、いひたるはあるじの心さへおしはかられて、いとゆかしうなむ。

評判　左右の文ともに、いとおもしろくかきえたり。たゞしけうさめうの詞、きずとなりて左ぞおとりぬべき。





教梯抄（續）

續拾遺集雜夏

家に十首歌よみ侍りける時夏草を

山階入道左大臣

くさ深きなつ野のみちに迷ひても

世のことわりぞ更にしらるゝ

新千載集夏

百首歌奉りし時夏草

左近中將　義詮

夏くさのことしげくとも玉ぼこの

みちたがはずぞ人もまよはじ

臨永集雜上

しげりあふ夏野のくさに思ふかな

世の人ごとのまとひやすきを

源清兼朝臣

家集

照射

秋の野につまとふ鹿をきかせぞや

ともしする男はこゝろなくとも

後京極攝政

家集

賤の男もともしに向ふしかを見て

ものゝあはれや思ひしるらむ

前大僧正慈鎮

新後撰集夏

建長三年秋吹田にて人々歌つかふまつりけるに

後嵯峨院御製

いたづらに野澤に見ゆるほたるかな

まどに集むる人やなからむ

新葉集 雜上

五百番歌合に

御製（後龜山院）

あつめては國のひかりとなりやせむ
わが窓てらす夜半のほたるは

千載集夏

百首歌奉りける時螢の歌とて
よめる　藤原季通朝臣

むかしわが集めしものをおもひ出て
みなれかほにも來るほたる哉

續千載集雜上

嘉元百首歌奉りし時螢　前大納言有房

あつめ來しまどの螢のひかりもて
思ひしよりも身をてらすかな

新千載集夏

康永四年六月仙洞にて三首歌講ぜられける時水邊螢といふ事をつかふまつりける　權大納言實夏

芹つみしひとのおもひや澤みづに
もえてほたるの影となりけむ

風雅集雜上

題しらず　惟宗堯吉朝臣

こゝろあらむ窓のほたるも身をてらせ
あつむる人の數ならずとも

延文百首

延文百首の中螢　權大納言忠季卿

ともすれば怠るみちのくらき世に
われをいさむや窓のほたるは

古今集夏

蓮の露を見てよめる

僧正遍昭

はちす葉のにごりにしまぬこゝろもて
何かはつゆを玉とあざむく

秋　十三首

新後撰集雑上

だいしらず

惟宗忠景

人ぞうきもとのこゝろはかはれども
ふる枝のはぎは今もさくなり

古今集秋上

題不知

をのゝよしき

をみなへし多かる野邊にやどりせば
あやなくあだの名をや立なむ

（以下次號）

みちのく紀行（三）

▲は補
●は誤

故僧　均月

五月朔日、白坂を出で行く、右のかたに、關山の道といふしるしの杭あり。朝よりくもりたれど、關山は見え侍らず。白川にかゝる道すがら、こゝかしこ、卯の花のさかりに咲けれど、

みちのへに咲く卯の花を分けゆけば
月と雪とのしら川の關

かの能因法師、秋風ぞふくとよみて名譽をあらはせし●▲し所なりとて、武田大夫、西行は、水干をあらためて通りけるよし、ふるき物にもしるしをかれ。又、頼政朝臣は、建春門院歌合に「都にはまだ青葉にて見しかどももみぢ散りしく白川のせき」とよみしを、俊成卿の判には、のう因法師の「秋風ぞふくしら川の關」といふ歌をきゝて、かやうによみいでん事、有りがたくは侍れなどとて、勝になされしも、道の高名にて侍ら

ずや、それよりこなた、都よりは、いとはなれたる旅の風情を、めぐらして、そのすぢによめる歌おほく見え侍るにや、されど、花紅葉などおほくよまれたる道地にて春秋の風景も、さこそとゆかしく侍れど、今は、夏山のしげみのみにて、目にかゝる氣色も侍らぬぞ口をしき。

　きゝわたる花も紅葉も夏木立
　　青葉をわくるしら川の關

やがて、しら川の城府を過ぐるとて、

　關山は雪にへだてゝふるき名を
　　こゝにとゞむるしら川の里

北のかたに、大河有り、橋よりわたる。人に尋ねけれど、これなん、あぶくま川の水上なりといへり。友とする人、ことの外に、をくれたれど久しく待ちわびて、

　旅人のゆきゝをそれとおふくまに
　　をくれし友をまてどすべなし

古歌は、「君をばやらじまてどすべなし」とよめることどをおもふなるべし。とかくして來りぬ、此のあぶくま川の水上を尋ねしかど、里人のいへるは、こゝより八里ほど西に、阿武隈の嶽といふ山よりながれ出で、仙臺のほとりまで、四十里あまり流れて、海に入るなりといへり。里〱をうち過ぎて、須香川といふ所にとまりぬ。

二日、小雨ふる。笹川といふわたりにて、牧の馬をあまた引きつれて、通りしを、友なる人のいへるは、此のうちには、良馬もあらむなどいひければ、

　今も世にしる人あらばみちのくの
　　すき?にちさとの駒もやはなき

晴まなく雨ふりければ、しばしうちすみける、里の名をとひければ、日出の山となんいひける。

　五月雨の雲間も見えず此の里の
　　日出の山てふ名にぞたがへる

小田原といふ所の右のかたに、富士に似たる山あるを、里人に尋ねしかど、うきかね山とこたふ。

年たかき身にたび衣かさねては
　うきかね山を見るさへぞうき

日和田といふ里の左のかたに、安積山東照寺といふ密院有り。あさか山を尋ねけれど、今すこし行きて、そこほどなりとをしゆ。あさかの沼をとひけれど、此の寺のうしろにて、今はみな田になりぬといふ。行くほどなく、右のかたに、すこしの岡山に、松一本あり。これなん淺香山といへり。まことに、陰淺きためしによまれたる所なれど、かくてそはと、うちながめつゝ過ぎぬ。

松一木たてる陰さへ淺香山
　あさくやはみん世に高き名を

淺香のぬまも名ばかり殘れるよし聞きて

尋ねても名のみ淺香のぬまなれど
　かつみんほどの影やなからん

もと宮、杉田などいふ里を過ぎて、道の澤田に、水鶏の鳴きけれど、

庵もなき澤田のおもの暮れぬまに
　あやしくゐなのなにたゝくらん

やがて、二本松にいたる。かねて二三の好士に、旅行のついでに、尋ぬべきよし契りをきしかど、龜が之坂、安西資有といふものゝ家にやどるべきあない有りて、かのがりにやどりぬ。その夜、木元廣一とぶらひ來て、歸路に立ちより、休息すべきよしなど約しぬ。安積山のことなど資有に尋ねけれど、道より三四里ばかり西に、ひたひとり山と俗にいふ所なりといへり。いかゞいぶかしく侍れど、歸路に尋ぬべし。夜ふくるまゝに、うちやすみぬ。ほどなく朝立ち侍るとて、

夏の夜はむすぶまもなきあだなみの
　あだちがはらの草のまくらに

此の城地安達郡なり。黒塚も近きわたりなりといへり。歸路に尋ね侍るべし。

三日、二本柳といふ里をさして行く。二本松の西に、高山つらなれり。安達が嶽といへり。萬葉の歌に「あた

ゝらのねに伏す鹿の有りつゝもわれむいたらむねをなさりそね」又は「みちのくのあたゝら眞弓絃て」とよめる、吾田多良といふは、此の山の古き名なり。後々の歌に、あだちが原にしらま弓をよめるも、この故なり。又、此の山に嶽の湯とて、よき温泉ありとなん。嶺のくま〲には、雪なを殘りて、すさまし。

夏とだにいざしらま弓はるこへて
あたゝら山に雪ぞ消えせぬ

山つき北のかたにおなじく高山有り。その山のうちに、富士山のごとくなる山有り。それをあづまのふじと俗にいへるとかや、頂には、薬有りて、つねにもゆるときは、煙みゆるとなん。福島の里を過ぎて、左のかたにはなれたる山つらなれり。人に尋ねけれど、信夫郡しのぶ山なりといへり。山の北のねを河ながれたり。此の河しのぶのこふり、伊達の郡のさかひといへり。むさし野をわけ出でしときは、「いつこえん旅の行衛の忍ぶ山」とくちすさびて、はるかにれもひしみちのくの旅の衣に、日數をかさねて、けふしも、此の山を尋ねみる事、いとうれしくればねて、

うき旅を心のうちにたへてこそ
忍ぶの山をけふはふみみし

此の山の名につきて、ぼさちの六度の修行にも、忍辱波羅密を第一にをき給へる事をおもへど、忍の字の關を通らずしては、禪定智惠にも、至りがたき事をれもひて、

うきことをたへて忍ぶの山にこそ
まことの道のおくは有りけれ

里のはづれ、東のかたに、もちずりの石の在所へゆく道有り。こゝより十八九丁有りとなん。歸路に尋ねて見侍るべし。さて此のしのぶの郡は、海邊にてもなきに、中古以來の歌に、「忍ぶの浦にやく鹽の」「しのぶの浦のあまのたぐなは」などよめり。かた〲いぶかしき事にぞ侍る。瀬の上といふ所を過ぎて、桑折といふ宿にとまりぬ。俗には幸折といへり。

四日、幸折を立ちて行く。道の左の方、山陰にそひて、出羽の國にゆく道あり。藤田といふ里を過ぎて、辨慶が硯石とて。五六尺ばかりの磐石あり。

弓筆の跡の世までものいふの
　硯の石に名こそくちせね

とロすさびて行く。道のかたはらより、五六町入りて、義經の腰かけ松といふ古松を見侍る。高さ六間ほど、四方へ十間餘、枝たれて、そのすがた、笠のごとし。木のめぐりみかゝへほどある姫まつなり。いかにも、四五百年をへたる木と見えて、奇異のものなり。曾根の松にもれとらぬ名木と見え侍る。

よしやよしつねなき世こそあはれなれ
　松に千とせの名は殘れども

それより、山路をこえて、伊達の大木戸といふ所にかかる。又、國見山ともいへり。遠望たぐひなき勝地なり。

わけのぼるこやみちのくの國見山
　なるさといらへ跡のしら雪

此の大木戸といふ所、西は高山つらなり、東は千町の田畠そこはかとなく見渡さるゝ所なり。山のなかに、ほり切りたる所あり。五里のあいにつゞけるとなん山路にかゝる。

こす川の名にながれても行手には
　袖つく程の淺き瀬もなし

山中に、古き沼ある所を、人にとひけれど、馬午の舘といへり。古城の地と見えたり。すべて、此所よりは、城地を舘といひなせり。此の山中、嶮路ならねど、松杉しげりて、鐙摺などいふ岩のかけぢなど有り。此の所下ひもの關の古跡なりと人のいひければ、

旅としもあらでこゝ行くおもふどち
　とげしこゝろの下ひもの關

こす川といふ所より、仙臺の領地なりとかや。白石より、勝田の宮のあいだ、左のかたに、高山有り。藏王が嶽といへり。白鳥の明神ましますゆゑに、白鳥が嵩

といへるとなん。高ねには、時しらぬ雪なほ殘りて見ゆ。

いかなれや五月もしらでをのが色に
　　きえせぬ雪のしら鳥が嶽

東の麓に、かまさきといふ所に、温泉侍るよし、ゆく道みえたり。金が瀬をこえて、こよひは、大河原といふ里にとまる。家々にふきわたし侍る。むかしは、此の國にあやめなくして、かつみをふけるよし、古き物にはしるし置きたり。今は、ひとへに、あやめをのみふきたり。

旅といへどあやめにあらでこよひしも
　　かりをねをかる草のまくらに

五日、大河原を出でゝ、舟はさまといふ所をさして行く、左の方に、大きなる岩ほそびへたる山のいたゞきに、にらかみ山とて、てるゐのたちといひし勇士の馬を乘上たる所なりとかたりぬ。二本松にて、しりたるむかりの關の舊跡を尋ねしに、此のにらかみ山を、かの關のあとゝいひければ、

みちのくや戸ざしせぬ世はゆきがひに
　　たれはむかりの關守もなし

槻木といふ所をさして行く。俗には、つきぬきといへり。此のわたりより見わたせば、あぶくま川いとひろく、はるかにながれたり。白河より、こなた、左にのみ見て、あるは山をへだて、里をへだて、日ことに見なれたり。すゑはほどなく、あら濱といふ海邊にながれ入るとなん、わたし舟さし行くも、いとおもしろし。

けふいかゞ山行きめぐりわかれては
　　あぶくま川のすゑのしら波

堤傳ひ、みなみはせといふ里のはるかに松一むらしげりて、小高き所を、東平王の墓なりとをしゆ。僧宗久が都のつとには、昔東平王といひし唐人のはかなりとかけり。又、大野巣人を、東平王といひしと、國分式次第といふ物に記したるよしを、ある人かたりぬ。いづれかまことならん。

道のへの露ときえにしあはれ世を
　　とへどこたへぬ古つかのまつ

うち過ぎて、岩沼といふ所に、たけくまの松あるよしをきゝつれど、道よりは、ほどある所なりといへど、歸路に尋ね侍らんとて、打ち過ぎぬ。中田といふ里を出で、名取河にかゝる。西より東にながれて、長橋うちわたしたるひろき石川なり。都のひがし河のごとく、いときよらなるながれなり。こゝなん、名とりの郡といへり。

みちのくやわきてなかにも名とり川
　　世にあらはれし瀬々のうもれ木

やがて仙だいのさし入長町といふ所にかゝり、はるはるとゆきて、國ぶ町といふ旅店にとゞまる。

六日、よべより、雨ふりて、朝はれけれど、瑞鳳寺、大淨寺、こゝかしこ見めぐりて、やすらひぬ。（以下次號）

こは古しへのふみのかけはしさなんいへる書にみ侍べる。あまりになかしき文なれは、貴社によせまゐらするになん、よはくなたまはらば、こよなきさちにこそ。

白さる物がたり（故荷田在滿大人文）

河野文子寄贈

もゝとせむかりむかしなりけるとかや、さがみの國に住ける人、にしの國にや事ありけむ、海路もとめつゝ、ゆかむとて、ともなふ人、三人四人も有けらし。ある港より船出してけるに、いとあらましきあかしまかせいたくたち來て、思はぬかたにふねをやりぬるほどこそあれ、たゞひと時あまりが程に、幾百里とも志ら浪にゆられつゝをゆけど、今やくつがへりて、千尋の底のもくづとやなりなむと、いと心細くおぼゆるに、とある島にふき出しぬ。猶はやちの吹やまねど、船の中にはとゞまるべうもあらぬ物から、いかなる島とも知らねど、人々きそひ上りつるに、島のたてよこはいくそくもあらねど、彼方の限まで殘りなく見はらかすに、

人てふものもなく、家てふものも見えず、木立ものふりてしげきに、浪風枝をならす音たかく、草原生ひつゞきてふかきに、みつしはなぎさをひたすこと遠し。げに、はからずもあやしき所に來にけるかなと、かなたこなた見わたす程に、ましらどもあまたひきつれて出きぬ。たけききざしなきけものなれど、むらがりつれど、いたくおそろしき心地す。此とき風のちからいささかおとろへて、浪のたけもやゝひきくなりゆきぬれど、人々またふねに打のりぬる、中にさがみなりける人は、島のこのもかのも見つゝありきけれど、ひとりのり遲れてけり。人々は猿のかしこさに、しづ心なく漕出るを、其ふねかへりよせねとよばへど、駒の耳吹く風に聞なして、まかぢぬきおろし、はるばるこぎへだつ。いかにうるはしかりしもわすれて、かくは捨てつゝをゆくこと、恨むるこゝろも浪風のみさそひて、いまはたが耳にか入ぬべき。かくてありはつべきにもあらねど、もろこしの蘇武がいにしへ、我國の俊寛がむかしのためしもあれど、いかにもしてうゑをまぬかれ、こゞえをしのぎて、またいたらむふねのたよりをこそたのまめど、やうやうに悲をおさへ、しひて思を慰め居つるを、猿ども、ことゝふ事は得はねど、さし聲して、誘ふかたありとしるしいかならむもしらねど、さそふまにまに行ぬるに、晴やかなる洞に入りぬ。洞の中に一つの白猿住めり。これなん猿の長なるとしられて、こゝらましらどもつきしたがひかしづくさまなり。ややありて其白き猿。あまたの木の實を取出して得へつ。かの人飢たれど、喜びてとりはみぬ。かくてより、白猿かの人を洞の中にとめおきて、日ごとに、つとめて起つゝ、くさぐさの木の實をとりきて得へけり。此猿女の猿なりければ、かの人といもせの交りをなんなさむことをねもごろにこひけるに、あさましと思ふ物から、いたくうとみなど、この後いかならんもはかり難くて、心より外にむつましくあひ渡りけれど、猿はいやまし心をつくし、志をはこび、あさなげにあさり

して、はごくみ養ひける。月日ふるまゝに、猿みごもりにけるが、つひに子猿を生み出ぬ。かの人は猿にかしづかれて、木の實をはみ居けれど、いたくも飢やらず、洞にかくろひて、露霜をさゝへぬれど、またこゞゆる事も無りき。されど、人ならぬものと住わたりて、あさましき事かぎりなく、故里訪れたへて、ゆかしき事やる方なし。いかなる日のいかなる時か、此島により來る舟いかだありて、浪に浮びなば、再び歸り得る事も有なむものをと、朝に夕に繰返し、心の糸の思ひ亂れをれど、きのと明し今日とくらして、島の松風とことゞに響く聲のみ耳にみち、胸をふたぎぬ。しかのみならず、猿かた時も傍をはなれやらねど、あはれながら、はたうるさく、木の實かり出行く程のひまにのみぞひそかに、濱邊に出つゝ、青海原を見渡せど、沖つ浪恐ろしく、濱松風音喧びすしく、日の出る方を東とはさとれども、我故鄕はいかで何れの方ともわくべき、思めぐらせど、心細さのみまさりて、とみから見つゝをるに、みづしはにかくれぬ沖の石ならでは、船にまがふべき影だに見えず。かくてやこゝにくちはてぬべきと思へど、身にかこち世を恨みても、誰ありて言葉を聞わかつべきものもなけれど、語らひて心をやるたづきもあらず。只日毎に濱べにたゝずむをのみ、己があした夕のし業となし居けるに、此島に到りてより總て三歲ばかりにもなりぬらんとおぼゆるころ、つとめて、猿は常のまゝにあさりに出、かの人もきのふまでの如く濱邊に立ち居るに、いかなる國の舟にやありけむ、これもわが如く風をいたみ吹はなたれしと見えて、島の磯際近く漕ぎ渡るあり。見るに心もとびたちぬべく、聲の限を擧げて呼ぶに、漕よせてけれど、身のあらましを語りもあへず、疾く打乘りて、ひたぶるに急ぎ漕行むと乞ふるうちに、かの猿、子猿を居て出きぬ。こゝらの猿も皆縱ひ來て、かの人の舟にのれるを見て、かへし寄せねと言どへに、たゞさけびに叫ぶ聲濱風にたぐひて、浪の上遙々耳を連らぬく許りなれ

ど、などかは漕かへるべき。かぢのまにまにや、遠ざかり行ど、白き猿泣てはふし、おきては叫び、赤き顔むせいやてりそひて朝日に輝き、手をあげ、足をつまだて、苦みまろびけるが、今は及ぶずとや思ひけむ、をたけびしつゝ立あがりて、傍なりける子猿を抱きて、千尋の底に入けるとなむ。これは我友小泉何かしが幼なかりし程に、八十路あまりの翁、さがみなりし人とうるはしかりしが、聞得つるよしかたりけるとぞ。心なきけものながら、なれぬる別の悲しびにたへずして、身をつくしつるいとせめてあはれなれど、たはぶれにしろ猿にかはりて、船をしたふときの心を

こぎかへる舟ははるかのなき出し
　けさのわかれとしらざるぞうき
なかなかにうきを猿のちぎりかな
　みざれるあはざるむかしこひしも

元文末のとしのみな月望の夜たはふれにしるす

儒林歌評

赤松景福

こは儒林中和歌に關れるものを、所見のまゝ記出て、世の詩文に耽りて、我國風に疎きものゝ一考に供へむとす。さてこれが年代及び歌の順序などは論せず、又詞の誤寫もあるべからむ、讀む人よき様に見直してよ。

○江村專齋(名宗具)平安の人にて、初醫術を學び、後は儒學を以て、肥後侯加藤清正に遊學せり。專齋好みて和歌をよみ、この道に精しく、細川幽齋木下長嘯子等と、風雅の交りを修めたりき。寛文四年その壽百歳になりぬとて、

百年になるまでうゑすさむからず
　道ある御代のみちにひかれて
何もせで身のいたづらにすぎし故
　今日もゝとせの春に逢ふかな

もゝとせも猶あきたらずゆく末を
　思ふこゝろぞものわらひなる

この歌傳へてかしこくも、叡覽に入しかば、感賞せさせ給ひて、院參をゆるされ、種々恩賜の物ありきとなむ、諧もよき自賀の歌なり。

○石川丈山(初名重之)京洛の邊に幽栖し、文墨を以て樂とせり。貴顯の問ふものあれど、すべて應せず、後水尾天皇屢召し給ひしかば、辭みまつりて讀める。

　渡らじなせみの小川のあさくとも
　　老のなみそふかげもはづかし

とよみ奉れば、天皇いよ〳〵其高操に感せられて、召ことを止させ賜ひきとぞ。白首まで躁進の人は、いかでかゝる恬退の口氣はあらむ。

○貝原益軒(名篤信)年八十五にてみまかりき。その辭世の吟ともいふべき詩二首歌一首あり。其歌は、

　こし方は一夜ばかりのこゝちして
　　八十あまりのゆめを見しかな

おのれ若かりし時、この翁の自娯集をよみて、その謙恭の德に感ぜしことあり。右の歌の如きも自ら眞率にして、亦その德行缺ることなきを想ふべし。翁は儒醫兼達にして、素より博覽の稱ありし人なれど、其吟情は歌にありて詩にあらず。(但し詩作無きには非ず)愼思錄に曰く、和歌者我國俗之所レ宜。而詞意易二通曉一。故古人歌詠極精美矣。古昔雖二婦女一亦能レ之者多矣。唐詩者非二本邦風土之所一レ宜。其詞韻異二于國俗之言語一。難レ摸二倣于中華一。故雖二古昔之名家一。其所レ作拙劣。不レ及二于和歌一也遠矣。我國只可下以二和歌一言二其志一述中其情上。不レ要下作二拙詩一以招中診癡符之誚上といへり。おのれ按ずるに、此事當時の儒流に傑出したるものといふべし。世の詩を貴び、歌を賤むものを、提醒せられし意親切なり。室鳩巣(名直淸)も名儒にして、和歌を論ぜしことあり。されど唐の詩人が作れる、大明宮早朝詩どもを稱揚して、到底本邦三十一文字歌の、能く盡す所にあらずといへるは、謬見たるを免れず。歌は

假字にて僅に三十一字に過ざるを、漢字にて五十六字の七律と對論して、歌の方はその詞章豐富ならざるやうに見て、妄にその優劣を定むべきものかは、且長に利あるもの、短に利あるもの、各その物性によりて、同じからざるべし。又和歌の短きが、反て詩の長くいへるに勝れるものなしとすべからずかし。

徂徠嘗て和歌を譏りて云、三十一字侏離之言不レ足レ道といへり。是誠に漢あるを知て、皇和あるを知ざるものなり。孔子の像に題して、東夷物茂卿といひしが如きも、亦その鄙陋非理を見るべきなり。

○雨森芳洲(名東)對馬に仕へ、韓人に對話などして、彼邦の音にも通せし人なれど、詩よりは歌の方善き由いへり。その言にいはく、玉樹凋傷楓樹林といふもよけれど、我國猿丸太夫が、奥山にもみぢふみわけ鳴鹿の、よく人を感ぜしむるにはしかずといへり。此見識徂徠にまさりていと宜し。芳洲が古今集を二年の間に千度よみ。又三年の間に歌一萬首よめりといふが如きは、世人のよく知れる所にして、實に歌道専門の士といへども、或は遜色あるべし。

○服部南郭(名元喬)嘗て神戸侯の浮洲の別荘にあそびてよめる。

　しづかなる池のこゝろをみづ鳥の
　　うきすの波のたつとしもなし

南郭の父元矩といへりし人は、北村季吟に學びしこと有れど、南郭もその遺教によりしもの成べし。右の歌清靜の趣よろし。南郭漢土をさして、海外あるは彼邦などいひて、未中華などいひし事なし。これ名分を知れるものにて、嘉すべき學者にこそ。

○三輪執齋(名希賢)幼年にして親を喪ひ、大村某に養れて、出て眞野氏を冒しけるが、佐藤直方の門に入て、始て他姓を承るの非を曉り。やがて本姓三輪に復りて、その祖を祭ることを得たりとて、

　忘れずよ三輪のしるしの過し世を
　　したふも君がをしへならずや

歌の意よくきこえて、その師恩を思ふ情もふかし。師の身まかられし時、歌八首をよみて、いたく悲しみきまた、

さりともと心にこめし一すぢを
　いはで別れしなごりかなしも

是は執齋王氏學を好めりけれど、いかで其師にも王氏を信ぜしめむと思ひたりしに、早く無くなりにけれどかくよめるなりけり。執齋嘗て壽藏を建て、和歌二首を石に刻せり。その歌、

たらちねに返すこの身の奥つきの
　しるしとぞ見る杉のふたもと
契りおくたまのありかを爰と見よ
　からは何處のつちとなるとも

たらちねに返すの歌、こは小學に所謂子全而歸レ之といふより讀めるなるべし。執齋中院内大臣に歌學を承て、その奧域に入れりといふ。總の國の原氏其稿本を得しに、歌六百餘首を載たり。儒にしてかやうの歌讀は、有がたき人になむ。執齋素より德行篤かりければ藤樹先生の再來といひきとぞ。五井持軒といへる儒者の八十の賀に、執齋がよみおくれる歌、

日にそひて高くぞあふぐ學びえし
　こゝろの法もつきぬよはひも

此初句のそひてはそへてとあるべし。自動詞にいふべき所のやうなれど、古よりそへてとよめる例なり。心の法の詞は論語の不レ踰レ矩といふよりよめるか。これより前のたらちねに返すの歌の方、そのよみざま勝れり、尋常儒者の歌に漢語を譯し、僧侶の歌に經文を譯せるが如きは、其常套を脫せざるものにて、面白からぬこゝちなむする。又儒流の歌は重厚の口氣にて、自然流暢の風に乏しけれど、その所に反て見るべき眞情ありて、徒に浮華淫巧を競ふにまされり。

○成島錦江（名鳳卿）陸奧の人にして、鳴鳳卿ともいへり、（成島の成と和訓同じきを以てなり）儒を以江戸に仕へ、時君の寵遇を得し程なれど、漢學は更にもいは

ず、性又和歌を好みて善くよめりその歌集を「みよのなみ」といふは、冷泉家三代の點定を經たる故に因みとか。その讀める歌の中、

　思へども人のわざにはかぎりあり
　　ちからをそへよあめつちの神
　すぐなるをまもるときけど何事も
　　神にまかする身こそやすけれ

後首神にまかする身とよめるは善く語格に叶へり。鈴屋集に、春風よこゝろにまかす花ならばさかぬ櫻も早さそはなむと用ゐたるまかすはまかするとあるべき格にて、斯道の名匠(本居大人)ながら、反て偶あやまれるなり。さて錦江は右二首の歌を、ある日手づから書て、信濃國飯田の人某に與たりけるに、そこに狐馮者ありて、その狐二年まで去ざりけるを某は右の歌を誦せしかど、狐やがていにけり。後にその狐江戸本莊なる石原商家の女に憑りて、さきにいたく錦江の歌に畏れしことを、自いへりとぞ。こは伊藤仁齋に遇し狐憑者の如く、その德行醇厚なるがために、(仁齋は歌の事なけれど)自妖物の退きしなるべし。若しその人輕浮にして誠なく、徒に詞章の末をのみ事とせむには、かゝる感化の効はあるまじ。これによりて思ふに、凡修辭の人先その心を誠にして、その辭を美しくせむ。神も人も感ずべからむ。

明治三十二年三月　柿屋にしるす

浮世いかだ舟　作者不詳

●天の命ずる性といふ事

今はむかし、浮世坊御まへにしから申せし折ふし、中庸の、天の命ずるところ是を性といふといへる事をとはせ給ふに、いはく、天の命ずる所二五の性理。その精をうくるものは是人也。その物すでに偏氣にうづもれて生ずるは、これ畜生なり。性の幽微なるものを

うけて生ずるは是草木也。およそ人となり生ずるもの、性の精なるものは伏羲氏より堯舜にいたるまで、皆こと〴〵く一にして、更に二三のへだてなし。かれも人也是も人なり。いかでかゝはるところあらん。たゞし、堯舜周公孔子は性の精なることわりをみづからさとりて、是を身におこなひ給へり。凡人は世間の匆々にへだてははれて、みづから此理にまよふがゆゑに、おのづから心くらくおろかにまよへり。されば行年五十ならば、四十九年の非をしり、今日よりして是にすゝみ、昨日まではあやまれりとて、こうくわいして心をあらため、かしこきよりかしこきにうつらば、いかでか聖賢の道にいらざらんや。是狂せるも、よく思へば聖となると書經にもしるせり。しかるに、凡人の心をあらため、性の精なる理をしらしむるもの、是ををしへといふ。そのをしふる處、ひろくいふ時は、四書六經、つゞめていへば五倫あり。そのをしへにしたがふて、心にしめて身におこなふ、是を道と名づく。五倫とは、君臣と父子と夫婦と兄弟と朋友となり。いはゆる君としては仁にとゞまり。臣としては忠をいたし。父としては慈にほどこし、子としては孝をつとめ。夫は義を守り、婦は貞をおこなひ、兄は悌に、弟は敬し。人の友として信ありていつはらず。此五つの道を心にあぢはひ、身におこなふて、是をもつて天下にほどこせば、天下たいらかに、國家にひろむれば國家をさまる。此みちはしばらくもわするべからず。わするゝ時は天理にそむけり。つねにおこなふてすてざるべきがゆゑに、五常とは名づくるものなり。

◉名月の狂歌の事

今はむかし、八月十五夜は名におふ月のみてる時分なり、此夜は、日と月とさし望む事たゞしければ、月のひかりもことさらにあきらかなるゆゑに、望月ともいふなり。又まんまるにみつるゆゑに餅月ともいふと申つたへし。詩つくり、歌よみども、日比より合句をこしらへて、只今つくりしやうにもてなし、うめきすめ

きてよみ出す。さるまゝに、日くれより雲うづまきて、雨ふりしかど、かねてつくりける詩歌相違して、夜ふくれ共一首もいでず、浮世坊いかに〳〵にと仰られしかど、あふのきうつぶきあんじける、折ふし、雁の渡るこゑ聞えけれど、雲外に雁を聞て、夜こゑをと稱へざまに、不圖思ひよりて、かくぞよみける。

雨ふれど三五夜中の深のやみ
二千里わたるくらがりのこゑ

家兄遺草（三）

白松園主人篇

松々記

和尚が見えを飾らぬは、さるものなりけり、外に出るにも、只きたるまゝにて、下駄もはかず、草履ひきずりつゝ、出でけり。冬着ふるしたる衣は、濯ぎもせで、かびのねたるまゝ、竿にかけたり。夏の日單衣汗にあえぬれど、やう〳〵すゝがんとするに、きがへもなけれどとて、すはだかとなりて、濯ぎゐけるに、時もてそあるべきに、一人の嫗詣できつ、すべなきまゝ、竿にかけさらしたる綿入打おほひて、出でゝさし向ひゐたるさまいとをかし、肩のあたりは、雪のふりかゝりたらんでと、かびいといたくねて、眞白なりけり。嫗とかくしていふやう、和尚は洗濯婆々めし給ふやとゝへど、否みづから濯ぐにこそといふ、男の手して、さこそびんなくれはさめ、和尚のれめしは、いたくかびのね侍りしことゝいふ、松園奥よりこれを聞きて、いたく笑ふ、和尚も後をかへり見てはわらふ、すべてかうやうの樣なりけり。世の僧を見れど、外に出づとては、高き帽をかぶり、光る衣をき、高き下駄ふみとゞろかして、只管世俗にこびて、貴き聖と思はれんとせり、かゝる僧は、やがて墮落比丘とこそいはまほしけれ。ある僧に聞きぬるは、すべて僧は剃度のをり、戒を授かる、一には三寶に歸依し、二には佛法に歸奉し、

三には師友に歸敬すべし。是を三歸といふ。又一には殺生せざれ、二にはぬすみせざれ、三にはみそかごとせざれ、四には酒のむことせざれ、五にはそらごといはざれ。是を五戒といふ。この三皈五戒を示めさるとなり。しかはあれど、此の三皈五戒は、孔子の道の、三年の喪、三年父の道を改めざるを孝とす、又父母在せど遠きにいかずなどいふ道の如くに、今はふるされてなべて行はれぬにや、されど守らずとて、誰もあやしみいぶかるものもなきなるべし。

九月四日は、陰暦七月十四日になんありける。今日和尚は、朝まだきより、壇家をめぐりけれど、松園うちにゐて、ひねもす翁嫗等がもてくる鉢をうけて、物くはせなどす、凡夫のもてなし、いとむづかし。素麵みまへに堆く積りぬ、あすよりはこれをくふなりけりと思ふを樂みに、とかく笑みを作りて媚びぬるもをかし、夕暮に和尚かへりぬ、風冷やかなる東面の、簀子のはし近く出でゐて、里を見おろせど、手向の燈籠の火、かしこゝに螢火のやうに見えて、木魚のひゞき砧の如く聞ゆるも、またなくあはれなり。松園生れてかゝる靈境に遊びぬる事、まことに始めなりけり。世はいつまでも、かくもがなど、思ふに、遙あなたに、躍りの皷うち出しぬ、このかしがましき音ぞ、やかで興をさましつる。

十三日の夜は、例の如く、二人して北面のすのこに臥しゐて、あはれ團子もかななど、かたりゐたるに合せて、友のもとより一鉢の團子おこせつ。にこやかに打笑みたるに、又一人の友の、某の妻なる人、腰元ゐて詣できて、これくひ給へとてさし出させたる、ひときはうまげに見ゆ。すなはち二の鉢をならべてくふなりけり、うまかりし事、今もわすれずとなん。此友もいとなさけある友にて、名利に走らず、いと長閑に暮し明して、花のあした、月の夕は、歌をもよみたり。七月廿六日の事にやありけん、松園そこのがりいきたるに、主人外よりかへりきて、示しつる歌

蟬のねもしばしとだえて夕立の
　すぎにしあとの風のすゞしさ

いとをかし、なほいとおほかれば、皆わすれつ。蟬の聲やう〳〵をさまりて、垣根にをみなへし、つゆ草、咲き出でぬ。尾花も秋風にふかれて、さしまねく向ひの青山かつ山、兄弟のやうに立てるが、手にとるばかりなり、これがものいはぬ松園の友なりけり、いかにものいへとて、戯れによめる、

かぞ〴〵し勝山がねとまと〴〵し
　青山が根といづれ高けん

和尚のあらぬ日は、かたらふ友もなし、笛ふき歌うたひつゝ、うさをやる。世に隔れば、かしがましとて、咎むる人もなし。里の者はいとあわ〳〵しき心にて、詣でくる事いとまれなり、只隣に寺男のむくつげなるが、妻子もちてすまへるが、をり〳〵だみ聲ふりたてて、子らをのり散らすが、聞ゆるのみなり。松園はなやに米をうすつき、和尚は山に薪ひらふ、となりに媼が織る機の音は、おぢが子らをゐて、田のもに通ふ足の歩みをかぞふるに似たり。つなげる牛の子は、草をみつゝもう〳〵と鳴く。米搗きはてつるぞいざや炊がん、筧の水ふたがりぬといへば、和尚山の上より高らかに、おのれいきてとほせなんをとよびつゝ、谷にはせ入る。いかにいきつるかと和尚がをらぶきつるは〳〵、よかりなんと、松園足ふみならしてよべば、簀子の竹きし〳〵ときしる。すべて、いとのどかなるありさまなりけり。

何のおとなひもなく、つと入りきて、うちつけに、和尚豊浦へ行く用事やあるとをらぶ。驚きつゝ見れば、仁王のさまきたる寺男なりけり。醬油も買ひこよ、何も買へ、ついでに煙草もかひてよとて、市に遠ければ、何も〳〵いひつく。しばし待て、手紙も出しこよといふ。このおぢ今は六十ばかりにて、聖の豊浦にゐ給ひし時より。使ひ給ひて、こゝにゐて來て家をさへもたせ給ひしなりけり。されば そのさがすなほなるも

のなりしかど、妻なる者心わろきものにて、それにしひられて、今は昔のごともあらず。子らはあまたもてれど、皆がらその心ざま母に似て、ねぢけたりけり。されど只一つこの者の、なからましかばと、覺ゆるになん。

門べの橘、こがねの鈴さげたらんごと、枝もたわゝにて、人の頭にふるゝばかりになりぬれど、もみぢせる木々の葉もいつしかみなちりぬるにつれて、奥の坊の楓も桐も、骨あらはになりぬ。をりをり北の坊の庭もに、ひえ鳥のむれりきてあさりけるを、打ながめつゝ過しぬれど、筧の水もやうやうよわりきてればつかなく夜はの嵐すさまじく、身にしみて覺ゆる程に、時雨は化して雪となりぬ。ふみわけて訪ひくる人もいよゝ絶え果てゝ、人目も草もかれにけり。松園あるをしへ子に詠みてつかはしける、

くれて行く年のをはりと諸共に
　君にあひ見んこともはてなん

をしへごかへしゝたりけり、

くれて行く年はをはりとなりぬとも
　君にあひ見んことははてまじ

としいとわかけれど、かくはよみつるものか、かへしの様にかなひていとをかし。松園年の暮と共に故鄕にかへり、吾妻に上らんの心なりしかど、さはる事ありてうちやみぬ。

（以下次號）

才くらべ

蓬生屋女史

子を持たぬものはものゝあはれを知らずと云へど、子を持ちたるものも物のあはれ皆知りたりとも限らず、されど、まゝ母の繼子を憎みしためし少なからず、昔ある國にまゝ子を持たる母ありけり。其の母己が生みの子をのみいつくしみてまゝ子をいみじく憎み、已れが子は悪しき事をなすもつゆ怒らず、欲するまゝに

ものをとらせ、思ふまゝにいたづらをもなさせれども、繼子はよき事をなしてもつゆよろこびず、物もとらせず、些細のことにも怒り腹だちて、之をうちこらす事あるいと多かりけり。或る春、其の母、小鍋を買ひ來り己れが子にのみ與へて、まゝ子にはとらせず、まゝ子いと悲しうればえて、涙ぐまるゝ折りふし庭に鶯の啼きしに、いよいよあはれさまさりつゝ



うぐひすよなどさはなくそちやほしき
こなべやほしき母や戀しき

と口ずさみしに、まゝ母いたく感じて、それよりはまゝ子を憎まず、二人同じやうにはぐくみたりとなり。

また、むかし、平の正守と云ふ者、その父信濃なる女と住み侍りけるもとに、

信濃なるそのはらにこそわらねども
わがはゝ木々と今はたのまん

とて送りしとなん。

禽獸の言行

田端の隱居

平生、事もなきに、拳を振り舞し、われもむかしは武士なり、一萬二萬の敵何のものかは、武士は腹さへ切る、かくして切る、あしゝて切るなりなど、腹をつんざくさまさへして此の頃の奴ばらは薪の丸太の如きも

のなり、何の狗鼠、何の狗鼠と、巳ひとり武士のはて、ひとり勇ありげにいさましげなれど、其の實、心は卑怯、未練れく病一寸腹の痛みても、死ぬばかり苦しみに思ひ、少したんせきの出づる事あれど、湯よ、水よ、早くもて來らぬを怒り、少しの雨風にも怖れて家の隅に居すくまるなど、あだかも、かたつむりてふ虫が事なき折りは、劍を出し、角をふりてさもいさましく見ゆれど、去むし子供のやわらかき手にてもふるゝときは、おどろき恐れて、螺の中へかけこむに似たり。蜘蛛のめすは、男をひとふを、男、其のねぶれるとき、そつと至りて、生分をかけて、子を生ずといへり。故に男をいとふ女を蜘蛛の如しと云へど、まことにいとふ女を强ひて捕らへんなど思ふ男子も又蜘蛛の如き人とす。また親が生育の恩をも思はず、己が心のまゝにする、恰も燕の如き不孝の者あり。蝶の如く、春秋を夢の中に暮らすあり。又、人、米の饑餓するを患へず、ひとり米穀の騰貴するをよろこび、米を買ひ込み、油を買ひ締むる等のものあり。之六七月の候、時雨霶泫たる際、ひとり其の志を得て、こよなき快樂とし、族類と詭譁する蝦蟇てふものに似たり。實に此の人等は、よき家に住み、よき衣を纏ひ、妻と子と浮世をたゞ、いねて食し終る。愚と云ふも愚なり。すべて人として禽獸の行また耻づかしからずや、而して、むかし楚の莊王位につきて三年政せず日夜樂をなしけるとき、三年飛ばず泣かず、何の鳥ぞと伍擧の云ひけるが、一生飛ばず泣かざる、またこれ何の鳥ならむか、獸ならんか。

家庭の花　後篇（承前）

小倉山人

よしや何程邪險でおらうと多寡が一人の姑御樣なり、身を投出してお仕へ申さむ何んのそれ程と思ひしは、心の直き花嫁が我れを以て他を測りし未だ嫁入前のこと、いよ〳〵お側にあがりて見れば針の蓆に据るより

薄氣味わるき御老母樣、成程これでは今日まで嫁御の此家に落着かざりしも無理ならずと、心を殺して此家に來しお千代にてすら奥齒を嚙みぬ。

尋常の親なれど我子に嫁を迎へし夜より指折り初めて、愛らしき初孫の顏見る日を待つこそ人情なるべきに、これは又妙に心の拗れた親、縹緻といひ心といひ其の外萬事萬能の此程滿足な嫁を我子に迎へ得ながら嬉しやと悅ぶ心は微塵もなく、輿入したる翌朝より嫁を敵のやうに見て、唯最う泣しやう困らしてやらうの了簡明々と顏に見えて、一寸觸るも薄氣味わるく、罷り違へど人の命を奪るといふ破裂丸より扱ひ難き惡老婆なり。

あはれや霞村はこれを見て苦心一方ならざりき、この度も亦遠からず妻は生家へと歸りぬべし、良妻なるを可惜きものなり。去りながら我れは妻を惜むのゆゑを以て、廣き天地の間にも二人と在さぬ母の心に逆らはん不孝の道は踏まざるべし。然り我れは復かさねて妻に別れんのみなれど、復又去る可き事もありては、わゝ我れ霞村の義において濟まざるは恩師の情に對してなり。又この度もこの妻この家を見捨てんには恩師は何んとかの給ふ可きぞや。仮令明白にはの給はずとも、いよ〳〵望みなき奴かなと見棄て給ふ事もあるべし。それも母ゆゑなりと思へど露だも厭はず。況んや母を怨むが如き心は毫しもなけれども、この度の妻が母への仕振は現在の子の我れすら及ばず。可惜きものなり彼れをぞ去るも。さりながら彼れとても木石ならねど中々の事なり、世にたぐひ無きまでに心鬼々しき我母の機嫌を全く取りえんは。去れど何時しか千代は歸らん。終には歸るものとおもへど、妻が老母や我身に對して實を盡し、母さま良人やと優しくも仕へくれるが今は中々うらめしく、形見こそ今は仇なれ是れなくむぞ泣く日の終にあるべきを霞村は今より心に泣きたり。恩師の君は折々車を寄せ給ひて、一家の樣子をつら〳〵と御覽あり、いざとてお歸宅の節には必ずお千

代を物の陰に招かせ、何やらんしみじみと小聲に慰め給ひては、兩手を合せて何分にもとの給ふを、千代は却つておそれ入り左右の答は涙にて畏み叩頭むかりなり。實ある人の胸には他の實の通ひやすしと云ひ初めしもいづれは實ある人の詞と實ある人は容易知り得んかし。

身貧しき境界に在りて眞の勇氣を失はず、克く世海の風波を凌ぎて正しき航路を進み行くは、身の丈高く靑冥の中に聳えて雲を腰に卷くらん如き大男子にてすら既に難し。況んや纖弱なる女子に於いてをや。又況んや身貧しき境界に在るが上に猶ての他の煩ひさへあるにおいては哀れ男の氣も狂ひて首も縊る可し身を淵川にも捨てつ可し。況んや心のその手に持つ針の耳より狹かる可き女子の身においてをや。これが爲には婦德を脊にし大切なる夫をも振棄て、我身の安きを道義に見かへて、二世まで契りし夫の家に後足向けて砂播かくるが今日なべての人情なり。さりながら泥い中にも清淨無垢なる蓮といふ花の咲けるもある世は又間々には貞女のあらずやは、お千代は夫の家に一夜眠りし翌朝より、豫ての作戰計畫ぐわりと案に表裏して、夫は唯極めて淺墓なる想像に止まり、かねて心に期しつるよりは遙に優勢なる强敵に出會し初めはさすがにぎよつと愕きしが、これでは行かぬと氣を勵まし我れも同時に强く成りて、先づ眞先に貧乏神の隱家たりし臺所より次には押入さては薄暗き椽の下、形ばかりの床の間より座の內は申すに及はず明きまでに掃除して、次には我衣服の中にて最も老人に相應しきを二枚まで引解きて新の綿暖かきが上にも尙暖かき樣に入れて姑に整然と着かへさせ、次には又夫にもその樣にして垢ら〳〵の縞も消えたる襤褸袷に着更へさすれど、藁人形も裝飾から況んや霞村は立派なる男振いかめしく引立つて、南無阿彌陀佛と聖り切つたるお比丘さまでも振向きさうな姿勢にお千代もこれはと驚くばかり、さすが女の優しさには顏ぼつと紅らして、姑御樣は邪險

でも此んな殿御に添伏の身は姫御前の果報ぞと云ひしや否やは我れ是れを知らずといへども、これまで煤けし貧書工の夫霞村に虱衣すとんと脱せて我手に成りし新しきを着せたる朝、お千代夫の前に据りて美しき笑顏を作り、オホヽヽヽ酷くお似合ひなさいますと良眺めしは實際なり。幾年目にてか新の着物を心持よく纏ひし霞村、何とは無しに心嬉しく稍暫くは我れと我身を打眺め、果は兩手を振つて見て莞爾と一笑し、その儘表に出でんとすれど、貴郎何方へと云ひながらお千代は小股に追うて來る。先生のお宅まで。それでは少しと云いながら簞笥の側に駈寄りしが、何時何處から何うした來たとも知らぬ白足袋一足取出し、十文とやら承つて居りましたが是れでは如何でございます、お召し成すつてごらん遊ばせ。お踏物もと取出すは南部表に正目の臺、鼻緒は鼠色の鞣革とは何んとなくおとなしく、美術家などには打つて附けたる格搆の帽子さては男持の懷中より鼻紙に至るまで順々に取出せば霞村は呆れ、ヤア色々な物が出て來るな、お前の簞笥の抽斗は松旭齋天一の懷中のやうじやと云へば、未だ未だ此んな手品では寄席へも出られますまいよと云ひつゝお千代が打笑ふを老母は横から睨みつけて口をむくむく動かせり。うたてや何んとか言ふならん。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

今朝は嚴しき霜なりしが消えての後のあたゝかさ、蜂は軒端の山茶花にうたひ猫は日あたり好き椽側に顏を撫でたる景色何んとはなしに長閑なり。川上霞峰先生は今朝までにて急ぎの物を書きあげられ、ヤレ〳〵辛い目に遇されたわと拳にお腰を叩かれたり。オヤ最うお出來に成りましたな、お茶一つ召しあがれと奥さまは謹みて、日影うらゝかなる椽側の障子に近う、厚さ五六寸にも餘りぬべき八丈の座蒲團を打敷てお煙草盆を正しく舒し、お茶やお菓子と供ふれば、アヽ好い日じやのう。十月を小春とはよく云ふたものじや。鶯でも啼きさうな氣持がする。ヤレ〳〵是れで先づ〳〵

安心致したわい。後は四五日ゆつくり骨を休めて後のこと。アヽやれ〳〵と兩手を振つて設けの席に先生はふうはりと座し給ひ、先づ一服とお煙草喫させ、次はお菓子にれ茶と順序を追はせつヽ、この頃はこの混雜で霞村の家の樣子を聞かぬが、今度は何うか長持をしてくれヽば善いが、復萬一の事でもあつては、霞村が不幸は云ふまでも無く、清川に對しても切腹ものじや。眞個に爾でございますね、何うか無事にと奥さまも口を結んで案じ給へり。折しも襖の開く音して、御免下さいましと體度豐に入來る一人の男あり。案内も請はず馴々しげに振舞ふは何人ならんと打見れど頓には思ひわたらざりけり。誠に御不沙汰を致しましたといふ聲に奥さまヲヽと手を打ち給ひ、アレ先ア良人といひながら先生のれ膝に緊乎と取縋り聲を放ちて笑ひ給ふ。コレ〳〵他人樣の前で失禮千萬な奴じやとの給ふ。先生は、未だ客人の何人なるかを知り給はぬなり。客人は怪みつヽ此方の擧動を眉打ひそめて打見たり。奥さまはお顔を袖に蔽ひ給ひ、未だれ分明に成りませぬかとの給ふも半分は笑ひに紛れて聞えず。老眼には見それ給ふも道理なりけり。常は垢てら〳〵の古袷一枚さも貧しげに打着て、髮はゆら〳〵するまで生し鬚蓬々とこれも成行く儘に任せし男の、あはれ何人の指圖なるらん今日は髮短く剪りて鬚も立派に剃落し、今浴後かと見ゆる身に、誰が見る目にも今樣の安き摸擬物とは見えねど、いづれ古渡の品なるべき更紗の加之も意氣なる下着に糸織の袷を重ね、濱縮緬の兵兒帶好き程に引締めて、流球紬の羽織ひつたり着重ねたり。客人默して語らねど主人も嚴然と身構へ給へり。奥さまはその可笑さに堪へかね給ひ、良人御遠慮あそむすな、お客樣は霞村といふを皆まで聞かれず、恩師の君は直とお膝を前められ、ナヽヽ成程爾聞いて見れむ今こそ霞村の顔に見えるが初めは一寸も知れなんだ。人はつくりで此程も違うたものかのう。斯うして居る所を見れむ實に立派な男じやのう。全然人物が異ふた樣じや

と心無く褒め給ふを、奥さま傍より氣の毒にお思召し、良人失禮な事をおつしやいますな、霞村さんは以前から好い御容良ではございませぬか。ハヽハヽヽヽいや最う吾儕の門生中で、金儲には一番うといが、筆を持せて勝いのと男前は霞村が一等。サア直と前に寄れつ。何うじやのう、家は圓う行きさうか。フム〳〵それは先づ〳〵結搆。可成可愛がつてやれ。ハア〳〵と霞村は腰を屈むるのみ。女は斯る事には目敏く、奥さまは一見已に疾くもそれぞと知り給へど、先生は少しもお心附かれずして、中々見事に服装が出來たが、その後何か好い仕事でもあつたの。

『後篇未完』

張合（その二）

白魚女史

アーモー張合もぬけた、張合もぬけた、己れはもうぞうしても弟に勝てなかつたのだ、勝てなかつたのだ弟は子まで天晴男子をもちおつた、エー此の又、白川浪男の著、浪男とは云へど中々なみ〳〵ではない、アーまだ年も廿歳をこえしか、こえぬであらう、わしが家を出でヽ其の次の年にまうけしときけど、それにあつぱれ老成も及ぬ此の文しかも此の容貌實に威嚴が備はりあらはれて見えてをる行末はさこそとてこの頃あづさに上ぼりし大和心てふ書物をひらきてつく〴〵と感歎にくるヽ男は、黒川勝とて、何に世を逃れてか須磨の浦の假住居、年はまだやう〳〵四十路の坂の麓にふみ入りにしのみなれど、何の患によりてか、白き髭は長う乳のあたりまで垂れ、何にするか額に千行の浪、はれぬ目元にも、威嚴のありてか、所の人は、隱居〳〵ともてなして、誰れ學を知ると告げし人もなけれど、おのづから浦人の學者と見なしてや、手紙をよみてくれ、書きてくれ、倅にを學教へてくれ、手本を書きてくれ、はては公事訴訟まで依頼するうるさヽに、勝は顔をしはめながら、之が依頼に應ずるにはな



けれど、是非なく、不審をよみきかせ、筆をとつて書きて與へ、公事訴訟理不理を論ずるまた多く、あはれ君子、何がために野に潜伏するにや、

ホーホケキヨ〳〵、ケキヨ〳〵〳〵〳〵、ホーケキヨとうるはしき聲に唱ひながら今しも何處よりか立かへりし少女、年は十ばかりなれど、極めてあどなく、父さま、ほんとうの鶯とおぼしてや、考がへておはしますよと罪なくうち笑み、直ちに膝の上に這ひ上る姿に日來父がいつくしむさまの汲まれたりいつもならば父は左の手に助け上げ右の手にふり分け髪を搔き撫でゝ、やがてはねだりもせぬ、菓子までとらするを、今日は、抱き上げんともせず、よくかへりしよの言葉もなきに、少女は異樣に父が顏を守りつゝ、父樣、考へて、考へてとて、顏をうち守れどなほ物云はざるにはては己より少さき手して父が髭をかきなで、いつくしみを呼びしかど、父はうるさやと双の手もてかき拂ひ、膝をもすべりおろすに、少女は失望、涙ぐみて、物も云はず、父を守り居りしが、やがて傍におきありし近眼か老眼かの父が目鏡をとりて、鼻に懸け、父が膝下なる書さへとり上げて、一行二行ひろひ讀によみ、やがては眼鏡を拭ひて、改めてかけ、飽まで父が眞似して戯ぶるゝにつねならば、をかしき猿よ髮剃もて手をそがぬやうせよなど共にたはぶれ撫子の頭のちり、よるたびにかきも拂ひもせらるゝを、今日は如何してか、いたく邪見に、何ぞ、父がまねなどして、今少しかしかうせよ、いつまでうか〳〵なしをる。此の書の中の、此の文を見ろ、之は白川浪男とて、まだ二十歲になりしかならぬ人が論ぜし文ぞ、その浪男とある寫眞を見よ、眼ざし、口つきのりゝしさ、其の方は、なぜ、此のやうなる男子には生れこざりし、なぜ、梅代は、男子を殘しては行かざりし、口惜しやとばかり書物を投げ出して、兩の拳に涙をかき拂ふを、少女は、見るよりつく〳〵と何か悲しくなりて、わつとばかり泣きさけぶ聲に、父ははじめて我にかへりしがあはて

ゝ少女を抱き上げ、アー可愛想に〳〵、其方の知つたことではなかつた、己れがつくつたのだ、己れが、のう、文代其方も浪男の父のやうな、父さまをもちたからう、な、こゝな海士のみを相手になどしてをる此の父さまはいやであらう、のう文代、父樣も實に口惜し、口惜しいわいとて、又やはら〳〵とあつき涙をふり注ぐに、親が涙にかきくれ、しかもやさしき言葉聞きてはいよ〳〵悲しく、何と心を云へむへに、少女心のたゞわかず、父さまやとて、固く抱きつきて、共にむせびかへるあはれさ、父もいよ〳〵身にしみて悲しく、文代〳〵とて之も固く抱きしめたり。

アー、馬鹿な、子供なと相手に泣きしとて何になる少なきより、強硬兒と字されしほどの強情ものなりしを文代何ぞやらうか、何がよい、また母さまのおすべりがよいかとて、抱きしまゝ立ちて佛前に至り、供へありし菓子、一つ二つをとりて能ふれど、つねには鐘高くうち鳴らして、南無阿味陀佛と高らかに呼ぶ音、中々にうち笑まるゝを、今日は口の內にしやうみやう母さまとて涙をこぼす、身にしみて悲しう、見れど、線香の灰もしめりてぞ覺ゆ。少し遊び來りて、それから書をよめ賢こき人となりてくれよ、文代とて、襟くびをまた一さすり、やがてかき下ろして奥の方にゆくに、少女は、乳のみ子が母にはなされし心地、其儘遊びには出でず、己れが部屋に入り、書物をひろげしが、何となう心地さびしう、悲しうなりてつく〴〵と庭の面をうち守りて、泣くこと半時ばかり、何のほどに來りけむ、うしろに父の勝、アーもうさう泣かぬものぞ、えらき者は生ひ出しときと、父母を失ひし時と生涯に三度より泣かぬときく、意くぢなく父が泣きしとて、鶯のやうにさやうに、さやうにまぬるものにあらじ、いつか、そちに話したしとおもふこと、あれど、さやうに我の如くいくぢなくては、はなすも甲斐なく思ふぞ。のう文、須磨の浦やなぎたる朝の浪よりも、稀なる門のさくら、咲くかとすれど風に散る、い

ざ拾ひてをしみてむ、もろともにこずやと自ら花籠下げて促すも子を思ふふかきなさけ、元より乙女の、野に山に狂はまほしき年なれど、文代も、とみに、涙を拂ひ、文は糸にぬぐはうとて、針に糸して、父が袂にすがりて立ち出でしが、さらでも立ちやすき花のかげ二人三人友だちより來りて、共に遊び興ずるに、勝は中よく遊べよとて、之に讓りて己れは、家に引きかへしぬ。

少女は父が涙を見し日より、年俄かにまさりたるにやたゞわざなく父の膝にすがりのみせず、自らよく勤めて書をよみ、手習も心をこめてすれど、僅か五日六日のほどに、難波津のおとなき筆に、よきふしのいと高う見ゆるばかりになりぬ。父はいたく不便がり、ちと遊びてこよ、花をぬぎてこよ、すみれをとりてこよとうながさるれど、流石少女の辭みもせず、立ち出で、寄りつどふ友だちとよねんなく。花を拾ひをりしが、紳士杖をふりまはして、何かかなしげに語りつ、笑ひつして來るは、都人士の此地に遊ぶ者と見えたり、田舍子たちのものめづらしく花拾ふ手をやめてえどし守りをるに、紳士等もをかしう、花は拾えてか、その花得させよなどたはぶれよりしが、童子の中の文代を見て之も須磨の子にや、此處の海士の家櫻さへまれに見る所なるに、之はまたゞめづらしき少女石見の娘ならむには歌もよむべけんを、父は何ぞ、つりする海士か、海士がしわざの如何なれど、かやうの娘を釣りけるにやなど戯ぶるゝに、文代はあさましく、きつと紳士をうち守りて、

笑ふなよつりする海士のしわざにも
　大和こゝろはありけるものを

と口ずさめど、紳士は顔を見合せて愕然たり。



文林

若松　東久世通禧

此はるの子日にもれしひめ小まつ
よろづ代までのみどりしめ見

垣若草　高崎正風

中々にゆきかきよせしかきねより
もえいてにけり春のわかくさ

徳川光圀卿　津輕承昭

石ぶみにことむの花もあらはれて
ときはのそのにいまも薫れり

湖上歸雁　竹屋光昭

三上やまおぼろにみえて志賀の浦の
なみぢはるかにかへる雁がね

春雨晴　西三條實義

雨はれぬむすべる露もちらぬまに
いざみにゆかんやまさくら花

春嵐　宮地嚴夫

見るひとの心をさへにうごかして
はなの梢にふくあらしかな

橋上春風　小出粲

橋の上も寒からぬまでなりにけり
やなぎをつたふきしの春かせ

鶯　植松有經

うぐひすの羽色にまがふわか草は
鳴こゑよりもなつかしきかな

雨中春庭　鎌田正夫

獨のみながむる庭のこけの上に
はなちりみだれはる雨ぞふる

溪梅　遠山英一

賎がすむわらやのむねも見ゆる哉
うめさき匂ふたにのあたりに

松有佳色　島多豆夫

八十木種うゑにし神やまつにのみ
千世のいろをぞ定めましけん

山路早蕨　松浦辰男

れもふぞち蕨をりつゝつゞらをり
のぼれぞつらき道としもなし

燕　岡部譲

契りにしことさへたがふ世の中に
ふる巣たずねて來るつぞめ哉

豊公　大畑弘國

つるぎたち尾張の國のひとつまつ
もろこしかけて蔭れはひけむ

古寺花　赤松景福

法のため身はすてねぞも小初瀬や
花のさかりはこもりてを見む

東宮亮足立正聲君より歌かきてよと色紙を
數枚れくりけれぞ　佐々豊水

れもひきや蛙のうたをひさかたの
雲井はるかにきこえあげんとは

井上通女　仝

はるがすみ井のへ豐かに影うつる
月のすがたのうるはしきかな

勝浦屋太郎兵衛の女　仝

眞心はそらにとゞきてちゝのみの
父のいのちをのぞしたりけん

濱田智惠子　仝

わかぼしのわかぬこゝろの柱をぞ
よにつきたてしすがた床しも

遠山霞　島宮太郎

つねにだに雲かと見えし山のはを
そらにうづめてたつかすみ哉

庭前岩　草野隆道

千代を經てうごかぬ庭の岩がねを
こゝろとすめる人もありけり

春歌　足立正枝

さくら咲く春の山路のゆきかひは
れも荷もうしと思はざるらん

花のころ故郷の友に　蜂須賀隨子

諸ともになれし木陰ぞなつかしき
みやこの花をひとり見るにも

花見ありきて　前田朗子

春の日のくるゝもしらでそこはかと
あくがれあるく花のしたかげ

霞中雲雀　西四辻茂子

夕まぐれつる雲雀のこゑはして
そこともみえず霞むのべかな

道臣命　南郷柳子

ものゝふの道を開きてみいくさの
先にたゝしゝいさをぞ思ふ

早春柳　松平健子

昨日まで雪にさらしゝあしがきの
やなぎのいとも淺みどりせり

夕春雨　田中竹子

春さめのふるともみえぬ夕まぐれ
ぬれいろ深くみゆるはなかな

春雨夜靜　坂田泰子

軒ちかき花のしづくのそれならで
ほかにしれとせぬよはの春さめ

引田部赤猪子　原田蒼生子

三輪川にそゝぎし衣のたもとさへ
ひるひまなしに老にけらしも

車中春雨　小川直子

小ぐにまのあまがはつたふ露にのみ
ふるとしらるゝ春のあめかな

雲雀　河村重子

すゞなさくはたの中みち朝ゆけむ
雲雀のこゑぞそらにかすめる

曉春月　安東菊子

にほひをぞ花に讓りてあかつきの　かすみにきゆる月のかげかな

富士山　　足立三尾子

あらがねの土のものとも見えぬ哉　みそらにたかきふじの高峯は

墨田川の花さかりなりときゝて母をしぬぶ歌　　海上壽子

すみだ川、堤のさくら、さきにはふ、花をし見むと、みやび男は、馬にくらおき、をとめらは、舟にのりて、おのがじゝ、いむれゆくとふ、あはれわが、母しいまさば、もろともに、手たづさはりて、たぬしくも、愛ましものを、おもしろく、あそばんものを、母はしも、世にしまさねば、花見むと、思ひもいでず、うつゆふの、こもらひをりて、ねのみしなかゆ。



●宮中御歌會　三月御兼題の詠進左の如し。

隣家柳

垣こにてなびくを見れば青柳はとなりわが宿へだてざりけり　正風
此方より隣のやなぎうぐひすのねながら見つる窓のうちかな　延通
我窓の梅のこずゑにかゝりけりとなりの庭のあをやぎのいと　直大
垣ごしの柳の糸のしげりあひて春はとなりのかよひぢもなし　千秋
ひむがしの隣のやなぎわが方になびくもうれし春のあさごち　豊穎
睦まじく隣さかひにうちなびくやなぎの糸もへだてざりけり　利嗣
ふくさなき風の姿の見ゆるかなとなりの庭のあをやぎのいと　承昭
青柳はとなりの庭のものなれどよる〳〵月をかけてこそ見れ　光尊
中垣のへだてはあれど隔なくなびくとなりのあをやぎの糸　通善
なか垣の上になびきてふく風の春を見せたるあをやぎのいさ　隆苙
春風のそよふきわたるなか垣をへだてゝなびくあをやぎの糸　長說
はる風にとなりの柳中がきをこえてこなたへうち靡きつゝ　景衡
我庭に近く見るよりのどけきはとなりになびくあをやぎの糸　光昭
風ふけば我垣ほにもかゝりけりとなりの庭のあをやぎの糸　利鬯
春かぜのふきそふまゝに隣より靡くやなぎのすがたゆかしも　忠敬

中垣の隔てはあれどあさゆふにこゝろひかるゝあをやぎのさ　清
あけくれに見慣し軒も閑かしくとなりのやなぎもえ出にけり　雅之
春かぜのふけばなびきて青柳の糸はとなりもへだてざりけり　通治
はる風の姿を見せてなかゞきのうへよりなびくあをやぎの糸　昌弘
中垣の隔はあれどあをやぎはわが宿にのみなびきけるかな　任子
春風はふけどふかれど隣りよりうちなびくなりあをやぎの糸　文子
我宿のものとも見えて靡くなりとなりの庭のしだりあをやぎ　祥子
隣より春のくるかと思ふまでこなたになびくあをやぎの糸　具子
あし垣の隣のやなぎもえしよりわが軒端にもつばめとぶなり　敦子
我宿の梅の木のまに見ゆるかなとなりの庭のしだりをやなぎ　道子
さしなみのとなりの軒の青柳のいとのどかにも春かぜぞふく　兼子
よそめには此方の者と見えぬ覧さかひをこえて靡くあをやぎ　以登子
中がきのへだてゝかゝる青柳はとなりのものと思はれぬ哉　好子
夕月の影見ゆるまどにさはりけりとなりの庭の青柳のいと　伊佐越
高からぬ垣ねを越てさしなみのとなりのやなぎうち靡きけり　三枝
夕たけく烟とゝもになびきけりとなりのにはのあをやぎの糸　愛
争そはぬ心も見えてとなりどちなびきあひきりあをやぎの糸　晟夫
わが宿の梅のこずゑを拂ふかなとなりのやなぎ風になびきて　正臣
我窓を拂ふばかりものびてけりなびくとなりのあをやぎの糸　秋香
のきこえて高きとなりの青柳はわが窓よりぞ見るべかりける　榮
鶯のこゑもまぢかくなりにけりとなりのやなぎもえ出しより　有經
中垣の隔てはあれどかたよりにこゝろもなびくあをやぎの糸　樞郁
隣にはやなぎも萠ぬ朝な〳〵すぎのなかゞき霜はおけども　正夫
鶯のかよふかきねのひま見ればとなりのやなぎ淺みどりせり　綱二
垣こえて打靡けどもかぜふけばとなりにかへるあをやぎの糸　胤明
かげたかきとなりの柳わが庭の池のそこにもうつりけるかな　英一
我宿の風みとなりてゆらぐなりとなりの庭のしだりをやなぎ　義清
手をのべて結ぶ計りに垣ごしのやなぎの糸のうちなびきける　久子

● 憐なる孝子

信濃國北佐久郡伍賀村柳澤吉助といへるは、ことし十六歳なるが、そが幼き時に母を失ひて哀れなるに、かてゝ加へて十二歳になりけるとき父も又心臟病に罹り、起くるも寢るも自由ならず。家もと貧しきより、吉助は、はいなくも父の看護を九歳なる弟にまかして、吾が身は人に雇はれ、ひたすらに働きて僅かの賃錢を得ながら、兄弟各 食を節して藥餌を侑むると數年更に怠りなかりき。さるに不幸にも、こたび父病沒せしに、葬儀の資さへ調ふによしなく、兄弟死骸を圍みて相泣きしと、まことに哀れなることどもかな。

● 孝子の奇福

志摩國中井市藏といへる人は、早く父を亡ひて後專ら母に孝養をつくし、其名近郷に聞えけるが、或る日魚を獲んとて海に出でしに、海底に銅板の如き物ありければ異みて取り上げ見るに、こは、

長七寸幅五寸許りの黄金板にして、之を時價につもれば凡そ五千圓に餘るものなりと。

●奇特の少年　岐阜縣加茂郡阪祝村渡邊菊三郎は、今年十八歳なるが、老母に仕へて孝養怠りなく、郷黨皆之を稱せざるものなきに至りぬ。此頃老母の善光寺に參詣せんといふより所持の荷車に座を設けて老母を載せ、自ら之を挽きて信州に向ひけれど、村内の長幼郊外まで見送り金品など餞したりといふ。

●貞婦　徳島縣阪東喜平、天刑病にかゝりければ、強ひて其妻みつ女を離縁し、四國順拜に旅立ちしが、途中にて重患となり、原籍役場に照會せられぬ。みつ女之を聞き、驚きて現場に至りみれど既に死せり。痛く歎きけれども詮すべなければ、厚く之を葬り、石碑を建てゝ歸りきと。離縁せしとはいへ夫婦の情しかあるべきことなりかし。

●學童の友情　名古屋高等小學一年生木村金一外三名仝年生森田松次郎が遊戯中右足を挫き歩行し能はざるを憐み、小兒車に乘せ毎日交々之を押して通學せしめ共に學業を勵むといふ。平素の師の敎の程も思ひやられていとゆかし。

●少年の特志　これも仝じ心の人ならし、一少年徳島日々新聞社に來り銅貨五錢を差出して曰く、去年五錢八厘を拾ひ警察署へ屆け置きしに、今日之を下け渡されたり、八厘にて半紙を買ひ、殘り五錢を貧民の惠金にせんと。社員氏名を問ふもいはずして去りたりと。

●ゆかしき小供心　前號にもこの類のことを記しゝが、かの親子四人投身を企てたる竹内某へ二十錢を送り、左の手紙をそへたりと

私は竹内と申人をまことに氣の毒に思ひます又和氣郡の石原虎吉さ云ふ人もきの毒にございます此二人へ金を多く送りたく思ひますけれども私は小供でありますから金がありません母様より毎日一錢づゝもらひやうやく二十錢だけにたまりましたまことに少しでありますが此金を二人へ送りてくださいたのみます

尋常二年生　古谷喬

山陽しんぱう御中

●勤王の遺族　勤王の志厚く安政大獄に連座せし嵯峨大覺寺門跡の臣故六物空萬は昨年贈位の恩典あり

しも遺族詳かならざりしに、京都住織物職工渡邊新造といふもの、その女婿たること判然し、先人贈從四位の位記を拜したりと。

●夫人慈善會の總會　東京市夫人慈善會にては、さき程帝國ホテルに總會を開き、會長副會長議定員の選擧を行ひしに左記の如く當選したりといふ。さて會場は神田區三崎町東京座とし、來る四月十日前後に開會の豫定なりと。當時會員は八百名なるも昨今しきりに入會の申込あり、入會希望者は市廳內慈善會掛へ申込めば、直ちに會員證を付與する由にて、會員となりたる上は一ヶ年に金三圓以上若くは仝價格以上の物品を寄附するものとし、其會員には、慈善會開場中は、演劇音樂其他の興業物等上等切符を贈呈する筈なりといふ。

議定員（イロハ順）

會長澁澤榮一氏令夫人、副會長松田秀雄氏令夫人、男爵岩崎彌之助氏令夫人、侯爵池田章政氏令夫人、男爵伊東巳代治氏令夫人、侯爵蜂須賀茂韶氏令夫人、穗積陳重氏令夫人、穗積八束氏令夫人、富田鐵之助氏令夫人、大倉喜八郎氏令夫人、奥三郎兵衛氏令夫人、渡邊洪基氏令夫人、金澤三右衛門氏令夫人、田所美治氏令夫人、田中平八氏令夫人、梅浦精一氏令夫人、浦田治平氏令夫人、男爵楠本正隆氏令夫人、安田善次郎氏令夫人、山田忠兵衛氏令夫人、子爵松平定敎氏令夫人、朝倉外茂鐵氏令夫人、淺野總一郎氏令夫人、坂谷芳郎氏令夫人、佐藤正興氏令夫人、坂本彭之助氏令夫人、喜谷市郎右衛門氏令夫人、三井三郎助氏令夫人、三井高生氏令夫人、男爵千家尊福氏令夫人

●帝國婦人協會　下田歌子を首長とし菅川英子、岩波澄代、永島須摩子、同八百子、久松繁子の五名發起人となり近衞篤麿、同夫人、土方久元、同夫人、東久世通禧、千家尊福、三浦安、片岡健吉、江原素六、粟原亮一、鈴木重遠、河野廣中、高木正年、加藤時次郎、島地默雷、同夫人、織田純能、高橋與市、森清右衛門の十九名贊成者となり、麹町區元園町二丁目四番地に設立したる帝國婦人協會は、一大私立女學校を設立し、下田歌子の計畫せる實踐女學校、女子工藝學校、慈善女學校、及び下婢養成所を開始せんが爲に組織せられたるものなるが、之を公に發表するまでは、その設立を秘密になしをるよしにて、世には是に就て種々の怪聞を傳ふるものあり。吾人は遽に此の流說を信ずるものに

非ずと雖、しかも火氣無き所に火焔の擧らざる諺もあれど、同會の爲に多少の憂なき能はず。希くは公明の企によりて、斯の有益なる事業の速に成就せられんことを望む。

●慈惠醫院の婦人服展覽會　東京慈惠醫院は、今回皇后陛下特別の思召を以て御下賜金御增加あり、年々五千圓となりしをもて、來月一日より、施療患者の數を增加すると仝時に、尙一層慈惠の主旨を擴張するため、來る五月を以て婦人服飾展覽會を仝院內に催し、皇后陛下の行啓をも仰ぎ奉る筈にて、日本中古より今日に至る迄の婦人の衣服頭髮の飾具等多く集收せりと。

●女學校の學科及程度　文部省令第十八號にて左の如く達ありたり。

既設高等女學校に於て明治三十二年勅令第三十一號高等女學校令第十條の規程に依りその入學資格に變更を生じたるときはその現在生徒に就きては該生徒既修の學科及びその程度を明治三十二年文務省令第七號高等女學校の學科及其程度に關する規則に對照しその相當學年を定むべし但現在生徒にして高等女學校令第十條の入學資格に當らざるものあるときは、明治三十三年三月三十一日迄在校せしむることを得

●百壹名の新博士　文部省にては、去月廿七日樺山文部大臣 柏田次官各博士會 の會長 列席し、博士の學位授與式を擧行せられぬ。總人員は各科を通じて百一名にして、當日自ら出頭學位を受領せしは僅かにその三分の一計なりけれど、上田專門學務局長代理として夫々受領したりといふ。その人名は

●●●帝國大學大學院に入り定規の試験を經たる者

(文) 松本亦太郎	(文) 松本文三郎	(林) 河合鈰太郎

●●●論文を提出して學位を請求したる者

(醫) 入澤達吉	(醫) 土肥慶藏	(醫) 小池正直
(工) 近藤虎五郎	(林) 本多靜六	(獸) 時重初熊
(獸) 田中宏		

●●●博士會に於て學位を授くべき學力ありと認めたる者

(法) 富谷鉎太郎	(法) 河村讓三郎	(法) 田部芳
(法) 田口卯吉	(法) 添田壽一	(法) 木場貞長
(法) 江木衷	(法) 天野爲之	(法) 坂谷芳郎
(工) 五十嵐秀助	(工) 石藤豊太	(工) 原龍太

(工) 渡邊嘉一　(工) 渡邊讓　(工) 川上新太郎
(工) 高峰讓吉　(工) 團琢磨　(工) 曾禰達藏
(工) 野村龍太郎　(工) 小花冬吉　(工) 大井才太郎
(工) 岡胤信　(工) 黑川勇熊　(工) 倉田吉嗣
(工) 山田寅吉　(工) 山田直矢　(工) 山口鋭彌
(工) 安永義章　(工) 松田武一郎　(工) 五代龍作
(工) 甲賀宜政　(工) 淺野應輔　(工) 坂湛
(工) 坂田貞一　(工) 佐雙佐仲　(工) 宮原二郎
(工) 下瀬雅允　(工) 廣井勇　(工) 平賀義美
(工) 須田利信　(文) 坪內雄藏　(文) 村上專精
(文) 大槻文彦　(文) 佐藤誠實　(文) 三上參次
(文) 三島毅　(理) 宮部金吾　(理) 渡瀬庄三郎
(理) 中島謙造　(理) 鈴木敏　(文) 大塚專一

●帝國大學評議會に於て學位を授くべき學力ありと認めたる者

(藥) 田原良純　(農) 澤野淳　(農) 古在由直
(農) 新渡戸稻造　(農) 恒藤規隆　(農) 佐藤昌介
(林) 志賀泰山　(林) 中村彌六　(獸) 今泉六郎
(獸) 柳澤銀藏　(獸) 黑瀬貞次

●帝國大學總長の推薦に依る者

(法) 戸水寛人　(法) 寺尾亨　(法) 一木喜德郎
(法) 岡野敬次郎　(法) 松崎藏之助　(藥) 長井長義
(藥) 下山順一郎　(藥) 丹波敬三　(工) 中野初子
(工) 中村達太郎　(工) 的場中　(工) 井口在屋
(工) 中島鋭治　(工) 河喜多能達　(工) 難波正
(工) 阿部正義　(工) 二見鏡三郎　(文) 物集高見
(文) 中島力造　(文) 上田萬年　(文) 根本通明
(理) 坪井正五郎　(理) 平山信　(農) 玉利喜造
(農) 橫井時敬　(農) 本多孝介　(林) 川瀬善太郎
(獸) 勝島仙之介　(獸) 須藤義衛門

●女子高等師範學校卒業證書授與式

女子高等師範學校に於て、去月三十日、卒業證書授與式を擧行せり。其次第は、午前九時三十分著席(一)唱歌(皇后陛下御歌みかゝすは(此時總員起立)おもへははてなき)(二)卒業證書授與、(三)學校長告辭、(四)文部大臣祝辭、(五)女子高等師範學校卒業生總代謝辭、(六)附屬高等女學校卒業生謝辭、(七)唱歌(はてしなき)にて式を畢れり。其卒業生の氏名イロハ順竝に文部大臣演說の大要左の如し。

女子高等師範學科

(外) 佐賀縣士族　石井くま
(外) 兵庫縣平民　宮井みね
(外) 島根縣平民　門脇節
(外) 和歌山縣士族　幸田駒乃
(外) 宮城縣平民　影山みつゑ
(外) 長崎縣平民　吉富みね
(外) 佐賀縣士族　田澤ふみ
高知縣士族　棚橋駒衛
(外) 巖手縣士族　中原ふく
(外) 愛知縣士族　長戸さも
(外) 新潟縣平民　武藤ひさ
(外) 長野縣士族　太田まつ

(外)	宮城縣士族	大立目もさ
	德島縣平民	大塚さき
(外)	東京府士族	大澤はつ
(外)	佐賀縣士族	奥村てい
	新潟縣平民	山田すい
(外)	京都府平民	淺田しづ
	富山縣平民	里見さき
(外)	東京府士族	坂井すゑ
(外)	長崎縣平民	紀内なろ
(外)	和歌山縣士族	島村長
(外)	大分縣士族	廣瀬敏
(外)專修生	島根縣平民	長谷たき
(外)專修生	高知縣士族	太田鶴

女子高等師範學科撰科

國語、歷史、地理	福島縣士族	川島いし
國語、漢文、外國語	山形縣士族	成田よつ
國語、習字、圖畫	新潟縣士族	宇佐美はろ
國語、習字、音樂	岡山縣平民	熊代壽見
國語	長野縣平民	牧内ちう
國語	東京府士族	島よれ

附屬高等女學校補習科

國語、漢文、家事、裁縫	東京府平民	犬飼瑞枝
國語、外國語、漢文、家事、裁縫	山梨縣平民	折居留代
漢文、家事、裁縫	埼玉縣平民	吉田貞
國語、漢文、裁縫	千葉縣平民	曾根榮子
國語、裁縫、習字	靜岡縣士族	永持豊
國語、外國語、裁縫、習字	福井縣平民	八尾幸
國語、外國語、裁縫、習字	大分縣平民	保田綾

國語、家事、裁縫、習字	東京府士族	北川郁

附屬高等女學校本科

(外鈌)(漢)	東京府士族	伊藤しつ
(漢)	長野縣士族	伊澤和歌
(外鈌)(漢)	東京府平民	伊志田ろく
(外鈌)(漢)	京都府平民	岩田しづ
(外鈌)(漢)	東京府平民	今村すゑ
(外鈌)	東京府平民	今井みき
(外鈌)(漢)	福井縣士族	八田多美
(外鈌)(漢)	東京府平民	原田よし
(外鈌)(漢)	福井縣士族	件古志生
(外鈌)(漢)	千葉縣平民	林よれ
(外鈌)(漢)	東京府平民	長谷川りヵ
(外鈌)(漢)	佐賀縣士族	長谷川鏡女
(外鈌)(漢)	和歌山縣士族	小川よれ
(外鈌)(漢)	山形縣士族	小倉なを
(漢)	東京府華族	加藤悦子
(外鈌)(漢)	靜岡縣平民	片桐ふぢ
(外鈌)(漢)	靜岡縣平民	加茂登鶴
(漢)	千葉縣平民	田中たま
(外鈌)(漢	兵庫縣平民	田中あさ
(漢)	東京府士族	田中ふゆ
(外鈌)(漢)	東京府士族	高橋八重
(漢)	東京府平民	高橋瑞枝
(外鈌)(漢)	東京府平民	高田フミ
(外鈌)(漢)	東京府平民	高須貞婦
(外鈌)(漢)	東京府士族	立田靜
(外鈌)(漢)	靜岡縣士族	竹田さく

(漢)　埼玉縣平民　竹井はな
(外鈌)(漢)　東京府士族　津田梅子
(外鈌)(漢)　宮城縣士族　津田澤代
(外鈌)(漢)　東京府士族　内藤さみ
(外鈌)(漢)　東京府平民　中村直
(外鈌)(漢)　茨城縣平民　中山淑
(外鈌)(漢)　香川縣平民　長尾ぬい
(漢)　靜岡縣士族　永峰有樂
(外鈌)(漢)　石川縣士族　室田柳
(外鈌)(漢)　宮城縣士族　棟方百世
(外鈌)(漢)　靜岡縣士族　井上春
(外鈌)(漢)　東京府士族　井上千代
(外鈌)(漢)　東京府平民　猪俣政
東京府華族　大河内桂子
(外鈌)(漢)　岡山縣平民　大江はな
(外鈌)(漢)　廣島縣士族　町野鈴
(外鈌)　東京府士族　松南千春
(外鈌)(漢)　東京府平民　益田繁
(漢)　東京府士族　小林てい
(外鈌)(漢)　廣島縣士族　小林淨
(外鈌)(漢)　東京府士族　小西はつ
(漢)　東京府士族　兒玉はま
(外鈌)(漢)　東京府平民　塩谷悦
(外鈌)(漢)　東京府平民　寺田たか
(外鈌)　東京府士族　寺島文
(外鈌)(漢)　東京府士族　足立鈴子
(漢)　栃木縣平民　荒川トヨ
(漢)　長野縣平民　安東誠
(外鈌)(漢)　東京府士族　齋藤うめ
(漢)　滋賀縣士族　相馬絞
(外鈌)(漢)　東京府士族　水野貞
(外鈌)(漢)　青森縣士族　源りや
(外鈌)(漢)　千葉縣平民　宮内さく
(外鈌)(漢)　山口縣華族　白根壽美
(外鈌)(漢)　東京府平民　篠萬年青
(外鈌)(漢)　新潟縣平民　清水つれ
(外鈌)(漢)　東京府士族　久野文
(外鈌)(漢)　神奈川縣平民　關房
(外鈌)(漢)　東京府平民　杉村作
(漢)　東京府平民　鈴木マリナ

(備考)　氏名の上に（外）さあるは隨意科外國語を修了せし者、（外鈌）さあるは學科目中外國語を修めざる者、（漢）さあるは隨意科漢文を修了せし者なり

文部大臣演説大要

本日當校の卒業式に臨むは本大臣の甚だ榮さする所にして又國家の爲め慶賀する所なり玆に一言を述べて諸子に告けん

一、近時文運の開進するに從ひ女子教育の忽にすべからざるこさを論ずる者多きも其說く所或は國情に適せず動もすれば却て女子固有の美德を損ぜしむるに至らんさす豈戒めざるべけんや

二、女子教育の要は男子教育の要に譲らず而して特殊の注意を要するもの更に多し從て適切なる教育法を施すこさ頗る難し諸子は多年此等の理論さ方法さを學修したる人なり今日卒業して此校を去らは出でゝは善良なる師さなりて賢良なる婦人を養成し入ては良妻賢母さなりて一般婦女に模範を垂れよ

三、又政府は曩に高等女學校令を發布し大に女子の高等教育の振張を圖れり國家の諸子に待つもの多く又諸子の前途は多望なり諸子は大に品行を修めて斯道に盡し以て仁慈なる　皇后陛下の聖旨を奉じ洪恩の萬一に報んこさを期すべし一言卒業の榮を祝し併せて希望を述ぶさ云ふ

●東京女學館卒業式　去月二十六日東京女學館にて第九回卒業證書授與式を執行したり。當日生徒製作品なる裁縫、生花、書畫等を陳列して來賓の縱覽に供し『君が代』の吹奏を以て式を始め。洋琴連奏の間に卒業證書の授與を行ひぬ。之れより舘長の演述、土方伯の祝辭、卒業生の答辭、或は洋琴獨奏、英詩暗誦、唱歌等ありて全く式を了へ、夫れより二百名許りの來賓に對し教師の手になれる料理の丁寧なる饗應ありき當日の卒業生の姓名左の如。

専門科

東京　糸川　初子　　巖手　原　榮子　　東京　野澤芹栖子

高等女學科撰科

鹿兒島　村田　優子　　大分　上田　㝎子　　鹿兒島　山下　琴子
岐阜　松本　達子　　千葉　松本　琴子　　山口　栗屋　龍子
和歌山　崎山　靜子　　神奈川　澤田　園子　　東京　三宅　　子
同　千賀　茂子

同選科

大分　矢野　達子　　鳥取　山田　鮮子　　東京　土方　綾子
東京　關　直枝子

●高等師範學校卒業生の御庭拜觀　今度卒業したる高等師範學校生徒七十名、幷に女子高等師範學校生徒三十三名は何れも去月二十八日、宮中御庭の拜觀をかたじけなうせり。

●師範學校中學校高等女學校教員國語科豫備試驗は、三月卅一日、四月一日の兩日執行せり。その問題は、

解釋

一、七日の若菜を人の六日にもてさわぎとりちらしなどするに見もしらぬ草を子どものもて來たるを何とかこれをばいふといへどとみにもいはずいざなどこれかれ見あはせてみゝな草となんいふといふもの々あればうべなりけりきかぬ顏なるはなど笑ふに又をかしげなる菊の生ひたるをもてきたれば
つめどなほみゝな草こそつれなけれあまたしあればきくもまじれり」といはまほしけれど聞き入るべくもあらず

二、今は天下只武德に歸して公家あつて何の用にかたつべきさて月卿雲客諸司格勤の所領はいふに及ばず竹園椒房禁裏仙洞の御領までも武家の人押領しける間曲水重陽の宴も絶はてて白馬踏歌の節會も行はれず形の如き儀計りなり
（右は傍線を施したる語句のみを解釋せよ）

三、（い）扶桑豈無影乎浮雲掩而忽昏蘭豈不芳乎秋風吹而先敗
（ろ）苗代の色紙にあそぶかはづかな

右二時間

注意、一問題ごとに別紙に認むべし

作文

神皇正統記を讀む　（普通文體）

右二時間

文法

一、かなづかひ法のおこれる所以を問ふ
二、方言の性質を畧述せよ
三、明治以前に成れる語學書の重なるもの五種を擧げよ
四、左の文章中に誤謬あらば之を指摘しかつ其の理由を述べよ
(い)室内にては高聲に談話を禁ず
(ろ)その誠忠大に人を感ずるものあり宜なるかな芳名赫々として後世に傳ふるや
五、左の文章を文章法の上より解剖せよ
炎治あまた所になりぬれば神事に穢ありといふことは近く人のいひ出だせるなり

右二時間

注意、一問題ごとに別紙に認むべし

文學史

一、足利時代の文學の概略を述べよ
二、歌學に關する書五種の名と其の著者の名とを擧げよ
三、俳諧歌と俳諧との別如何
四、三鏡を解題せよ
五、左の人名を時代の順序に配列せよ
藤井　高尚　藤原　爲家　部　眞香　小澤　蘆庵
紀　時文　藤原　基俊　仙覺　律師

右二時間

注意、一問題ごとに別紙に認むべし

●上海の女公學　清國女子教育の一斑として上海女公學の事を記さんに、この女學校は客年四月創設せられ、桂墅里、陶沙場の兩處に塾舍を置き、女生の數通じて五十餘人、此の程第一期試驗(會考)の執行あり、その法或は題を命じて論を作らしめ、或は聯を出して屬對せしめ、或は書を抽いて背誦せしむるなど、支那在來の舊套を脱せず。女生の年齡は七歳以上二十二歳に至り支那學、洋學各三班を分てり。試驗の成績により褒賞の品目左の如し

支那學第一班　象牙條の姿見一面、香皂一匣宛
仝　第二班　洋製磁杯一對宛
仝　第三班　香水一瓶、安息香一匣宛
洋學第一班　石版康熙字典一部、繡ハンカチーフ一枚宛
仝　第二班　五色箋、東洋封筒各一匣、官商快覽一册宛
仝　第三班　乳毫箋二本、徽墨二挺宛

●毬突歌　埼玉縣學問學校にては、野鄙の俗謠を矯正せん企にて、此の程組合員中にて、敎へ草となるべき毬突歌を作り、師範學校の添削を經て、之を女生徒に敎授したるに、極めて良好の結果を得、其の地の子守女に致るまで、好んで之を謠ふにいたれりといふ。この歌

數へ歌　阪口秋太郎氏作

一ツとや　人と生れしうへからは〱　一ツの功をたてよかし〱

二ッとや　ふだん勉強する人は〳〵　如何なる大事も成し遂ん〳〵
三ッとや　國の民は昔より〳〵　君に忠義に親に孝〳〵
四ッとや　能く〳〵敎へを學び得て〳〵　身の行末をあやまつな〳〵
五ッとや　異國の道に迷はずに〳〵　皇國の大道進み行け〳〵
六ッとや　昔も今もかはりなき〳〵　我が日の本ぞ目出たける〳〵
七ッとや　何をするにも忍耐の〳〵　心がもとゝ思ひしれ〳〵
八ッとや　日本魂いかめしく〳〵　みくにを大事と心せよ〳〵
九ッとや　子供の時に智を研け〳〵　老て悔ゆともかひなけむ〳〵
十　とや　年はまたゝくひまにゆく〳〵　いそぎて進め文のみち〳〵
十一とや　今を春べのをさなごは〳〵　花を咲かせよ實を結べ〳〵
十二とや　庭の訓と師の敎へ〳〵　朝夕心に忘るなよ〳〵
十三とや　坂にのぼする車見よ〳〵　斷をすればあと戻り〳〵
十四とや　知らぬ事をば人に問へ〳〵　一時の恥ははぢならず〳〵
十五とや　五常の道をわきまへて〳〵　兎角みもちをつゝしめや〳〵
十六とや　路頭にさまよふ乞食も〳〵　聖も本は勉不勉〳〵
十七とや　師匠の恩と親の恩〳〵　君の恩こそ尊けれ〳〵
十八とや　初め終りをつゝしみて〳〵　萬の事にたづさはれ〳〵
十九とや　國の爲めとて何事も〳〵　義勇奉公勉めよや〳〵
二十とや　十方世界のその中に〳〵　光り輝く大日本〳〵

數へ歌

瀧澤繁三郎氏作

一ッとや　人と此世に生れたる〳〵　身の幸福ぞ限りなき〳〵
二ッとや　二親さまと大君に〳〵　むくゆる務を忘るなよ〳〵
三ッとや　皆さんまさかに交りて〳〵　必ず言葉もかどだつな〳〵
四ッとや　夜と晝との差別なく〳〵　讀み書きそろばん勵むべし〳〵
五ッとや　いまと昔を明らめて〳〵　御國の尊さ思ひ知れ〳〵
六ッとや　無益に時間を費すは〳〵　身を亡すの初めなり〳〵
七ッとや　泣くも笑ふも我身ゆゑ〳〵　後悔先にはたゝぬぞよ〳〵
八ッとや　病は口より入るものぞ〳〵　ころばぬ先に杖をつけ〳〵
九ッとや　心は人の守りぞや〳〵　こゝに心をこゝろせよ〳〵

十さや　さほき神代の昔しよりく
語り傳ふるこの敎へく

●師岡正胤翁追悼和歌

翁のみうせしよしは、さきに本誌第百七十四號に載せたり。其の死を悼みて四方の子弟舊故より、本日迄に寄せたる和歌、並に五十日祭に於ける井上頼國翁の誄は左の如し。

正胤君の柩の前に奉る　三輪田高房
おこたらば來むといひ來す言の葉のながのわかれとなるぞ悲しき
けふはたゞ昔のことのしのばれてぬるゝたもとはかわかざりけり

追悼　周防 松岡 多吉
いにしへもまれてふ年のことの葉を今日のかたみと見るぞ悲しき

明治卅二年一月十七日師岡大人の館に尋ねて面會せしを
こたびみまかりしと聞きてよめる　武藏 磯部 重浪
過し日にかたりあひしを今日ははやつれなき風にさそはれし哉

師岡大人の身まかりし御墓のみまへにさゝげて
おもひきや君にわかれのかみぬらす露のたまぐし手向ぬるとは

大人のみまかりけるをいたみて　上總 松本 眞垣
此春はあひみまほしと思ひしになど沫雪と君はきえにし

師岡うしのみまかりけるをいたみて　上總 金網 重禮
おもひきや今日もね初る若草のはつかのつゆと君きえんとは

伊豫 初瀨 慭敎
君が行くさきは高天か原なれどかへらぬ旅ぞかなしかりける

京都 池村 邦則
やがて來む春をもまたで君が行くよもつひつらさかいかに寒けむ

師岡うし御葬の日雪いたくふれりときゝて　羽後 柿崎 宗信
みすゞかる信濃の雪といさふ身のなごまかり路を濟きはゆくらん

故師岡翁の靈祭つかへまつるとて　伊豫 潮見 琢磨
ひゞき來てむれもこそうて程遠きながべの松の雪おれの音

おもひきや涙の露のたまぐしをみたまにけふしさゝげなむとは

追悼　伊豫 岩田 直晟
こゝまでは手をひかれきつ行くさきの道のおくかを誰にとはまし

三河 村上 忠淨
世になしと聞くはまことか遠長にみやびの友とたのみたりしを

故師岡大人の尊靈　羽後 伊勢 胤守
かくり世にかへりましてもうつし世に遺す心は世のかたみなる

師岡翁のみたまのみまへに　伊勢 松岡 機子
武藏野のをばながもとのいはなたて君はいにきときくがかなしさ

師岡大人のみまかりけるを悲しみて　伊豫 箱崎 あや子
くるゝ夕あくるあしたはなき君をしのぶおもひは袖しぼりつゝ

師岡翁の登天に驚きおのが心水にはなれし魚の心地せられて　周防 松田 繁藏
君なくて今より誰にことゝはん魂祭るほかせむすべもなし

こその年暮大人の館に「いにしへもまれてふ年をむかへんとこゝろ樂しく送るけふかな」との御詠も今はいたづらとなりしことこそかなしけれ　仝
なゝそぢの齡かされて八千代へん君と思ひしに思ひかけきや

師岡大人のみまかりけるを悼しみまつりて　羽後 淺利 正任
かへりこぬ旅ぞ悲しきしき島の道のをしへ子あとにのこして

師岡大人をしぬびて　仝
たふれらの木首ひきぬきかへりたる時の心のいかにありけむ

師岡翁のかくれ給ひしをかなしひて　愛知 柏木 知貞
もろともにかりのとこよと思ひしをおくるゝ身こそ淋しかりけれ

師岡大人の追悼會に　羽後 宗 愛
なき君の御魂もいとも嬉しやと天降りますらむ今日のむしろに

追悼　羽後 須々木 隆治
後の世にまことを殘せり君のためしなばとよみしうしが言の葉

師岡先生のみまかり給ひけるをかなしみて　伊豫 勝よしの子
ましゝ世を思ひ出づれば水莖のあとを見るにもかなしかりけり

師岡正胤うしの追悼に　上總 金網惣七郎

いまにさく花をもまたで深緑かすみにきえしきみそはかなき
羽後　後藤　信之
師岡正胤翁
醜臣の三代の木首をひきぬきてかちさひませる昔をぞおもふ
伊豫・山本　高之
思ひきやけふふるさとに歸りきてはかなき君のあとゝはんとは
仝　柏井　識
なしと思ふ君にわかれて夕月夜おぼつかなしやしきしまの道
仝　田内　逸有
梅の花ことしもこそにかはらねをあひ見し人はみえぬなりけり
仝　日諸　忠一
千代ませと思ひし君はちりはてゝむかしをしのぶ梅のしたかげ
仝　水野　忠從
見るたびに袖こそしぼれなき人のかたみとなりし水ぐきの跡
羽後　石澤　常義
師岡大人のみまかりけるをいたみて
袖ぬるゝ人ぞ多かるよろづよのはることいはひしかひもなかめに
數島のことのは山の道しるべたのみしかひもなみだなりけり
仝　石川　光胤
師岡大人のみまかり給ひけるをかなしみて
かけたのむこともしび消えて迷ふにもさきだつものは涙なりけり
仝　上野　常子
追福
後の世もたよりとあふぐいと高き松のけふりにのこることのは
伊豫　杉田　基弘
わかれてもまたあふことのありし世を去りにし君の悲しかりけり
仝　後藤　守衛
今よりはたれをたのみてならばまし大和心をうたのこゝろを
仝　城　利惠子
まつやまの松の緑の千代までも世にましませといのりしものを
仝　河原　繁
たのみにし月は雲間にかくれけりこゝろはもとのくもりがちにて
仝　田内　逸有
嬉しくも見るべきものを梅の花うたておもひのまさるはるかな
仝　田内　盛茂
うつし世の人のためとてあ　くれに盡しゝ君かかけなしそ思ふ
仝　關谷　貞

さゝげもしいたゞきもせし大御酒を御魂にといふけふのかなしさ
仝　高市　通福
松山にうゑしふたばのおひさきもみはてゞゆきし君ぞ悲しき
仝　德本　眞宜
かへるさの道なき旅にゆく君をかなしと思へば袖ぞひちぬる
ありし世に君がのこしゝ言の葉も今はかたみとなるが悲しき
仝　上野　君子
かへれども厂には秋のあるものをまつにかひなき君ぞかなしき
仝　小野　眞風
敷島の道のやちまたたどる身のつゑなきけふとなりにけるかな
仝　臨出　朝香
なききみを思ひおこして埋火のもとのめぐみをわすれざらめや
仝　田内　一馬
國のため道のためにとまごゝろを盡しゝひとのあとをなしそ思ふ
仝　早田　知時
追悼
ありし世にものせし君が筆のあとも今はかたみと見るぞかなしき
伊勢　橋村　淳風
おくるゝはさきだつ人をなげくかな君もいくたび袖ぬらしけん
仝　堤　盛言
名をきゝていかで一目と思ひつるきみも世になきひととなりにき
阿波　宮崎　文德
追悼
國のためつくすこゝろの有明のひかりのこして月ぞいるなる
伊豫　中西　盛信
寄花懷德
ありし世をしのぶ心にさく花のつゆもなみだとおもふけふかな
師の君をやみたまへる時うかゞひ奉る文の返しに今一度
松山に立歸りたしとありけれどさまなくうせ給ひぬれば
周防　松岡　多吉
言の葉のはるのみのりをまつかひもなき君しのふけふのかなしさ
仝　吉野　清次
故師岡翁の神靈のみまへに奉る
思ひきやみかけあふぎしこの君に花をたむけて祭るとは
東京　林　精一
梅の花ちりても春はさくものをかへりきまさぬ人ぞかなしき
ゆきみそれふるもいとはずはるばると歸らぬ旅に出たゝしけん

尊師師岡大人世にまし〻時はやつがれこさも樊弘新誌の判をも受け奉りこのみちに深く御心をよせ導きたまひぬるがこたびゆくりなくも去年の冬末つがたより病のいたつきに伏し遂にこさし一月后の三日さいふに鳴呼をしいかな榊葉の露さきはうせ給ひ世にもいはゆる聲其名高くもき〻わたる千里ゆく駒の蹄のあさだにものこらず現し世にかむさり給ひぬるも即遅耳にき〻しもこは夢かさのみうたがはれてかつ驚きかつ歎きつ〻もそゞろに袂をしぼりぬるかついたみ奉りもて

周防　山本　直

言靈のひかりをさやにのこしおきてまことの神にかへる君はも

榊葉にしらかつけせる泡雪のきえてかなしきけふにもあるかな

うぐひすも血になくばかり散る花を慕ふ涙やくるしかりけん

またこぞの冬既に病にか〻らせ給ふ少し前つかた巳れ古稀の賀にほぎのたにたく贈りたまひけるかこは誠にうれしきたまものにしあれば別て御名こりをしくいまはまた見るもなみだのたれさなりけるを今更のように慕はれて

仝

昨日かもいたゞく君が言の葉も千代のかたみさおもはざりしが

仝　西岡　房廉

我が道のしをりさ思ひし君がこの今日のまつりにあふぞ悲しき

仝　上原　信式

千代ませさいのりしものを松山のまつにかひなき君ぞかなしき

仝　二宮　春枝

あなあはれあふぎてまちし君ははや世になき人のかずにいりけり

伊豫　八束　清丈

あふき見しその梅のちりしより我が身もかろゝこゝちこそすれ

師の翁の病のために東京に歸りたまひなむさするにあたりて今一度は松　の里にきたりて諸子に見えんさ又そののちの消息にもいさゞ此の方の戀しう思ひやらる〻さきこえしにぞかひなくて今は世になき人のかずに入り給ひぬることの悲しくはべりて

仝　菅　貞男

今は世にいまさぬ君さ思へども忘れてはなほ松山のさと

故師岡正胤大人の五十日の祭典を神宮にて行はれければ

よめる

仝　久米　次平

靈まつるけふにあはむさ東路を君やいそぎて今歸りこむ

追悼

仝　眞木　好古

なき人のたまやなみだにかよふらんくもる目にしも見ゆる面影

故師岡正胤翁の五十日祭の御祭によみて奉りける

仝　高木　方直

しばしさて別れし人のたまなれば今日のまつりにかへらざらめや

故師岡翁の五十日祭によみて奉りける

仝　高市　源建

ことさらに袖こそけふはしぼりつれ君がめぐみの露か〻る身は

奉追悼故師岡正胤翁五十日祭

仝　久米　尚

ますらをよ君やむなしき萬代にかたりつぐべき名をはさゞめて

師岡翁のみまかりしを悼みて

仝　中田　拙言

名におへる言葉の花をにほはしてちりにし君の後ぞこひしき

哀傷

仝　眞鍋　當兒

春ざれば君きまさんさまちにしを露よりさきに消ゆるはかなさ

仝

仝　木村　信祐

悲しさに思ひしづみてかにかくに言ひ出すべき言の葉もなし

仝　西原　酔霜

君を慕ふ心はそらにあらなくになみだのあめのはる〻まぞなき

仝　渡邊　奇瀾

あふぎてもかひなかりけり限もなくさえにし月の雲がくれして

仝　古川　重庸

千代までさたのみし君は雲がくれかへらぬ空にきえしかなしき

仝　星加　精武

昨日までうけしめぐみの露よりもしげきはけさの涙なりけり

仝　津田　擧重

言の葉のかげさたのみしかひもなしかれし大木の惜しくもあるかな

仝　仲西　顯延

言の葉の錦をあまた殘しおきてあはれあらしに散るもみぢ哉

仝　岡本　松古

文机のさもしびきえて言の葉のしらべもくらしいかにかはせん

仝　星加　喜昌

しきしまの道の栞の花のみをのこしおくさはおもひかけきや

仝　好野　實賢

なき君にたむけまつらん言の葉はいひねぬまでに悲しかりけり　仝　寺田長義

花のさく春をもまたで思ひきやかへらぬたびに君はたゝむと　仝　松本登義

ことのはの花の匂におもかげを殘してちりしきみそかなしき　仝　鈴木正章

しめされし言葉の道のくさぐさも今はかたみとなりにける哉　仝　星加貞篤

言の葉の道の外なる道行きて歸りきまさぬ君そかなしき　仝　野中朝子

すみまし〻やどは昨日のまゝにしてなき君しのふけふの悲しさ　仝　白石梅子

またさらに思ひ出ても忍ぶかな五十日となりぬる今日の祭に　仝　森琴子

淺からぬ君がめぐみを思ふにも今日のまさぬぞかなしかりける　仝　重松高子

かへり來と云ひしことはを殘しおきてなどかくり世に君はいりけん　仝　高市利子

師岡翁の五十日祭によみて奉る

ふたゝびと君がかたりし言の葉の花もかたみとなるぞ悲しき　仝　宇高松子

追悼

いひいでむ言の葉たねてなかりけり餘り悲しき君のわかれに　仝　近藤好子

追悼

かぎりなき涙にそでのぬるゝのみかきてそなへむ言の葉もなし

嶺雪懷舊

師の君をしのふ軒端にふる雪のいづれはかなく積るなる閑　秀郷

不二のねの雪とも高く仰ぎしを消ゆる習ひは逃れざりけむ　彦の丞

君ゆきて學の道もしら雪のたどるすべなくなりにけるかな　清足

草の名のしのぶに積る白雪のきねてはかなき君をしそ思ふ　蕭堂

亡き君を忍ぶる袖にふりつもる雪やなみだの氷るなるらむ　千城

白妙に積れるきねて白雪のいさぎよき名ぞ世には殘らむ　正根

ふる雪のはかなき見ても忍ふかなきねてかへらぬ人の昔を　通敬

君まさは道のまとひもしら雪のさけて昔を忍ばざらまし　通数

千代ませと祈りしものを玉松の雪には堪へで折れにける哉　和民

これの小床に坐せ奉り齋ひ奉る師岡正胤大人の靈前に白さく大人が野邊の送り仕へ奉れりしは昨日にかありけむ一昨日にかありけむと旦夕に偲び奉る意には中垣の隔もあらぬを日數はやゝゝに經行き隔りつゝ今日ははや五十日の祭仕へ奉り御靈を慰め奉り其昔をも誄ひ奉らくと供へ奉る種々の味つ物を甘らに受けうつのひ給ひ安らに聞し食賜へかしあはれ大人よあはれ御靈よ汝が命が生出でまし〻は文政十二年にしてかくれ給ひしは今年の一月末つかたなり其の間の年月は七十年ばかりこそ數へつゝ思ひ奉れば宜も人の生は朝露の如くなるかも大人が都にまして稜威雄の利心もて正しき道を人々に說き示し劒の霜に氷の刄に人心を寒からしめいかで皇統一系に高御座天つ日嗣しろしめし〻古のさまに復し奉らばやと夜に晝に勤め勵み勞かれたる又明治の大御代となりて刑法官監察知事に彈正臺に神祇官に轉り仕へて時めき給ひたる位山に登りては從七位より正七位に進み神に仕へましては松尾山の常磐堅磐に君が代をいはひ給ひたる道を教へ人を導きては權中教正にまで任げられたる等皆汝命の性質正しく直くまして石上千代の古道を玉椿つばらかに明らめ櫛の葉の名におふ宮の古事を明らかに究め給ひし深く遠く廣く賢き御心にこそ據れと其の功を慕ひまつり仰ぎまつれば汝が命の倭心の鏡に見ね渡りていよゝますます現身のすべなき事を偲はひ知られてあたらしくうれはしくもありける然はあれともたまきはる二世はゆかぬ習ひにしあれば汝か命の御靈は此の家の守神と永く久しく鎭坐て子孫の行末かげて教へ導きさきは給ひ神習はしめ給ひて汝が命の志を繼ぎもて傳へ行きぬべき子孫生れいでしめ家門廣く賑ひ榮ゆる家とあらしめ給へと謹み敬ひ伏しをがみて白す

明治三十二年三月十三日

● 衣類貯藏方　井上頼圀

（一）年々二回づゝ即ち土用乾と寒乾とを爲す事（二）衣類は毎月三回位疊み直すの必要ある事（三）着物の疊み目に綿杯を挾置く事（四）簞笥の中に虫除を施すべき事等は衣類を貯藏するに就て最も必要

の事なるが、此簞笥の中に虫除をなすには、樟腦を衣類中に挾むも宜けれども、是は絹物には爲すべからず、樟腦は香氣激烈にして着物の地質を損ね、色合を變せしむるの虞れあり。又麝香も强きに過るの傾きあり、丁子は用ゐて安全なれども効能微弱なり。最も効能あるは、松の青葉を水一升に炭酸曹達四合を溶解たる液に入れ、鍋に入れて沸騰せしめ、泡の立てろにして是を他の器に移し、此液を抽斗の內面に引き置く事なり云々と某外字雜誌に見えたり。

●新發明寢臺　橋本赤十字社病院長の創意に係る新式寢臺の體裁は、非常に便利なる工夫にて、重傷患者施療中仰臥の儘、身體を微動せずして毫も差支へなく兩便を通ずるを得る仕掛なるが、過般伊藤侯の母堂が、打撲傷に依て大磯に病臥せられし際、同侯の依賴に依り之を貸附せし處、大學其他の名醫續々來診する毎に、該寢臺の嶄新なる意匠を嘆賞し、終に數臺づゝ新調讓渡しの儀を同院長に向け依賴し越したれど、目下院內に於て夫々製作中の由なるが、尙は引續き同院備付品をも製造し、追つては各衛戍地病院へも普及せしむる計畫なりと。

●今世紀の女傑　此程英國の一雜誌は、投票を以て今世紀の女傑を募集したるに、左の結果を得たりといふ。

英國女皇、フロレンス、ナイチンゲール、エリサベスフライ、バーデット、クート男爵夫人、ウエルス王妃。テック公爵夫人、シスター、ドラアグネスウエストングレース、ダーリング、アリース王妃、ソマーセット夫人、ハヴワーガル

●歌詩書畫懇請　左の如きものを寄せられたり。

歌詩書畫懇請　題御隨意（用紙歌詩は色紙短冊他は隨意）

生の父名は三好年甫て十九志を立てゝ一衣一椀奮然兄家を辭し赤手商界に身を投ず爾來二十有余年の間幾多艱難の坂を踰ゆ貧苦の途を辿りつゝ百折屈せず千挫撓まず一意初志を變ぜざりしかば神や其心を憫みけん今や志業稍や其緒に就きぬ而して本年は父母俱に初老に相當するを以て弘く海內諸名家の詩歌書畫を乞ひて額面屛風並に帖を製し賀宴の光を添へ且は永く家寶となし聊創業の勞を慰め以て孝養の萬一を盡さんとす希くば世の諸大家野子が微衷を憐み金玉の詠吟飛龍精妙の書畫を惜み玉はず陸續御惠贈の程伏して祈り奉る
尙賀集編輯の都合有之候に付爵位氏名等御詳記あらんことを祈る
追て錦地知已の諸雅君及び御門下生多々御勸誘を乞ひ奉る

但馬國城崎郡國府村ノ內上郷村

明治三十二年三月　赤木實　百拜

●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題　　　住所　姓名
…………………………
…………………………
…………………………

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むし。

文書式

題　　　住所　姓名
……、……、……。……
……、……、……、……
……。……、……。……
……、……、……、……
……、……、……。

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。
○書式に違ひたるは總て沒書とす。
○女子は、なにびとにても隨意に投稿することを得

明治三十二年度女鑑歌文月並兼題

日付		題	〆切
四月廿日	歌	汐干狩	四月十日〆切
	文	遲咲の櫻を見て	
五月五日	歌	海邊新樹	四月廿五日〆切
	文	自ら戒むる詞	
五月廿日	歌	牡丹	五月十日〆切
	文	郭公	
六月五日	歌	瞿麥	五月廿五日〆切
	文	遠方なる叔母君の病をとふ文	
六月廿日	歌	浦夏月	六月十日〆切
	文	遠方より母の病を訪れたるに答ふる文	
七月五日	歌	閨扇	六月廿五日〆切
	文	待雨	



敎の庭

四月五日兼題　花滿山

天　伊豫國松山市鐵砲町十八番戸　野中朝子

春山のかすみのまそてひろけれど
つゝむにあまるはなざかり哉

地　東京淺草區新福井町二　吾妻ちか子

よそめには高根むかりとみし花の
のぼる山路もさかりなりけり

人　伊豫松山二番町　宇高まつ子

咲く花のくもよりほかの色もなし
なにをしをりに山路たどらん

秀逸（十首）

いづこより分けて入らまし吉野山
花にうもれぬみちしなければ　淡路　泉くら子

よしの山花のさかりをきて見れば
雲にわけいるこゝちこそすれ　越前　山田璋子

峯にをたつしら雲とみえつるは
山つゞきさく花にぞありける　磐城　坂田康子

よしの山はてこそしらね峯も尾も
花のにほはぬかたしなければ　伊勢　河村君子

白雲のやまのはごとにかゝるかと
みしはさくらのさかりなり皃　肥後　德永廣子

みねは雲ふもとは雪とまがふまで
はなのさかりになりにける哉　羽後　佐々敏子

よしの山たどらん途もわかぬまで
うづみはてけり花のしらくも　奈良　春永己子

白雲とみえしははなのよそめにて
山はさくらにうづもれにけり　越中　吉岡歌子

わけのぼる道こそなけれよしの山
千本のはなのさきのさかりは　岡山　降田槇子

このごろは峯もふもともさく花の
雲のかゝらぬやまなかりけり　三河　賀茂笹子

（以下原稿到着順）

咲きみちしよしのゝやまのはる風に
はなのしらなみにほひてぞたつ　仁保基子

山のはゝみなしろたへにみねそめて
にほへろゆきは花にぞありけり　澁口貞子

咲きみちしよしのゝ山のさくらはな
ゆきかくもかとまがひぬろかな　中山登美子

昨日見しつぼみもさきてあすかやま
今日はさくらのさかりなりけり　小野けさじ子

咲きみちてみねもふもともよしの山
はなよりほかのいろなかりけり　永井さい子

かすみとも雲ともわかぬよしの山
にほへるゆきはさくらなりけり　石井豊子

山つみのかみのみそかとみねつるは
ちりもはじめぬ花にぞありける　佐々小學子

朝ゆふにみなれしやまもさくばなの
さかりはことにうるはしきかな　佐々有鄰子

さきならずふりつる雪とまがふまで
よものやまべははなさきにけり　下多廣子

おほそらもにほふばかりしよしの山
千もとのはなはいまさかりなり　羽室粂子

しろたへのきぬきて人のふすかとも
見ゆるはやまのはなさかりかも　高島嵩子

ふもとより峰にかゝれるしらくもは
いまをさかりのはなのいろかも　杉野ぬひ子

みねふもと花のさかりにうづもれて
あかぬながめやみよしのやま　中村嘉枝子

のどかなる春のひかりをよそにして
まづみらるゝかやまさくらはな　木村喜枝子

四方山のみねもふもともひまもなし
はなのあるじのはるのさかりは　龜山富子

みわたせば雲かかすみかまさかりに
やまのさくらはさきみちてけり　龜川作子

おしなべて花のやまにぞなりにける
まつのむらだちいろやかへけん　根岸豊子

をか山のみねにも尾にもしらくもの
かゝるとみしはさくらなりけり　住山幾子

そま人もつま木にそへて手をるなり　本庄志雅子

やまはさくらのさかりなるらん

見渡せばたかねよりしてふもとまで
はなにうもれぬかたなかりけり　田代喜和子

よしの山みねもふもともしろたへの
ゆきならぬはなにうつもにけり　田代艶子

しらくものかゝると見ればよしの山
みねもふもとも花にぞありける　田代綾子

よしの山みねにもたにもはなみちて
かすみのうちも香ににほふなり　大谷友子

しらくもとふみわけいれば山ざくら
にほふかぜにぞむせばれにける　高橋信子

聞きしにもまさるは花のよしのやま
みちわかぬまで咲きにほひつゝ　竹村竹里子

しら雲と見ねにしはなはさくらにて
いつれをやまさひこのいふらん　西内花子

山はいまいろをくらふるまつもなし
やへひとへにさけるさくらに　福原菫子

わけて入る道こそなけれよし野やま
みねもふもともはなのしらくも　工藤仁子

いづこよりまづやながめん吉野やま
すきまなきまではなのさければ　高橋天籟子

みよしのゝ吉野のやまはさきみちて
はなのにほひのおくもしられず　宇野定子

さくはなにみちは埋もれてよしのやま
去年のしをりもなくなりにけり　泉さい子

山まつのみどりもいつかうづもれて
はなよりほかのいろなかりけり　森やす子

あらし山なべてさくらとなりにけり
たにまのまつもはなにうもれて　友永章子

さきみちて今をさかりさみよし野の
はなのかぎりはしらくものそら　鹿瀬島嘉子

山はみなみわたすかぎりさきにほふ
さくらかされになりにけるかな　吉富彦子

さきにほふ花のさかりさなりぬれば
ゆきかつもるさみゆるやまには　永目茜子

おしなべて谷もたかねもさかりなり
はなにうもれしみよし野のやま　那須昌子

峰に尾にさきこそつゞけみよしのゝ
やまはさながらさくらなりけり　村崎包子

峰ふもさくもかゆきかさみねけるは
はななりけりなみよしのゝやま　黒田明子

よそめには雲かゆきかさまがへども
にほひにしるきみよし野のはな　虎口資子

ふもさより峰にかゝれるしらくもさ
見ねしははなのさかりなりけり　山田婦美子

白くもさまがふばかりにみよしのゝ
やまにみちたるさくらばなかな　寺岡むつの子

さくはなは山まやまにつゝくらん
はてはかすみてそれさみねれご　板井喜世子

こゝろあてに松のみさりもわかぬまで
やままたやまははなざかりなり　畠山百合子

咲き匂ふはなにたぐひもあらしやま
たゞしらくものかゝろなりけり　畠山千代子

みよし野のやまべは見ゆる限りまで
むらなく咲けるさくらなりけり　西元花子

さめて來しよしのゝやまは花かすみ
香りにそれさしられけるかな　立神富子

行けさ〳〵いつこをそれさしら雲の
かゝろさみゆるみよしのゝやま　安原くに子

はなやくも雲やかすみさまがふまで
おぼろににほふみよしのゝやま　塩田直子

さくらばなさかぬあたりを吾見つさ
ほこらまほしきみよしのゝやま　柳澤はる子

み吉野はやまにあまりてさきつゞく
花になづけし名にこそありける　小林すゑ子

みよし野の青根かみれもはるはなほ
はなよりほかのいろなかりけり　名取よし子

わけてこしふもさもみれもしら雲の
うつみはてたるはなのやまかな　名取正代子

はるされば松のみどりもうつもれて
はなにはてなきみよしのゝやま　坂田喜美子

たちまよふかすみか雲かわかぬまで
はなにぞおほふみよしのゝやま　綿野りき子

山ざくらさかぬ方なくなりぬらし
みれにふもさににほふしらくも　港谷以久子

山かげもよきて吹かなんみれに尾に
咲きつゞきたるはなのこずゑを　湊谷恭子

みよし野の吉野のやまのさくらばな
いまをさかりにさきみちにけり　小野久良子

よしのやまふりさけ見ればみれも尾も
はなよりほかのいろなかりけり　八木沼里子

咲きつゝくよしのゝやまにあめはれて
たねまさみしはおそさくらばな　河田いし子

四方山もはるのひかりは知られけり
たなびきわたるはなのしらくも　上野久子

春の夜のつきをおしまぬしらくもは
たかれにさけるさくらなりけり　上野きやう子

吉野がはうつらふはろのかげ見れば
はなよりほかにいろなかりけり　上野さめ子

をしなべて今をさかりさなりぬらし
みれもふもさもはなつゝみして　岡村好子

榮ひさのかへさにきけばたなびけろ
かすみはやまのさくらなりけり　上野米子

をしなべてはなのさくらさなりにけり
やまのはろかぜこゝろしてふけ　上野光子

山のはになべてかゝれろしらくもは
そらさへにほふさくらなりけり　阿部與宇子

たらはぬが世のつれなろにみ吉野の
やまにはさくらさきみちにけり　新井政子

しら雲のたちおほひぬを見ろばかり
よし野のやまははなざかりなり　新井登代子

やまさくらみれにも尾もさきみてり
あらしよつよく吹かすもあなん　湊谷爲子

みわたせばはなよりほかに色もなし
みれにもをにもさきみたれつゝ　清水すみ子

四方山ははなのふゞきにうづもれて
あやめもわかぬはろのあけぼの　吉田ひさ子

ゆきさみぬひさはあらしの山ざくら
くまなくにほふはなのしろたへ　岡山さり子

かのやまにはなのしら雲かゝりけり
けふはのぼりてさくらかりせん　李家貢實子

昨日今日みれにも尾にも咲きみちて
はてこそ見えれやまさくらはな　谷口房子

見渡せばみれもふもさもをしなべて
はなのすがたになりにけろかな　谷口さだ子

きて見ればこゝもかしこも花ざかり　高橋蔦子

いつれまこさのみれのしらくも

みよしのゝよのしの山のさくらばな
みれにもをにもさきみちにけり　牧瀬かう子

見渡せばくもかゆきかさまごふまで
はな咲きつゝくみよしのゝ山　青木たま子

ちはやふろ神路のやまのさくらはな
くもかゆきかさあやまたれけり　六鹿ひろ子

風のいろすきもなきまでみよしのゝ
やまのさくらはさきみちにけり　石川類子

分けいらん道もなきまでみよしのゝ
やまはさくらにうつもれにけり　石川樂子

やまさくら今をさかりさ咲きみちて
みれもふもさもはなぞにほへろ　石川南江子

ゆけさ〳〵はてなき花のよしのやま
くも路をたさろこゝちこそすれ　石川久子

つま木ころしづがころも手游ろなり
やまみなはなにうづもれしころ　目黑佐喜子

山さいへさそらだにみえずよしの山
咲きみだれたろはなのこずゑに　依田さく子

遠やまはまつのみさりも見えぬまで
なべてさくらになりにけろかな　村松月子

しら雲のつゝむさ見えしみよし野の
やまはさくらのさかりなりけり　德永萬壽子

さきにほふ花よりほかのいろもなし
さくらにつゝむみよし野のやま　小森田輝子

みよし野の吉野のはろは今日ならん
やまのすがたもはなのしらくも　坂本遊多歌子

みわたせばみれにも尾にも白くもの
かゝろやはなのさかりなろらん　白石梅子

うちみればまつもくぬきもづもれて
　やまはみながらさくらなりけり　横山柳子

山ひめのかすみのころもにほふまで
　やへもひさへもはなのまさかり　横山壽賀子

白くものなべてさすさ見ねにけり
　はなにうもろゝみよしのゝやま　堀　いさむ子

吉野山いつこをさしてわけ入らん
　みれもふもさもはなさかりなり　佐藤喜代子

おしなべてはな咲きみてろみ吉野や
　いづれのみちかしをりして見ん　都志津子

見渡せばしらくもきほふこゝちして
　はなにみちたろみよしのゝやま　有馬飛佐子

あづさゆみ春立ち來ればみよしのゝ
　山のかきりははなにぞありける　豊岡さい子

うちなびくかすみさ見しは夫ならで
　よしのゝやまのさくらなりげり　五十嵐佐武子

さくらばな峰もふもさも咲き滿ちて
　くものなかゆくこゝちこそすれ　山崎登久子

香に耻ぢて月も朧ろに出でにけり
　よしのゝやまのはなのさかりは　五十嵐美津子

ゆきかはた雲かさばかりみよしのゝ
　やまはさくらにうづもれにけり　河原芳子

かぎりなき雲そさみしはよしのやま
　さきのさかりは花にぞあろけろ　小野寺てふ子

しら雲のたてろさみしはよしのなろ
　やまのさくらのはなざかりかも　山中糸子

咲きみちてこさ木もみねず吉野やま
　やまはみながらさくらなろらん　仲田恵以子

白くものなびくさみねしよしのやま　吉岡純子

吉野やまゆくてのみちもわかぬまで
　かをろやはなのさかりなろらん　濱田なほ子

八重ざくらさきみちに兜やまのおも
　はなのさかりになりにけろかな　水島清子

白くものたなびくさのみ見たりしは
　はなより外かにいろのなきまで　芦邊きよ子

あし引のやまのをのへはきのふけふ
　やまもせに咲くさくらなりけり　井上まさ子

うたかひのこゝろにかゝろ雲ならで
　ひまなくかゝろはなのしらくも　立石哲代子

行く人もくもわけのぼろこゝちせん
　やまをおほふはさくらなりけり　田邊てる子

咲きにほふ花こそ滿つれみよし野は
　よしのゝやまのはなのさかりは　西　艶子

さくら花みれもふもさもさきみちて
　やまさやいはんさくらさやいん　高橋銀子

そま人のかへさにさけはみよしのゝ
　くもにわけいろこゝちこそすれ　新隈よれ子

よしのやまみちさへ花にうづもりて
　たかれのくもはさくらなりけり　黒木のぶ子

みわたせばうき世の外のこゝちして
　わからぬまでにみゆろ今日かな　賀屋壽子

ひさかたの雲かさばかりおもふまで
　はなにうもろろみよしのゝやま　杉田のぶ子

山はみなさくらなりけりみれも尾も
　よしのゝやまにはなぞさきける　外川なほ子

このごろはさくらの花にうづもれて
　さながらかゝろはなのしらくも　高橋信子
　くもゐにつゞくあまのかくやま

よしの山みねもふもともおしなべて
のこるかげなく咲けるはなかな　小出しきみ子

みよしのゝ山はさくらにうづもれて
みねもふもともいまさかりなり　外川さい子

よしの山はなのさかりのこのごろは
かすみのおくもさくらなりけり　外川益子

しろたへに雲のふれると見ゆるかな
よし野のやまのはなのさかりは　朝岡たつ子

白ゆきのうづむとみしはよしのやま
さくらのはなのさかりなりけり　宮崎せん子

みよし野の山はさくらにうづもれて
くもにわけ入るこゝ地こそすれ　金原吉子

峰ふもとよしのゝやまはさくらにて
たゞしらくもと見えわたるかな　林環子

打かすむひまこそなけれおしなべて
はなよりはなのみよしのゝやま　藤澤萩子

おしなべて雲もさくらにうづもれぬ
咲けるさかりのみよし野のやま　小倉たか子

よし野やま峰もふもともおしなべて
はなよりほかのいろなかりけり　高砂菊代子

きのふ今日雲もかすみもおしこめて
さくらにうづむみよし野のやま　高砂き代子

ながむれは峰もふもともおしなべて
たなびきにけりはるのしらくも　永井しん子

よしの山さくらのはなにうづもれて
まつのいろさへ見えわかぬなり　阿部光子

よしのやまかすみの袖につゝみても
つゝみあまれるはなざかりかな　大溪しげ子

よしの山やまはさぐらにうづもれて
はてもわかたずさきみちにけり　萩原章子

雲とみしこゝろならひのさくらはな
なへてさかりとなれるやまかな　諸井久良子

さほやまのみねにも尾にもしら雲の
かゝるやはなのさかりなるらむ　戸塚てつ子

わけのぼるかたこそしられよしの山
千本のはなのさきにほひつゝ　杉浦糸子

一木だにさきものこらであつさゆみ
はるのやまへのはなさかりなり　館脇ます子

朝まだきやまぢのはなのさきみちて
そらもにほひにかすみぬるかな　新海わか子

よしの山八重のかすみのかゝるとも
まがふはかりにはなぞさきける　吉田碩子

たかたやまくまなく花のさきければ
滋賀ゆくひとはかすみとやみむ　吉田元子

いづこより咲きつゞきけむよしの山
さくらのはなのはてしなきまで　眞島千鶴子

峰もをもうごかぬくもにおほはれて
はなのにほひもうちにこもらむ　三段埼美智子

峰つゞきかすみの上のゆきとみしは
咲きものこらぬさくらなりけり　池澤天與子

咲きにけりよしのゝ山はうづもれて
はなばかりぞとおもはるゝまで　高屋はきの子

みわたせは雲かとはかりみよしのは
さくらはやまにさきみちにける　前原つた子

名にしおふひとめ千本のよしのやま
はなのほかにはみちなかりけり　絹川ますゑ子

みねも尾も匂ふさくらのさきみちて
わけいりまよふみよしのゝやま　日吉あさ子

よしの山とめこしかひもなかりけり
さきにほふはなにみちのなければ
早川重子

吉野やまみれにもをにもおしなべて
けふそさかりと咲きみちにけり
寺本もとゑ子

五百重たつくもにもまがふ山さくら
かすみのまよりにほひそめけり
木原夙子

いさ花にこよひひとよのやとからん
やまのさくらのはてしなりけれ
佐々木さく子

春かすみたちところなくなりにけり
なはのおほへるみよしのゝやま
日高かず子

うるはしく花さきいてゝ世の中の
はるをしめたるみよしののやま
酒井小樂子

よしの山はなのさかりになりにけり
ゆきかくもかとにほふなるらん
横手こう子

よしの山見ゆるかぎりはさくらにて
日のてるそらにゆきやふるらん
横手たつ子

さくらいろに雲もにほひてよしのやま
はなにうもれぬかたなかりけり
森こと子

あらし山かすみのおくはおしなべて
さくらにゝほふはるとなりけり
濱さみ子

吉野山まつもひのきもうつもれて
かゝれるくもはさくらなりけり
佐伯きぬ子

さくら花いまをさかりとよしのやま
みにくるひともやまにみちけり
高本茂子

たちならぶ松もうもれてあらしやま
ふりつむものは花にぞありける
小川清子

みれになにかゝりてきねしら雲と
みしはさかりのさくらなりけり
久保井久良子

ふみ入らん道こそなけれよしのやま
みれもふもともはなばかりにて
北原季子

はるがすみふかくみゆるやあすか山
たかまのさくらさけるなりける
下田春子

みわたせばみれもふもとも花さきて
やまふところに八重かすみたつ
下田典子

みやこ人いざや來て見よやま〳〵は
いまぞさくらのさかりなりける
藤凡さく子

しらくもの棚ひくかごと見ゆるかな
外やまのさくらさきのさかりは
杉山かれ子

やまひめのしろき手織のころももて
つゝむに似たるはなさかりかな
久松鶴伊子

よしの山いまをさかりとさきみちて
くもゝさくらにうつもれにけり
大音ふみ子

常磐木のむら立みねしみよしのゝ
やまはのこらすはなとなりけり
松本かれ子

白くものたなびくごとく咲きみちぬ
よしのゝやまのやまざくらばな
市毛きよ子

吉野山なべてさくらとなりにけり
くもゝかすみもいつちいにけん
上杉光子

いかばかりさけるさくらぞ吉野やま
はなよりほかのいろなかりけり
阪口服子

しろたへの雪かかすみかはたくもか
あらしのみれのやまざくらばな
三苫なつ子

さくらばな咲のさかりはあらし山
まつのみどりもかくろひにけり
勝山忠子

あしひきのやまの峰にもふもとにも
咲き満ちにけりはなのみよし野
五味いう子

これはこれはとばかり花のよしのやま
みれにも尾にも咲きみちにけり
宮川流子

くもかゆきかとばかり見えてみ吉野は
　はななきやまとなりにけるかな　宮川楓子

のぼりてもなほのぼりてもみ吉のゝ
　よしのゝやまはさくらなりけり　佐野幾代子

よしの山ふもとも尾にもはなさきて
　くもにわけいるこゝちこそすれ　尾崎嘉子

しらくものかゝると見れば峰も尾も
　みなしきしまのやまさくらばな　錦織幸子

さながらに雲かかすみとみゆるまで
　はなさきつゞくみよしのゝやま　小松静子

峰も尾もみゆるかぎりはさくらはな
　さかりをきほふみよしのゝやま　小松清子

やまつゝきふもとも奥もおしなべて
　さきつゞきたるはなさくらかな　錦織涼月子

あめはれて花はのこらす咲きぬらむ
　くもこそはれれみねにふもとに　加藤加壽子

いくたびかさくらのもとにやすらひて
　わけゆくさきもはなのしらくも　服部萬子

さくらのいろよりほかにあらしやま
　まつのみどりはたゞはつかにて　河合ぬひ子

さきにほふはなのたかねにみおろせば
　ふもともなべてさくらなりけり　村田多豆子

のどかなる春のやまべをとひ行けば
　みねもふもともはなのしらゆき　大久保美與子

山はみなうすくれなゐにかすみけり
　いまやさくらのさかりなるらむ　山根久子

さきをなるはなよりほかに色もなし
　みゆるかぎりはさくらなるらん　澤田春子

にほひいでゝゆくもかへるも花さかり　澤田十萬里子

　みるめにあまるやまさくらかな

あしびきのやました風もにほふらん
　はなのはやしのさきみちにけり　服部・錦子

よしのやま見ゆるかぎりは花ながら
　かすみのをくぞなほもゆかしき　服部桑子

よしのやまこゝろにかゝるしら雲に
　まよふははなのさかりなりけり　櫻井清子

白ゆきとまこふはかりにおもひけり
　はなのさかりとみよし野のやま　青木秀子

うちつゞきながめかぎろふ果ぞなき
　はなよりはなのみよしのゝやま　河越てる子

よのほとに咲きみちぬらん山ざくら
　みねにたなびくけさのしらくも　椎野ぬき子

道かへてあすもたづねんよしのやま
　はなよりはなにつゞくさかりを　根本五十子

ゆけどゆけどさつゝいろかのよしの山
　たがいつのよにうゑそめにけん　長尾たか子

大そらのはてまでつゞくさくらかも
　かぎりもみえぬみよし野のやま　齋藤義子

みねいくへ咲きておほへるさくら花
　これやまとのにしきなるらん　松島きみ子

しらくものおほひし山と見たりしは
　いまをさかりの花にぞ有りける　春波不佐子

四月五日兼題　花下に月を賞す

天

横濱市本町壹丁目　錦野りき子

集ひし人の歸り行きそ、花のあたりをくらうなりにけ

るに、東の空よりさし匂ひたる月かげ、てりもせず曇りもはてず、いとやさしうえんに、花も一入色そひぬる心地ぞする、やう〳〵更け行くにつけ、もの〻音もたゝず、立ちまよふ塵もをさまりて、實に此世のものとも覺えずなん。

地　伊勢宇治中之切河村君子方　管谷とみ子

千里の外まで隈なうすみ渡る光こそ、秋の夕には及ばざらめ『てりもせずくもりもはてぬ』とか云ひけん月影を、花の下陰にやどりてながむる春の夜、また一しほなりや。雪か雲かとあやまたるゝ花のたえまよりもるゝ影は、えんにうるはしく、月の匂か花の光かいとおぼつかなし、春宵一刻價千金とは、かゝるをや云ふべからん、げに、月影も花の姿におひて、一きはたちまさりてめでたく見ゆ。あはれかくも影のうちかすむは、花の姿に耻らひてにや、あらず、花の枕に夢むすぶ月讀男こそ、いとめでたくうらやましけれ。

人　東京四ッ谷區傳馬町一ノ五十四番地　目黒佐喜子

咲けば散るものと知りながら、とかく待たれぬるは花の盛りなりけり。其花も、やう〳〵見るべくなりし昨日今日、あはれ、此花に、月もがなと願ふ人の慾こそ限りなけれ。さる程に、待ち〳〵し月は、嬉しくも今宵花の梢に昇りぬ、まづ居間を燈火に守らせて、獨り庭に下りたてば、妙なる薫りに面を打たれて、偖いづれの花蔭にか立ち寄らましと打まどひぬる中に、一本ふりをかしう枝垂れたるに、心引かれて、歩み寄りつ、木の下の椅子に、腰打掛けて、やすらふ程に、心のどけさいふばかりなし、仰ぎ見れば、空には、おもはゆげなる顏して、下界を打見やる月の、花と語るやう見え、花は亦、笑みて答ふるかとおぼゆ。あはれ月と花よ、いまし等は、幾萬代の昔より貴き賤きの隔てなく、人の心を慰め來しぞ、空蟬の世は、憂き物と思ひ捨てても、思ひ捨て難きは、月の顏と、花の姿よ抔、思ひ續けて、ほと太息つけば、折しも雲間に隱れし月は、朧げながら面を見せ、花亦一片、靜かに衿もとに散り來て、共にうなづき顏なるも、折柄をかしうてなむ。

（以下原稿到着順）

友永章子

夕げをもすまして、庭のあたりをそゞろあるきしけるに、友どち二人三人おとづれぬ、いとうれしきことにおもひつゝ、今日はいづこに花をめでん、明日はいづこにたづねんと、ひたすら野山の花のものがたりにうつりつるに、庭のさくらも心ありげににほひいでぬ、いざ花かげに月まつも興あらんと、酒とゝのへて待居るほどに、山の端はやゝいろめきて、かすめる空にうす衣もて包めるごとく、のぼるを、くみかはす盃には、木間よりもれくる月の影いよ〳〵をもしろし。

ちりもせばこのさかづきにくみとらん
つきの夜すがらはなのしたかげ

などうちずしつるに、大路ゆく車のおともいとしづまりたれば、夜もふけぬらんと、なごりをしくも明日をちぎりて友達はかへりぬ、妾も

なにとなく立ちうかりければ、

　つきかげをはなのこずゑにのこしおきて
　　ねやのいた戸はさゝれざりけり

小林すゑ子

あはれこの花、あはれこの月、薄絹につゝみしたまかこの月、空にしられぬ雪かこの花、雁の一つらは霞に消えて、笛をもしろきこの春のよ、花をかし、月またをかし、まことやこの一ときあたひはかりなし、花に清き香月にかげ、物のあはれは秋ぞまたぬとながめけんむかしの人に見せばや、とおもふこの月花。

名取正代子

月ばかりあはれなるものはあらじかし、秋のさやかなるもいみじけれど、猶花の雲間に、てりもせずくもりもはてぬこそ、なか〳〵にあかぬ心地のせらるれ、或夕べ、空いと清うすみ渡りて、やがてさしのぼる月影、いと花やかなるに、友垣二たり三人伴ひて、菜の堤わたりにさまよひゆきつ、折しも彌生のなから斗りなりければ、花は今を盛にさきみちて、そよとの風も思ごかるゝ斗りなりき、さるを、彼明かりし月影は、同じ匂ひに霞みあひつゝ、木の間をもれて、あるはさやかに、或はおぼろに匂へるなど、其景色のめでたさ、げにたとふる物なし、まして、筆にも繪にもえうつすべくもあらず、されば、たゞあはれあはれとおもふ〳〵、ほめたゝへつべき言の葉さへすくみていでかねるぞ、いと〳〵口をしくも又拙きかぎりなる、さても、かゝるめでたき月花のけしきは、春ならではいつかはふたゝび見得らるべきとおもふに、いよゝ心も空にあくがれて、夜のふくるもしらざりき、さる程に、ひんがしの山際ほの〴〵と霞みわたりて、有明の月影しらみそむるにおどろきて、家にかへり、足らはぬ言の葉だに物にかいつけんとて、かくなん。

八木沼里子

咲く花の心の程は知られねども、春毎に親しき友とめではやしゝわが前栽の櫻の、今しも時得顔に咲きも殘らず散りもはじめぬ眞盛りにて、花に胡蝶の舞ふさまなど、げにいひしらぬながめなり、されば、雨風のあだなき中、思ふどち打ちつどひ、おなじくはにほへる花にかすめる月をかざして、めもあやにながめなば、花の心もいとうれしからんと、今宵は花の木蔭のまうけのむしろにまさぬしぬ、花こそ今宵のあるじなれ、月こそ今宵のまらうどなれ、あるじの花のゆかしきに、月のかげのさしそへなば、いかに今宵のたのしからんと、人々はやあざれあひて笑ふ、頃しも三五の月の、花やかに空のあなたにさしのぼりけるが、花のにほひの空に滿ちけん、かすむともなくかすみそめけるに、吹くとしもあらぬ下風に、かをりもいやまさりぬれば、人々めでたくかへり、あるは其のながめをうつすあり、興はいよ〳〵まさり、月はいよ〳〵高く、ぬるく吹く風に二ひら三ひら散りくる花のさま、花月の唱歌の折にあひてと、やがて聲うちそろひてうたひぬ、實にや、今宵の遊びこそ、えもいはれぬけしきにさしそへて、千ひらのこがねにあたひせめと思はるれば、後の日の思ひ出草にもと、月の光りにかくは物しつ。

中村さく子

一夕讀書を終り臥床に入らんとせしが、ふと心づきしは、今宵は十五夜なれば、夜の景色如何ならんと、庭下駄穿ちつゝ、梅林に至れば、花は時を笑顔に咲き揃ひぬ、仰げば空は隈なく晴れ渡り、一輪の明月梅樹の間に懸り、花月相映じて梅林を照せり、今若し花ありとも月なからんには暗夜ならん、月有れば夜景色も見る事を得るならんかし。

河村君子

「てりもせずくもりもはてぬ」月影にもよほされ、「折とらば惜しげにもあるか櫻花いざやどかりて」とくちずさみつゝ、花の下陰にいでぬ。「かすまぬ波もかすむ」は春の夜のならひなるに、まひて花の白雲うちおほふたねてより、「うつるもくもる」とか云ひけん朧月の、ほの〴〵と見ゆるは、花の上なる花とやいはまし、あはれかくめづらしきけはひを、秋の夜ならねど、「ねてあかすらん」人さへいとうく、我れや花の下陰にひと夜のやどかりて、おぼろなる月の匂ひをめでん、

月ありて花、花ありて月、げに月讀の清き光も、さく花の艶なろ匂ひにあひてこそ●

依田德子

春もやう〳〵ふかくなりぬれば、遲咲なろ庭の櫻も、いつしか盛りさなり、艶かなろ色香は、朝な夕な文窓のながめさなりぬ、夜さなれば花の色さやかなろに、月影のゆかしう宿ろさまはいかならんさ、庭にをりたちながむれば、咲きかさなれろ花の稍より、おほろ〳〵もれくろ月の風情の優なろさまは、ひろの眺めに一しほまして、めでたしさもゆかしさもいはむかたなし、ひさりみろこさのいさほしさに、父母はらからさもなひて、らろはしき月花を賞しぬ、あかぬながめはつきれご、ふさ夜ふけの風の音づれて、二ひら三ひらの花のちり來たれば、そを　殘さしてねやの内にいりぬ●

谷口房子

ねならぬ音の、ふさ窓のうちにかよひきぬれば、庭におり立ち見ろに、けさ晝なりし花は、盛りに咲きみち、月影は山の端をいさよひ出てゝ、おぼろにかすむなさ、いさをかし、此時たが手さひにかあらん、遙に琴の音ぞ聞ねたろ、あはれ、此人も今宵の月かげのめでたきを、花の下にて見はやすならん、なさ、ひさりごちつゝ、うかれありくほさに、月かげはいよ〳〵をかしくうちにほひ、花の色香もいさ〳〵めでたくなり行き、琴の調もいさ妙にすみ渡れば、仙宮に遊びて、天津少女の天樂をきく心地ぞせらろゝ、折しも時計二時を告くろにうちおさろかれて、

我か庭の花の木かげにあこかれて
おほろ月夜をふかしつろかな

村松月子

しめやかに降りつゞきし春雨に催されて、をちこちの花の下紐さけそめぬろのごけさには、霞ならぬ心も浮きたち、打つれて道ゆきかよふ人々のうらやましう思ふ折しも中垣のへだてなき友三人四人、柴の折戸をおさづれ給へり、いさうれしくてこなたへさ招ずれば、あな心なの人や、かゝろよき日を徒らに過さば、花の色香もうつろひて、見ぬ間に嵐のさそひやせん、去年ちぎりし稍も今やまつらん、つもろ物語は今宵なかばの月かげに榮ねまさろ花の下にてこそ、いざさく〳〵さいふ、見れば、手に手にわりこたづさへたり、そゝのかさろゝに、いかでかためらふべき、物もさりあへず、晝過ぐろ頃、さもなはれてうち出でぬ、道すがら摘草などしつゝゆくに、いつしか志ざす岡邊につきぬ、見わたせば思ひしにもまして、數しれぬ稍の花は、げに今ぞ見ごころなろ咲きものこらぬさはかゝろさまをやいふならむ、あまたの人々こゝかしこにむれゐて、おのがじゞ遊び興せり、いづくさもなくあくがれあろくまに、をちかゝろ入日の空一きはあかりて、影なのめにさしたろ夕榮、いはん方なくめでたし、百千鳥ねぐら爭ふ聲かしましく、程なく暮れはてぬれば、たづさへしわりこ紐さきなごしつゝ、今やさまつに、やがてそこはかさなく霞めろ空に、まごかなろ月さしのぼりぬ、折しもわが一群の外は、大方の人々かへり去りて、月さ花さのながめの靜けさ、浮世の外の心地ぞせらろゝ、まして晝の程たちまひし塵もしづまり、てりもせずくもりもはてぬ月かげの、咲き匂ふ花にきほへろさまは、げにしくものもなくねんにうろはしきは、物あはれなろ夜あたりくまなく澄みわたろ光にもたちまさりて、何にたさへんやうもなし、いざやさて、かたみに詠み出でつれご、拙き言の葉の、なか〳〵に及ぶべくもあらで、月も花もはねなしさやかこつらん、折ふしきこゆろ笛の音は、いづこのみやび男のすさびなろらん、興いよ〳〵加はりて、樂はつきず、月さ花さいづれこよひの主さもなく、一夜をこゝにあかさんさ思へご、さまではさてかへりみしつゝ家路をたごりぬ。

佐々有鄰子

久方の月のかつらの花臨ににほふ此ころは、梓弓春の心もいさのごかに、くろへろ駒の手綱はなれて、こゝの高ねかしこのをのへ、さころさだめす朝より夕かけて、うかれうかろものから、疊紙にかきさしたろ歌に文に、いづれも花さきをなり、いさみやびやかにみねけろも

うべなりけらし、わきてゆかしくをかしく筆の花さく詞のふしぶし、げに春ふかくみはつるは、さくら花今をさかりに、くるゝもわかぬ木間より、花やかに月さしいづるころになんありける、あなおもしろや。

佐々敏子

世の人の浮きたつ心をしづめがほなる春雨も、けふはたそがれの頃よりはれゆきて、てりもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜、いみじうをかしかりけり、この面白の夕景色を、ひとり観すごさんも流石に心なられば、いとしきはらからの手を携へ、ともに柴折戸立ちいでつ、庭の踏石をつたひつたひて、とある櫻の下に至りぬ、つくづくと打見やれば、今を盛りと咲きみだれたる花のいと艶なるに、十六夜の月影さしそひて、いやが上にも美しさを添へたれば、恍惚としてさながら塵の世をはなれたる心地せり、

　さくら花匂ふ木の間の月影は
　　浮世のほかのながめなりけり

と誦するともなしに口詠みける折しも、さと吹きくる風に誘はれて、袖寒からぬ雪の、ひらひらと飛びちる様は、また得もいはれぬ趣にて、月宮殿の少女が舞ひくだりて、衣ひるがへすかと疑はる、げに春の景色に、いつれはあれど月の夕に花の匂へるほど、ながめをかしきはあらじかし、と、めでつゝ影ふみわけて、こゝかしこ彷徨ふうちに、月はやうやうかたむき、夜もふけゆくものから、今は殘り惜しくも足をかへして家に入りぬ。

横山柳子

そこはかとなくうちかすみたる前栽の花の梢に、月のさしいでたる、はんになまめかしうて、くもりもはてぬけしき、いみじさはしちかういてゝ打みるほとに、こよひのけしきたゞにやはといひつゝ、友の入りくるに、うれしくて、よき折にこそと、やがておりたちて、花のいろをも月の光をもめて、かたみにかたらひ、あるはながめおふ折しも、さとふくかぜに、一ひら二ひらちるさまは、花にむつるゝ胡蝶にか、はた月にうかるゝ人の魂かと、しばしたさらるゝもをかし、秋の空のすみまさりたるよりも、かへりてろうろうしきかげのみところおほき心地せられて、げにしくものもなきよのさまなりや。

前橋のぶ子

「月の桂も花や咲くらむ」と歌み給ひしも、實に今宵の様子やありけむ、櫻花は今を盛りに咲き亂れ、空には月さしのぼりて、前なる池に輝き、一層の花を増して、櫻花に映ずる様、いと面白し、げに月こそ春の光りなれ、微風吹き來たれば、二ひら三ひら袖の上にちりかゝれるも嬉し、花は年毎に咲き匂ふとも、かゝる樂しき團居はあらで、天上の玉兎は招かんとする様に見ゆ、月下の櫻花は語らん様なるに、俄に月に掛る雲も心ありげなり。

塙いさむ子

空すみ渡り光さやかなる秋のよころは、さるものながら、月影の今一際心のさかなるは、なかなかに朧月夜ぞ面白き、なべて薄霞たなびける山の端を、おぼつかなくもさし昇りたる頃や、すゞろみやび心の浮き立ちて、好める文さへよみさしながら、外面に立ち出でゝ、月影も水の流もすみ田川原の堤にさまよひぬ、まづ向ひの岸沿なる家居の燈火、水面に映ろひてきらめくさま、いとをかしきに、そよ吹く風の香さへなつかしく、櫻の花のいと艶に咲き亂れたるが、梢に積る白雪ともまがふに、春の夜のあはれを深くこめて、花にあやなす久堅の月の桂の花も匂ふばかり、目もはるばるといとゆかしうて、げに一年のながめを集めて見る心地ぞせらるゝ、されば

　ふりつみし雪とまがふる櫻木の
　　花に匂へる月のかげかな
　春の夜のあはれをこめて霞む也
　　花の木の間に宿る月かげ

など口吟みぬ、かく嬉しきまゝの、日頃心にかゝりし浮雲もまたく晴れて、ひたすらあこがれて、そこはかとなくたどるに、折しもあれ淺草寺の鐘の音霞をわけて聞ゆるが、いとあはれなるを、かことになし

て、散る花あるも何となく心ありげになむ、はや夜もふけぬべければ、さまではとて、しかすがにあかぬ名殘を惜しみつゝ、かへさに就きぬ。

佐藤喜代子

さなきだにうれしき此頃を、文窓にさと吹き入る風の、えならぬ香に心ひかれ、庭に下りたちてそゞろありきしゝ眺むれば、今を盛と咲き匂ひて、深き色香をこめ薄紅にほゝゑめる櫻の花のめでたきに、ひたすらあこがるゝ折しもみきはなる柳の眉も細やかに光りそめつゝ、眞如の月のさし出でゝ、花にあやなすさまのいよゝうれしく、めでたきゝはみよと、あかでながむるほどいと〳〵なつかしうてなむ。

宮古志津子

夜や更けぬらし、いざ寐なましと、讀みさしたる湖月抄に栞して、燈火吹きけせば、南の圓窓にうつりたる花のかげ、さながら一幅の墨繪の如し、障子開けば、いつになうさへたる月は、老木の櫻の梢にあり、花やきそへる、月や招ける、兩々今や春色をかたらんとす、微風枝に渡れば、落花繽紛として暗香袖を掠む、手なれの琴を奏づれは、潑剌たる緋鯉は、俄に靜なる池の面に龍文をなす、花なくば月に淸香なかるべく、月なくば花に影なかるべし、花や今宵のあるじか、月やそも。

小杉ひさ子

月は水によりて一入の見ばえをそへ、水は月によりて一際見榮を増すとのみいふあれど、月は花によりて返りてみやびなる人少なし、まして花といふ花はあれども、日の本の春の光りの櫻の下に、しろ〳〵とさへわたりたる月をほめはやすをかしさは、何にたとふべくもあらず、頃は四月の某の日、友ども三人四人語り合ひ、我が園生の櫻が下に春の月をほめはやさばやと集ひより、むしろの上に坐りて、月の昇るを待ち居ぬ、やがて月もそろ〳〵と東の山の端に出でぬれは、まづ櫻のかげのひめ垣を越して、隣りの庭に映るもをかし、折節、夕風そよ〳〵と吹き來れば、櫻の花の二ひら三ひら、むしろの中に散りかゝるなど、あるは傍の草葉の上に露の滴か、るりの玉を置きなせる如く、光り居るなど、げに仙人の境もかくやあらなん手をうちつゝほめはやすもあり、あるは常に詠みて興をそふるもあり、時にひとりの友のいひけらく、かしより、此月を見ては、亡き父母や夫を想ひ、哀れの涙に袖をしぼり、あるは此櫻を見ては、昔の榮華を想ひやり、あらゆる辛きめを物の數ともせず、わが族のためにつくすなど多かるに、われ等は今日の前に月と花とを見て打ち興ずれば、そゞろに過ぎし、むかしの忍ばれて、いとゞ哀れに思ふなり、いで之よりは女の道を守りて、淸く潔きそ月にたぐひ、美くしく、みやびなるを此花にたぐひてんと、各々興じつゝ、ありしに、夜も追々とふけぬれば、みな〳〵、わかれを惜みつゝ、歸りの路につきにけり。

河原芳子

秋の夜の月の、淸くさわやかなるもをかしけれど、また花に枕して眠るが如き春の夜の月も、一しほの興ありけり、打ちかすむ花の白雲ふみわけて、そこはかとなくさまよへば、いかに床しきことなるよ、花の姿の艶なるに、をもはゆげなる月の俤、さてもをもしろきこのけしきや。見渡せば、動くともなくしづかに流るゝ水の面に、ちら〳〵と、花のちるなど、朧氣の中にながむるは、こよなふをかしきに、あゝよき月夜やと、かすめる空をあふぎ見る折しも、かすかにもるゝ、广金の聲。

吉岡歌子

如くものなしとか云ひ置きけん、朧月夜の艶なるに、花の影さへうちそひたる、今宵の樣は、はた何にかはたとへん、あたら夜の月と花とを口吟みつゝ、下階に下りたちて、眺むる袖に、二片三ひら散りかゝる落花のさまも、月にはえていと面白うあはれなるに、吹きくる風も香に匂ひ、雲と見まがふ梢より、洩るゝ光の朧なるは、すみわたりたる、最中の月よりもあはれ深く、げに似るものなしや、しかはあれど、この月にしてこの花なく、花ありともこの月なくば、かゝる趣あるべしやは、げにあたら夜の月花やと思ふにつけても、同じくば心しられん人に見せまほしきぞ、まことに人の情なるや。

賀屋霧子

春の夜の月影朧に霞み、こち吹く風長閑に送り來れば、今を盛と咲き

満ちたる櫻花は、ゆかしきかをりを放ち、月と相映じて、一入の風姿を粧ひ、其さま、さながら梢に雪を措けるが如く、あたら仙境に入れるが如き感あらしむ、かくては、朝の櫻も物かはと、うとまれぬるを、花に朝夕のけぢめやあらん、月かげ限りなく愛らしければこそ、花も餘澤を蒙り、人に賞せらるれ、月はこよひの主にして、花は客ならんかし。

宮崎せん子

頃は彌生のなかばにて、そよ吹く風も寒からず、天ほがらかに霞亘り、さす日の影さへのどかにて、庭前の百花紅白の色をあらはし、我おとらじと香をきそひて咲き匂ひ、さながら唐錦を織りなせるが如し、かゝるながめの時なれば、思はず知らず、花の下まで歩をすゝめ、やがてさ枝のかげに立ち寄りて、花を見天を仰げば、一輪の朧月早く東嶺を離れて、庭際に渡り、花月相映して、夜ならざるが如し、花に月なくんば艶を増さずとかや、思ひかゝりしむら雲のたえま〳〵にもれ出づる月影、光さやけき姿をあらはし、なかしさもなかし、あはれ此月の風景、誰か賞せざらんや、今宵は妾も花下にて此月を賞せん。

姫野いゑ子

高峰にすめる秋の月の、いともけたかくけうらなるを、年の内の月めでたき限りとは、いひもてはやすめれど、時にとりては、又春の月のかすみの内につゝまれ、花の色香をとりそへて、おぼろににほへるも、あはれならぬかは、それかあらぬかと、よびかはす友の聲も、すかたも、ともにおぼろなるぞ、いひしらずなつかしきや。

高砂き代子

つれ〳〵と降り暮したる春雨の、よひになりてゆくりなく晴れ渡れば、やがて東の山の端より、いざよひの月いとはなやかにさし出でたるは、いひしらずなつかしきに、庭に植ゑ渡したる幾本の櫻、今ぞ花の眞盛にて、春雨の名殘の露のおもげに置きたるけはひ、又いひしらずあはれ深し、かゝる朧夜を、たゞにやはと獨、獨りごちつゝ、やをら庭になりたちて、花の木陰に、端近うたゞずりつゝ、玉琴取り出で、掻き調も我のみなればと、掻き鳴らす折しも、垣の外より人のつぶやく聲聞ゆるに、ふと、おどろきてすかし見れば、まさしくも、日頃親しき友にぞありける、こはゆくりなく訪ひ給ふものかな、此の月花の景色を獨りながめんもあまり心なし、ともに今一調せばやと、筝とり出で合はするに、ねならぬゆかしさまたなく覺えて、照りもせず曇りもはてぬ月影も、しばしは淀み、梢の花も散りなん心地せられて、自から昔しの事ども忍ばれつゝ、古へ某大人の「朧月夜にしくものぞなき」と、うたはれしも、げに此頃の月ならんと思ひやられて、ねもいはれず、此の景色を心ある人に見せばやといひ出でんもはしちなき事になん。

戸塚鉄子

ふりつゞきし春雨、けふしもやう〳〵はれたれば、今よひの月やいかならんと思ふほどに、いとまろやかに出でぬ、二本三本の庭の櫻、世の春におくれじとほころび出でたる、いとにくからず、未だちりも初めずさきも殘らぬさま、何にかはたとへん、さても〳〵うるはしき花のすがたに、まして此てりそひたる月影に、一きは色まさりぬ、世の中に花のみにて月なく、月のみにて花なくば、春のながめはいかにせん二つながらありてこそ、諸人の心ものどかにうきたちてをかしき事もあるならめ、實に月と花とは千代もかはらぬ友垣にこそなと思ひて、木の下陰にながめゐれば、いとゞあくよなくてなん。

降田槇子

あはれ今宵はそも如何なる良夜ぞや、花は盛りに月は圓かに、たゞ恨むらくは、春の習ひとて、少しく霞を帶びたるなり、されど、照りもせずくもりもはてぬ春の夜のおぼろ月夜にしくものぞなきとかや、こもまた一段のながめになん、今を盛りと咲き亂れたる花の梢にかゝれるを、木の下陰より仰ぎ見れば、さながら紅の薄絹もて包みたらん玉の如く、花は其光りを受けて、いときはやかにはあられど、なつかしう匂ひこぼれ、笑めるが如く語るが如き風情、げに筆にも言葉にもうつし難く、如何なる畫工も、この艶に麗はしき景色をば、物し能はざるべしと、しばしは我を忘れてたゝずみたり、あな見ぬ人の家つとに、一首をこゝろみ

ばやと、一人の友のさゝやくに、しばらく沈思默考すれども、拙き言の葉にいひ得らるべうもあらねば、皆々口つぐみ、たゞ古き歌など口ずさみつゝ、咲き續く花の下陰を、彼方此方あこがれありき、見れども見れ　も、あくことなければ、いで村雲のおそひ來て、あたら月かげをかくさぬさきにと、名殘惜くも、心をば月と花とに殘して、家に歸り、燈火かゝげ、文机に向ひて、ありし景色の忘られぬまゝ、後の思ひ出にとてかくはしるしぬ。

日吉あさ子

げに、一刻千金の名に負へる此夕よ、曇りもはてぬ月は、昨日今日雲かと咲きそめし花の匂ひにかすみつゝ、梢おぼろにてらせるさま、朝日に匂ふより一しほまされるは、心あひの友などうちよりて、へだてなく語らふ樂しさよ、つみ出づるあやしの言葉も、匂ひあるやうおぼえ、もてあそぶものゝ音の拙きしらべも、すみ渡れる心地して興ずる　うちに、いつしか西になる影のうらめしく、あはれ今宵のみはなど願ふも、山の彼方の人の心くまぬしれ者の常なりや。

高屋はきの子

春と云へば、咲き出づる花の多き中にも、四月の頃時知りがほにほころぶるやさしき櫻花こそ、いと嬉しけれ、今日しも幸ひ日曜日にて、空晴れたれば、何くれと用事を整へ、學びの友垣いざなひて、夕つかたより夜櫻見に物せしに、かゞり事々しうたきて、見る人の集へる中を避け、宮居の後にまはれば、茲に木立ものふりて、いとうるはしきが一本ありけり、くもりも果てぬ月の、さかりの梢を照せる樣、花の色香も一しほになん、あはれ此月なくば、かくゆかしき花の盛りもしらで、かのさわがしき中に立ちましるべきに、こよひの月に、いかばかり姿を樂しましめしよ共に語らひつゝ、しづの伏屋に歸りて、拙なき筆以て書くになむ。

宮西嘉子

月といへば、古より秋のみに限りたる如くなれど、雲かとばかり怪しまれぬる花の上より、かげもさやけくもれ出づる月を望み見ば、心もおのづからさは〳〵しうすみ渡りて、いとも嬉しき眺にこそ、此頃は、人の心もおのづからうき立ちて、思ふどちかひつられ、終日花にあくがれありき、夜に入りては、夜櫻を眺めばやと數多の雅人杖を彼方此方に引き合ひて、いづこも春ならざるはなし、さはあれど、隅田川の夕景色眺めつゝ、堤の花の下にたゞずみて、月影の水にうつりてきらめくもをかしく、花のまよりきら〳〵と目もまばゆきばかり、花のひとしほ美くしさをますも月にこそ。

早川重子

春さかりなる頃とて、柳もみどりの糸よりかけ、庭のさくらもほころべば、蝶たちてまひ、花もよき友といよゝはみわたりたる此頃、やう〳〵けぶりいでたる若草ふみわけ、花のもとにつたひ〳〵、こよひ弓張七日の月花のこの間にさしいでたるは、柞のもみぢならねど、さきものこらずちりもはじめぬ花をゝしみて、よるさへ見よとてらす月影かなと、をかしう又ひるまの雨のなごりの露に、月のきら〳〵とうつりたるは、玉と見まがふべく、つれきし妹は、あれ姉上のかほのあかきことよ、月の花にうつりてなど、花と月とに見とれつゝ、夜のふけゆくもしらざりけり。

水原夙子

今日しも春雨靜かにふり夕たうべ終れば漸く晴れ渡りぬ、ふと眼に注ぐ庭の駒下駄、思はず椽を降り來れば、露になやめる海棠の、眠氣なるに引きかへて、今日を盛りと咲き滿ちたる花の下にて、犬は尾をふりて喜べり花は風のために二つ三つばかり散り初めにけり、神よ吹きな亂し玉ひそと祈りつゝ、そゞろありきしけるが、折しも梢をもるゝ月のほのかに見えたれば、玉なす露に月宿り、えも言はれぬ樣になむなりにける。

北原季子

いと清らかに晴わたりたる今宵の月を、いでや雪花と共に見はやさ、庭におり立ちて、今をま盛なる花の下かげふみ行けば、わが庭とも思ほえぬまで、かつ〳〵咲いてたるが、咲くとしもなき春風なれど、此

ゆかしきかをりは、そもいづこまで匂ひ送るらん、げに大きやかなる櫻のたれかゝりたる下より仰ぎ見れば、一重八重に咲きいでたるからに、月の面はかくれて見えねども、まのあたり霞たなびきわたりたる心地せられていとをかし、はるかにこれを打見やれば、さながら白雪の降りかゝりたるかとあやしまれたる、げにいひしられぬけしきになん、古へより、月雪花とほめたゝへらるゝもうべなりけりなと、しばし打ながめゐし折しも、さと吹きくる風に、落花の一片二片ちりくればおのれ雪かと袖打はらへば、衣手までかをるもいとをかし。

勝山忠子

晝は花、夜は月こそと、母上に誘はるゝまゝ、今宵月長閑なるに門までもと出で來つるものを、いつしかうかれて、向の岡なる櫻の木陰に來たりけり、見渡しはあさみどり花のけぢめなく、朧にかすみ果てたるに、薄きぬにつゝみしむにも似たる月影の、花よりもなか〳〵に紫る心地して、身の花陰に伏せるを忘れたる、いとをかしうなん。

殿村直子

昨日けふ庭の櫻もやう〳〵盛りなるに、鶯さへ友をもとめつゝなきて渡るめれば、大方麓の花も咲きつらん、谷のつぼみも赤うなりぬらんと、花の上のみ思ひつゞけつゝ、人待ちがほなる折しも、たれこめて春の行ぐへのといひつゝ入りくるは、兼て隔てぬ友なりけり、今より花見は如何にとそゝのかさるゝまゝに、いつこともなくさまよひありくに、彌生の空いとうらゝけく、遠山の端の霞みわたれるたゞずまひいとをかし、春の色のいたらぬきはみなきに、やう〳〵ある山の麓にいたりぬ、思ひしにもたがはで、今を盛りとさきそへる風情、げに雪か花か、はた白雲か、峰にも尾にも色香いひしらず咲きたるさま、めでたしともめでたし、されば、此花の繪にかきておとるものと、清少のおもとのゝたまひしも、げにやなど打語ひつ、木陰にやすらへば、いつのまにか、日ははや西にかたふきて、茜さす夕ばえの匂ひいとゆかしきに、人は皆かへりつくせば、あたりいとしづけきに、かすかに木の間をとほして聞ゆる琵琶の音、かゝる山里に如何なる人のすさびならんと、昔におぼえていとうなつかしきに行きて聞かまほしう思へど、さすが花のもとも去りかねて、其のまゝにやみぬる、霞もすこし晴れて山ぎはのあかるくなるは、月の出づるなりけり、色ふかき花に、月も恥じてか、かすかにかげかくしたるは、さやけき秋よりもまさりてうるはし、花の色もひときはなるに、腰ばかりのもの取りつけたるも恥づかしや、さてもかゝる景色を打すてゝ歸らんは、いと心元なし、いでや此よひはこゝにと思へども、つとめある身の、ひくもなしかぬれば、月花になごりはいたうつきせれば、又の日を約して、かへれば、おぼろ月夜のかげほのかにわが身を照らすも又あはれなりや。

澤藤香子

讀書もやう〳〵倦みたれば、やをら庭におりたちて、そこことゝと歩みつゝ、行くともなく築山のふもとにぞ行きける、まづ傍なる木根に腰打かけて、あたりを見まはせば、嬉しや、昨日まで咲かざりし櫻の、四ツ三ツ五ツ咲き初めゐたりしかば、木の下にかけ行きて見あぐれば、南の枝は吹く東風にや誘はれけん、今を盛と見ゆるまで咲きぬ、打まもる程に、心も消えぬべう覺ゆる折から、彼方の枝の彼方に、照りもせずくもりもはてぬ月かげの、おぼろおぼろとしてかすかなる影は、佐保姫の霞の衣につゝめる球ともうたがはるゝ、まして花の上を照す光のかすめるは、何とかいはまし、うべいにしへのもろこし人は、春の夜一刻千金と詠じ、燈火とりて夜の遊びをなしたりとかや。げに月の眺めはいと多けれど、花下の月にまさる眺めは、外にあるべうも思はれずなん。

服部錦子

昨日とばかり思ひて、今朝も忘るゝ永き春日の空ものどかにて、降りつゞきたる雨のあくみにもれて、野邊の若草の萌え出でたる、あるかなきかに煙立つにやとまがふ糸遊の、青柳のいとのみだれにむすぼゝれたるもをかし、野邊近ふ家居せる友の許より、今日こずば明日は雪とぞとて、文おこせければ、いそぎまかりしに、園の櫻の明日になりなば

花にては見ねましさて、圖になり立ち、花にましりてあかず眺めしに、花の影よりさし出でる月のあはれは、秋にもをさ〳〵おさらで、又一しもの眺にこそさて、いさめでたきは春の月になん、見る春毎の月に變ちれご、光のあらたなる櫻に覺ねていみじかりけり。

河越てる子

ひねもすあそびくらしし花のもさの、いまさらにたちさりがたう、なほうち眺むるに、やがてひむがしの高ねのごかに月さし出でぬ、匂ひあへる花に、あらそはぬ光の、くもりもやらずてりもせで、そこはかさなううちかすめる、そが丶げなうつすなる池のおもて、さゞ波のあやをるなご、いさめづらしう、さながら忝にかいたらんようなるは、げにしくものなうあはれになん、くる丶を惜しさはなにおもひけん、匂ひはたもの丶ねも、たゞ夜ぞさ、いにしへの人のいひおきける、うべなりや、あはれ秋ならねごも、みにしむばかりをもほねて、なつかしきをぼる夜のけしきかな、千々のこがれにも、いかでさこそ、

ひめもすにみれさもあかぬ花の上に
　たちさりかたのつきもにほひて

冬野小雪子

春もや丶ふかく成りゆくま丶に、人の心もひさきは浮き立ちて、花の便りも聞きたき物さ思ふ折から、幸ひ今日は日曜日にて、わきて空はいさ長閑にはれて一天に雲もなきに、只内にのみ籠りて物うく日を過さんは伍いなきわざさ思ひ立ち、親しき友さち三人四人互に袖をつられて、公園に花見んさ出てゆきしに、今日を盛りさささ匂へる花のいろいろあろ中に、ましていさ香しく朝日ににほへる櫻花、ひら〳〵〳〵さちりきて瀬のうちにまみれて花の行方知れずなるまでは いさ惜しむべく思ひ、あるは風雅の人の歌よむもありて、さり〳〵に喜び合ひて、心ゆたかにかへさわすれて遊びしが、日は全く暮れゆき、ほのかなる月出て丶、花見車も數少なになり、程なくさやかなる月の光に照らされて花ちる樣は、あたかも時しらぬ雪かあられのふるかさあやしまれ、人の心もいさ清らかに覺ゆ、世に花月の遊びばかり愉快なる物はあらじかし、其佳なることは拙なき筆にはしるしがたし、よりて一日を面白く暮して、途に歸路に向ひぬ。

作波不佐子

わが庭の櫻花も、今を盛りさなりたれば、さくおはせよさ、山里の友よりの消息に、午すぎたれご、一夜の宿りせましさゆくに、夕暮の程つきにけり、よくこそさて、庭の方に誘はる、今やゑみかたまけし櫻の、ひらくさ夕風にさそはれしもをかし、こを見つ丶、昔がたりに時を過ごせば、花ごも、何時さはなく光りかゞやきぬ、あやしご見るに、いつしか月はほの〳〵さのぼり來て木末にか丶りたるさま、たぐひなくなむ、これ見て、歌をよませや、いな學ひきませなごいへば、いな〳〵、神も動かさなん、歌ならばよし、音ならばよし、なまじひなるはいかでこのめでたさをけがすのみなるが口をしさいふ、げに月もをかし、散りたるは雪さも見まし、君をも友をも、この時ぞ、何時よりもいみじう忍ばる、古への兵衛の藏人こそなつかしうおぼねけれ。

楠正行母

畠山千代子

君の爲めさていさぎよく、湊川原にうたかたの、あわさ消ねにし我夫の、血汐した丶るかうべをば、いだきしめてぞなき沈む、母の涙を汲みたがへ、教へささし丶その父の、言の葉までも打忘れ、をさな心の一すぢに、此世を捨て丶父の跡、追はんさせしをたらちねの、母はなみだをせきさめて、忠さ孝さの道をさき、はやるな我子今しばし、散るべき時の來るまでは、君に仕へよ父のごさ、あ丶母そばのいさ深き、情の露のか丶らずば、空しく散らん若櫻。

肥後國無量山西福寺龍登上人の八十八歳を祝ひて

徳永萬壽子

さよさかにみのれる米のかずよりも
　きみがよはひはかぎりなきかな

澤田春子

さしごさに米のよはひをつみかされ
　千五百長秋きみはますらん

粿米を佛の鉢にもりあげて
　無量よはひかされますらん　佐々小琴子

富草の花の實になる米俵
　山よりたかきよはひへまさん　佐々有鄰子

ますにもる米てふものゝかずよりも
　きみがよはひははかりしられず　坂本遊多歌子

谷間梅

誰か植しものにやあらむたにかけに
　かをりもふかき梅のひともと　小森滿佐子

春野遊

うなゐらとすみれさく野に打出てゝ
　けふのなか日もくらしつるかな　高橋亮子

花盛

こまなへていさみにゆかんさくら花
　くらまの山はいまさかりなり　久保井くら子

處々花盛

いつれよりまつふてゆかんさくらはな
　たつた小倉もみなさかりなり　仝

早蕨

山人にとひてやみましさわらびの
　もゆるあたりはいづこなるかと　綿野りき子

春曉

鐘の音もとほくかすみてきこゆなり
　うとましからぬはるのあけほの　仝

折にふれて

ひめ松の千代の榮ははれかへとも
　みさをにならふ人そすくなき　谷口房子

霞

うら〳〵とかすみこめたる空にこそ
　さやかに春の色は見えけれ　仝

梅遠薫

はる風のさそひきぬらんめつらしく
　そこともわかす梅の香そする　彦坂たか子

社頭雪

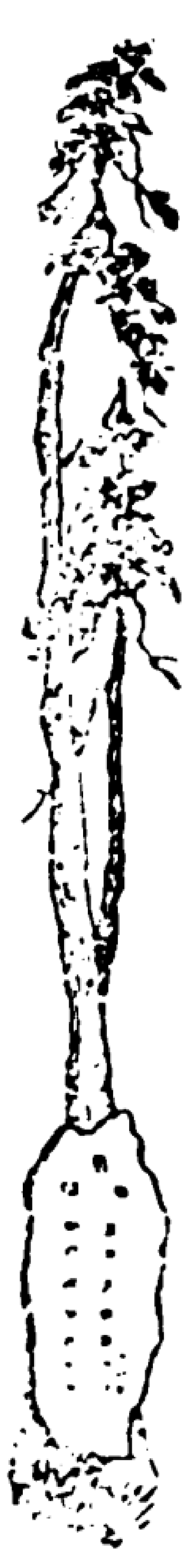
いつくしと誰か見さらんいつく島
　ゆきふりつもる朱のたまかき　山田璋子

細川忠興の夫人の傳を讀みて　谷口婦佐子

ある夜燈火をかゝけ、埋火をかきおこしつゝ、細川忠興夫人の傳を讀み、はやう母上の膝下にありて、この物語を聞きける事ありしか、その時をさな心にも、いと哀と思ひたりけり、今此の傳を讀みもて行くに、いとゝ哀にも悲しくもおほえ、又みさをの正しさをも感せられて、覺えす袖ぬらしぬ、あはれ、この國をおきては、かゝる節義の高き婦人は、いつこにかある、あはれ、此婦人をおきては、操の固き婦女は、いくはくかあるなど、ひとりごちつゝある程に、いつしか夜もふけゆきて、燈もほそうなり、埋火もはひかちになりて、軒はの松の木枯にあらそふ音いとはけし。

雪のあした　綿野りき子

夜半の程、かぜいたく吹きすさびしが、曉ちかくしづまりぬ、ねやもる風のつめたきは、雪にやなりにけん、起き出づれば、見渡すかぎり、白かれの野邊、あれはてたる庭も、玉しくなかめとはなりぬ、腐これる松に積れる雪は、さなからたづのむれて遊ふかとあやまたれ、枯木にまで時ならぬ花さきて、めでたしともめでたし、なりしも誰かすさびならん、何處ともなくもりくる笛の音は、高くかつひくゝ、實に此世のものとも覺えすなん。



續日本歌學全書

全部拾貳冊　紙數壹冊五百頁以上　毎月壹回發行

東宮侍講 本居豐穎翁序　佐々木信綱君編

第九編

近世長歌今様集

寫眞銅版（●賀茂眞淵翁長歌眞蹟 ●本居太平翁長歌眞蹟 ●足代弘訓翁長歌眞蹟 ●鹿持雅澄翁長歌眞蹟）

全壹冊洋裝美本
紙數五百貳拾餘頁
正價金參拾五錢
郵税六錢

本書に収めし近葉菅根葉は、長流契沖眞淵門下の作の長歌を、清水濱臣のあつめしもの、藤垣内集は、太平翁の長歌集にて、未だ刊行せられざりし書ゐでのや集は、京都ゐでのやに人々あつまりて詠出せし長歌を、太平翁の撰ばれしもの、寛居長歌集は、足代翁の作、山斎長歌集は、萬葉集古義の著者、鹿持翁の家集にて、世に公に成らざりし珍書なり。またゆらむろ集は、神奈川の僧、辨玉の家集、櫻園長歌集は、中津なる渡邊翁の家集、今様歌集は、故佐々木翁の撰なり。以上數篇は、新體詩など學び、長篇の歌など詠ぜんとする人の必ず座右に備ふべき良書なり

續日本歌學全書總目次

- ▲第壹編 賀茂眞淵翁全集上
- ▲第貳編 賀茂眞淵翁全集下
- ▲第參編 本居宣長翁全集
- ▲第四編 香川景樹翁全集上
- ▲第五編 香川景樹翁全集下
- ▲第六編 小澤蘆庵翁全集
- ▲第七編 近世名家家集上
- ▲第八編 近世名家家集下
- ▲第九編 近世長歌今様集
- ▲第拾編 桂園門下家集
- ▲第拾壹編 明治名家歌集上
- ▲第拾貳編 明治名家歌集下

定價○壹冊金三拾五錢○六冊前金壹圓九拾錢○全部拾貳冊前金三圓七拾錢○郵税一冊八錢

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

孝明天皇御遺徳

先帝御製御歌挿入　全一冊　●定價廿五錢郵稅四錢●

恭く按するに畏くも　孝明天皇は[illegible]古今不出の英主に[illegible]聖徳[illegible]外類[illegible]寂[illegible]秘[illegible]此書[illegible]仕[illegible]卿[illegible]遺[illegible]聞[illegible]以て[illegible]網羅[illegible]庶幾くは[illegible]聖徳を推[illegible]萬一を[illegible]本書を發[illegible]左の如し

御一代　の章を掲げ編年体を以て降誕より崩御に至るまでの事迹を示し

聰明　の章に於て先皇の英明絶倫なるを概説し

成　の章は御幼時の御言行を示し

慨　の上編は朝廷挽回の事下編は皇權恢復の事に其叡慮を惱まされたる事蹟を叙し

憤　の章は獨り至尊をして社稷を憂へしむの實情を寫し

御　は識見卓出の實際を明らかにし

達　は言路洞開の聖德を輝かし

耐　は艱苦の時に當り供御非常に儉に或は以下の御諸用に金を寄し給へる等の御稜威を示し

愛　は惻隱仁恕の御心甚だ厚かりしを明にす

前數章に配置する能はざる逸事は總て之を雜事の一章に網羅し以て先帝の聖徳を頌し奉る

國民たるもの必讀すべき良書なり

東京橋區築地二丁目廿一番地　（電話新橋八八）
發行所　國光社

副島蒼海老伯講話

有神教育 全一冊

定價金[illegible]錢 郵税[illegible]

この書は一教育の大本は徒らに[illegible]なる形式の末を離れて專ら正心誠意に存する[illegible]神の妙用[illegible]を記せるものなり。其の忠孝の大義を發揮して本邦[illegible]の[illegible]を[illegible]し[illegible]の工夫を[illegible]し。宇宙の神秘を窺ひて至誠の天の[illegible]の倫理教育の[illegible]

神教育の明鑑[illegible]

國光社出版發賣所 [illegible]

國光社譯述

獨逸讀本抄譯

定價金貳拾錢
郵稅金四錢

獨逸は、教育の最も普及せる國なり、學問の國なり、實業の國なり、教育の主義は彼我國情を異にするも、教科書たる事實の撰擇、序述の文體等、其方法に屬する者に至りては、玉を琢くの好資料となすへき者多からんとて、熱心忠實なる教育者諸君は、獨逸讀本の譯述を促せし事、一再にして止まらず、本社も亦斯道の暢發を以て自ら任する者なり、豈他山の石たるを期せさらん、寸毫たも國家を裨補せん事、輾轉忘るゝ能はさる所、延勞敢て辭する所にあらず、されば、本書は、獨逸最近の讀本を渉獵し、精粹を拔きて、精を擇び、勉めて原文の眞義を發揮するを主として、抄譯したる者なり、教育者諸君之を得て座右の好參考に供すべく、學生諸君之を得て朝夕の好良友となすべく、彼の國教育の實質を窺知するに於て、百千部の教育書、心理論に優れること萬々なり、若夫れ文の流暢にして趣味多きや否哉、事實の新奇にして實際を遠さからざるや否哉、少年文書か如何に發達せるや否やは讀まん者よく知得べければ、略しつ、

發行所　東京京橋區築地二丁目二十一番地　國光社

芳賀　高崎正風先生序　　本居豐穎先生序

故富士谷御杖先生述

土佐日記燈

大和[illegible]

全　自一卷至八卷　一千五十頁　合三冊

正價金一圓五十錢

郵送料　附稅郵便三十錢每小包　十里迄七錢百里迄十二　百里以外廿四錢

本書發行の由來

富士谷御杖の翁斯の道の學に至り深かりしは今更にいはず、そのものせられし著書はれかるが中に燈といふもの、古事記燈、萬葉集燈は翁か在世の頃に之ゝ卷となりて、世に廣てりしも、この土佐日記燈は早く文化の末つかたになれるものなるか、さるよしありて時の栗田の宮の請はせらるゝに、稿本のまゝ奉られしを、後いくはくもなくて翁はみまかれしかは、さなからに埋もりて流布せずなりにき、世の學者見まほしふすれども、さるよしもなくて空しく年經ぬることを茲に數十年、さるを翁の男元廣ぬしか、さるべき筋より辛うして寫し傳へたるを、いとうれしくて、こたひ我社にて、摺り卷にものして廣く世に流布せしめてんとす、抑々此燈は世にありふれたる註釋書の類とはことにして、貫之朝臣のこの日記を書かれしは、かりそめのすさひにあらす、土佐の守に任されしを深く憤る由ありて、あらはには女のものせしさまになし、深き心の言葉のうちに、ふくめたりといふを、本として言詞は更なり、文意をもいと委しく解なしなからいと廣く考證をも引き出でられたり

謹告

本書發行の儀豫に報告せしより續々御注文に候處聊か差支これあり製本に意外の日子相費し申候今回完く整頓相告け茲に發賣致候大方の君子陸續御注文あらんことを

發行所　東京京橋區築地二丁目　國光社

賣捌所　各府縣書肆

最寄書肆に無之時は直接本社へ御注文被下度候

明治三十二年四月五日印刷
明治三十二年四月七日發行

編輯兼發行人 東京京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衛

印刷人 東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地 並木昆雄

發行所 東京京橋區築地二丁目二十一番地 (電話番號新橋八八) 國光社

（明治二十四年八月四日內務省許可）
（明治二十五年三月十二日遞信省認可）

（印刷所東京國光社印刷部）